GRAPH MAGAZINE ONLINE

Lapiz

2019 Spring Free
Vol.30

絵本 どどたん
湖北の神事 おこない
サハリン紀行
リニア中央新幹線はいま
ジョセフ・ヒコの幕末維新

銃を持つ少女

Lapiz （ラピス ） はスペイン語で鉛筆の意味。
地球上には、一本の鉛筆すら手にすることができない子どもが大勢いる。
貧困、 紛争や戦乱、迫害などによって学ぶ機会を奪われた子どもたち。 鉛筆を持てば、 宝物のように大事にし、字を覚え、絵をかくだろう 。

世界中の子どもたちに笑顔を。
Lapiz にはそんな思いが込められている。

Lapiz

Index　2019春号　Vol.30

2019/3/1　発行　Free

巻頭言　**3**

CoverStory　ロシア・サハリン州立美術館
主任学術研究員 オルガ ニコラェウナ さん　5

明治 150 年企画
ジョセフ・ヒコの幕末維新⑤　**8**

島田アピール　34

びえんと　**40**
とりとめのない話　**45**
原発を考える　**49**
breath of CITY　54
砂川闘争の現場を訪ねる　60
［リニア中央新幹線はいま］
静岡県と JR 東海の協議進まず　68
人物時計大阪ぐりぐりマルシェ　**73**
宿場町　東海道・三島宿　**77**

小田真のドローンの世界 83

徒然の章　89
サハリン紀行　95
ミナミ気圧　**123**
三匹が撮る！　127

湖北の神事　おこない　**162**

神宿る。　文樹　172

絵本　どどたん　177

編集後記　208

表紙

オルガ ニコラェウナ

詳しくは CoverStory を参照

巻頭言

Lapiz 編集長　井上脩身

今年４月３０日に平成の幕を閉じるのを機に、「平成とはどんな時代だったのか」との問いかけ企画がマスコミを中心に盛んに行われています。その多くは「災いの時代」でまとめているようです。阪神大震災が平成７（１９９５）年に発生、同２３（２０１１）年には東日本大震災が起きており、確かに妥当な判断といえるでしょう。しかし、世界有数の地震国である日本は、関東大震災をはじめ過去何度も大地震に遭っており、平成の間だけが地震時代だったわけではありません。むしろ平成が始まる３年前の１９８６（昭和６１）年にチェルノブイリ原発事故が起きていることを注視すべきだと私は思います。「原発は恐ろしい」との警告を受けて平成の世に入ったのに、「わが国の原発は安全」と耳を貸さず、揚げ句、東日本大震災にともなう津波によって福島第一原発事故に見舞われたのです。私は平成を「原発攪乱の時代」と考えます。

原子力に関して平成は元（１９８９）年３月３０日、核燃料サイクル政策の一環として、日本原燃サービス（現日本原燃）が青森県六ケ所村の使用済み核燃料再処理施設の事業申請をしたときから始まりました。原発の使用済み核燃料を再処理してウランとプルトニウムを取り出し、混合酸化物（ＭＯＸ）燃料に加工して再利用しようというもので、国はＭＯＸ燃料を一般の原発で使って発電するプルサーマル計画に力を入れました。

一方で国は、発電しながら使用料よりも多くの燃料を生み出す高速増殖炉の開発を目指しており、平成６（１９９３）年、福井県敦賀市の高速増殖原型炉もんじゅが初めて臨界に達しました。ところが翌年１２月８日、もんじゅでナトリウム漏れ事故が発生。もんじゅで冷却に使う液体ナトリウムが漏れて火災が起きたのですが、事故を撮影した映像の一部が公開されなかったことから「情報隠し」と批判され、運転停止に追い込まれました。

このもんじゅ事故が原発事業の暗転の始まりだったように思われます。平成９（１９９７）年３月１１日、茨城県東海村の動力炉・核燃料開発事業団（動燃）東海事業所再処理工場で爆発事故が起こり、作業員３７人が被曝。平成１１（１９９９）年には同村の核燃料加工会社ＪＣＯ東海事業所でウラン溶液の混合作業中に臨界事故が発生、作業員２人が死亡し周辺住民ら約６６０人が被曝しました。国内では初めての被爆事故でした。

平成１４（２００２）年８月２９日、原子力安全・保安院は東京電力福島第一、第二、柏崎刈羽の３原発で、原子炉内の機器にひびや摩耗があるにもかかわらず、国

への報告で虚偽記載していたと発表、東電のトラブル隠しが明るみに出ました。今思えば、東電の隠蔽体質が原発事故に至る遠因であったのかもしれません。

平成１６（２００４）年８月９日、福井県美浜町の関西電力美浜原発３号機でタービン建屋の復水管が破損、蒸気や熱気が噴出し、作業員５人が死亡しました。国内の原発で営業運転にともなって死亡事故が起きたのは初めてでした。平成１９（２００７）年３月１５日には石川県志賀町の北陸電力志賀原発１号機で臨界事故を隠していたことが発覚しました。平成１１（１９９９）年６月に停止中の原子炉で臨界状態となったのを隠蔽していたのです。

平成１９年といえば、７月１６日に起きた新潟県中越沖地震で、稼働中の東電柏崎刈羽原発２，３、４、７号機が自動的に緊急停止、３号機の変圧器から出火したほか、使用済み核燃料プールから放射能を帯びた水がこぼれました。東電がこの事態を重視し、所有する原発について万全の対策を講じたならば、福島の事故は防げたにちがいありません。

平成２２（２０１０）年５月６日、もんじゅがナトリウム漏れ事故から１４年５カ月ぶりに運転を再開しました。ところが同年８月２６日、燃料交換に使う炉内中継装置が落下し、再び長期停止に追い込まれました。

こうしたさまざまな事故やトラブル、隠蔽などを重ねたすえ、平成２３（２０１１）年３月１１日を迎えたのでした。冒頭に述べたように福島第一原発は巨大津波に襲われて全電源を喪失、１～３号機は炉心溶融（メルトダウン）になりました。加えて１、３、４号機では水素爆発が起き、大量の放射性物質が拡散。膨大な数の人々が避難をし、被曝による健康被害におののく事態に至りました。

こうして「安全神話」は完膚なきまでに崩れ落ちたのにもかかわらず、政府は原発政策を推進し続けます。関電大飯原発２基、同高浜原発２基、四国電力伊方原発１基、九州電力玄海原発２基、同川内原発２基の計９機が再稼動。さらに安全審査に合格した原発が東電柏崎刈羽原発の２基など６基にのぼっています。ほかに新規制基準にともなう審査中の原発が１２基あります（いずれも２０１８年１０月１日時点）。廃炉原発は決定済みと見込みを合わせて２２基にのぼりますが、政府や原発産業は「原発大国」のうまみが忘れられないようです。

安倍晋三首相は国内だけでは足りないとばかりに、原発輸出に力を入れ、自らトップセールスを買って出るほどの意気込みを示しました。しかし、事故を起こした国の原発に対する輸入側の目は厳しく、輸出政策は頓挫しているといわれています。事故の張本人が「オレのは安全」と言っても誰も信用しないのは当然でしょう。

福島第一原発事故からまもなく８年になります。今号では原発輸出の問題点を考えてみました。

（了）

カバーストーリー

ロシア・サハリン州立美術館　「極東地域の芸術」コレクション
主任学術研究員　オルガ ニコラェウナ さん

1 月にユジノサハリンスクのカフェでコーヒーを飲んでいた。このカフェは何年か前にできたチェーン店だったが、簡単な食事もできるおいしい店なので結構流行っていた。ボクはコーヒーだけを小さな椅子に座って飲んでいた。

入口のドアが開いた。マイナス 10 度程度の空気がさっと入ってくる。何気なく開いた入口を見て驚いた。オルガがそこにいた。

彼女はこのカフェの近くにあるサハリン州立美術館の主任研究官。以前ボクも何度かこの美術館で写真展をしたときにお世話になった方だ。

カフェのオルガ

彼女は良い所で会ったといわんばかりの笑みを浮かべていた。

そして近いうちに美術館へ来ないかと「うれしい」お誘い。

当然のことながら断る理由はない。ボクが懇意にしている画家の作品も今展示されていると小耳にはさんでいたのでぜひ彼の作品も見てみたいと思っていたからだ。

少し説明しておくと、州立美術館はここが樺太と呼ばれていた時代に建てられた今はない北海道拓殖銀行豊原支店の建物をそのまま使っている。石造りのどっしりとした美しい建物だ。

求む!日本の芸術文化

この美術館は 1983 年に開設され、昨年がちょうど創立 30 周年だった。

収納物の点検も行ったが、この建物もそうだが、樺太時代のものも多くはないが所蔵している。、しかしいわゆる生活雑器が主で、博物館が所蔵するような品物ばかりである。

この島には韓国系の人々も多い。ある韓国人が韓国の所蔵物を見てその貧弱なもの、つまりとても美術品と言えるようなものがなかったことに驚いて、帰国されてから、いくつもの磁器や陶器など、美術品として恥ずかしくないものを寄贈していただいた。

しかし残念なことに樺太に深くかかわりのある日本のものはとても貧しいものしかない。

美術館のオルガ

オルガさんはこう続ける。「もし日本の方のご厚意で日本の伝統的な芸術品を起草していただけるならとてもうれしい。勿論当美術館で大切に保管して、サハリンの人々に末永く見ていただけるよう十分な配慮をするつもりです」

彼女は陶磁器、特に伊万里、九谷など、また日本の伝統的な着物、例えば花嫁衣装や男性の羽織袴、また歴史的な価値を見出すことのできる雛人形など人形も素晴らしいものがあります。これらの品々がもしご家庭の納戸などに眠っているなら寄贈していただければとてもうれしいと懸命に訴えている。

立美術館
（旧北海道拓殖銀行豊原支店）
オルガさんの名刺

この記事の詳細は下記へ

mk@609studio.com

ジョセフ・ヒコの幕末維新

明治150年企画

ジョセフ・ヒコの幕末維新⑤

五代友厚編

生糸が担った殖産興業

写真・文　井上脩身

五代友厚（『五代友厚秘史』より）

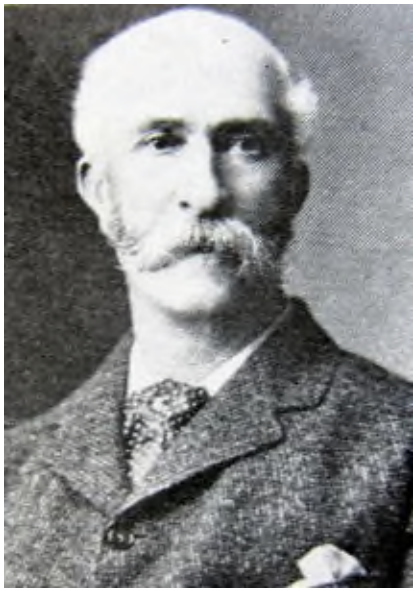
大阪の近代経営の先駆者とされる五代友厚の遺業をしのんで１９６０年、『五代友厚秘史』（五代友厚７５周年追悼記念刊行会編集）が出版された。その冒頭、７０ページに渡って資料写真が収められており、五代の署名入り肖像や、大久保利通が五代にあてた書簡など、五代の生涯が一目でわかる編集になっている。私は興味深くこれらのページを繰っていて、一点の写真に目が留まった。五代がジョセフ・ヒコにあてた手紙である。

ジョセフ・ヒコ

キャプションには「M．初年、ジョセフ・ヒコへ五代才助より発信、かいこの種紙についての手紙で、五代がシルク日本のＰＲに尽力している」とある。私の目は「かいこ」の一文字にくぎ付けになった。

明治期、絹糸の輸出は最大の外貨稼ぎであった。この書簡には、富国強兵、殖産興業が要請された時代のなか、ヒコと五代の関係が象徴的に現れているのではないだろうか。そう直感した私はこの手紙が持つ意味を探ろうと思った。

グラバーの生糸取り引き



トーマス・グラバー

『五代友厚秘史』の巻末に写真資料の注釈ひとまとめにしている。このヒコあて書簡について「種紙一条の儀壱人京師より参り候えども江州人いまだ参らず候につき、なお又催促いたしをき候付　明日比（ごろ）は跡（あと）の人も参るべく候に付其上巨細攻付申すべく候」と、達筆な文面を活字で紹介している。日付は「七月十八日」。明治初年の７月１８日、カイコの種紙を近江の商人がいまなお持ってこないので催促をしている、との内容である。この資料写真の上には前号で紹介したヒコや木戸孝允らが写っている写真があり、左のページにはトーマス・グラバーの肖像写真が掲載されている。私は『アメリカ彦像自伝』（中川努、山口修訳、東洋文庫）に、ヒコが長崎の高島炭坑の経営について佐賀藩とグラバー商会の仲介をしたことに関して、次のような注釈があることを思い出した。

「高島炭坑は、グラバーの力によって近代的な経営がはじめられた。しかしグラバーは生糸相場が大失敗してからは、その事業も衰退していき、かつ炭坑の外人経営を禁ずる政府の方針もあって、１８７３年には高島炭坑も国有になる。」

この説明によればグラバー商会は生糸取引を手掛けていた。ヒコはグラバー商会と大いに関係があったことは前号で述べたが、グラバーとのかかわりという点では、幕末の志士のなかでは五代以上の者はいない。このことは後述する。ここではグラバーと生糸との関係をまず掘り下げたい。

杉山伸也『明治維新とイギリス商人――トマス・グラバーの生涯』（岩波新書）によると、日本の開港とともに、中国に本拠をおいて貿易をしていた外国商人が次々に来日。その代表的な商人は横浜で「英一番館」とよばれたジャーデン・マセソン商会（以降ＪＭ商会）。横浜に支店を置き、長崎、兵庫、大阪、函館に代理店を設け、欧米市場向けの生糸や茶などの輸出、欧米からの綿織物や毛織物製品の輸入、販売を行っていた。同商会を後ろ盾に貿易活動を行ったのがグラバー商会だ。

１８３８年にスコットランドで生まれたグラバーは１８５９（安政６）年、２１歳のとき長崎に上陸。６１年に独立して貿易業務に携わり、翌年、アーノルド商会を吸収する形でグラバー商会を設立した。

開港にともなって、長崎に代わり横浜が最大の貿易港になった。１８５９～６７年の平均で、輸出の８０～８５％、輸入の６０～７０％を横浜が占めていた。『明治維新とイギリス商人』に掲載されている「横浜開港直後の外国商事会社一覧」（１８５９～１８６８年）には、ＪＭ商会とともにグラバー商会もその名が挙がっている。グラバーは「長崎だけでは心もとない」と、目ざとく横浜に支店をおいたのだ。

生糸

横浜港での主な輸出品は製茶、蚕卵紙、蛹、生糸、屑糸、玉糸、乾鮑、鰯など（藤本實也『開港と生糸貿易』開港と生糸貿易刊行会）、多岐にわたるが、このなかの茶と生糸が二大輸出産品だった。国全体では生糸、蚕卵紙で輸出総額の６０％、茶が２０％だったという。

横浜に外国貿易の代表の座を奪われたとはいえ、鎖国時代からの伝統をもつ長崎港でも着実に取引は行われた。以下は茶と生糸（繭、蚕卵紙を含む）の輸出実績である。

茶は１８６３年、１０万９０００ドル▽６４年、１１万ドル▽６５年、１５万８０００ドル▽６６年、４７万４０００ドル▽６７年、３６万８０００ドル▽６８年、３９万９０００ドル▽６９年、５０万８０００ドル▽７０年、３５万８０００ドル。一方生糸は６３年、５万１０００ドル▽６４年、１万３０００ドル▽６５年、４万４０００ドル▽６６年、５万３０００ドル▽６７年、９万７０００ドル▽６８年、３万１０００ドル▽６９年、０▽７０年、４０００ドル。

茶は全体として着実に輸出が伸びており、長崎港での有力輸出商品であったことがわかる。これに対し、生糸は増減を繰り返しており、極めて不安定な品目であったことは明らかだ。何よりも問題なのは６９年に取引がなかったこと。７０年にはわずかな輸出があったものの、もはや長崎での生糸輸出は壊滅したといえるだろう。

グラバー商会が８万７４１ドルの負債を抱えて倒産したのは１８７０（明治３）年８月である。ヒコ自伝の注釈にある「生糸相場の大失敗」とは、長崎港で生糸貿易の激減によって大打撃を受けたことを指しているのだろうか。

ところで、１９６９年になってなぜ生糸輸出が全滅に陥ったのだろう。前掲の『開港と生糸貿易』に１８６４年から６８年までの横浜港における生糸の輸出先表が掲載されている。以下はその実績（単位は俵）。

１８６４～６５年、ロンドン９７９１、マルセーユ４２３９、上海２２２８、計１６４６３▽６５～６６年、ロンドン７２４９、マルセーユ３９３９、上海１２５、計１１５１７▽６６～６７年、ロンドン８５５７、マルセーユ４５９１、計１３３６２▽６７～６８年、ロンドン５４１２、マルセーユ６１６０、計１２１０４。

同書によると、生糸相場（１００斤あたり）は１８６１年３７０ドル、６２年４０３ドル、６３年４５９ドル、６４年５００ドル、６５年６１７ドル、６６年７４４ドル、６７年７５６ドル。

以上の輸出実績と相場から、次のことがいえる。１８６７～６８年にロンドン向けの輸出が減少したのに対し、マルセーユ向けが増加し、輸出量は微減にとどまった。一方、生糸相場は堅実に上昇しており、明治維新を迎えるまで、生糸輸出の不安材料はほとんどなかった。あえていうなら、ロンドン向け輸出が減り、マルセーユ頼りになることのリスクだろう。

明治初期のグラバー邸（『五代友厚秘史』より）

この実績表には６９年以降がない。このため長崎港で６９年に生糸輸出がゼロであった理由がここからは読みとれない。「マルセーユリスク」が気になるところだ。７０年、フランスとプロシャの間で普仏戦争が勃発した。この戦争にともなってフランスの経済状況が悪化している。これが生糸を扱う業者を直撃したのだろうか。

普仏戦争は「エルスムス電報事件」を機に起きた。スペインのイザベル２世がフランスに亡命したことから同国の王位継承問題に発展し、スペイオン王からドイツのビスマルクにこの報告の電報を打電。ビスマルクがこの電報を、フランスの大使が失礼であったと内容をかいざんしたのが同事件だ。ビスマルクはこの事件をもとに、フランスの対立をあおった。

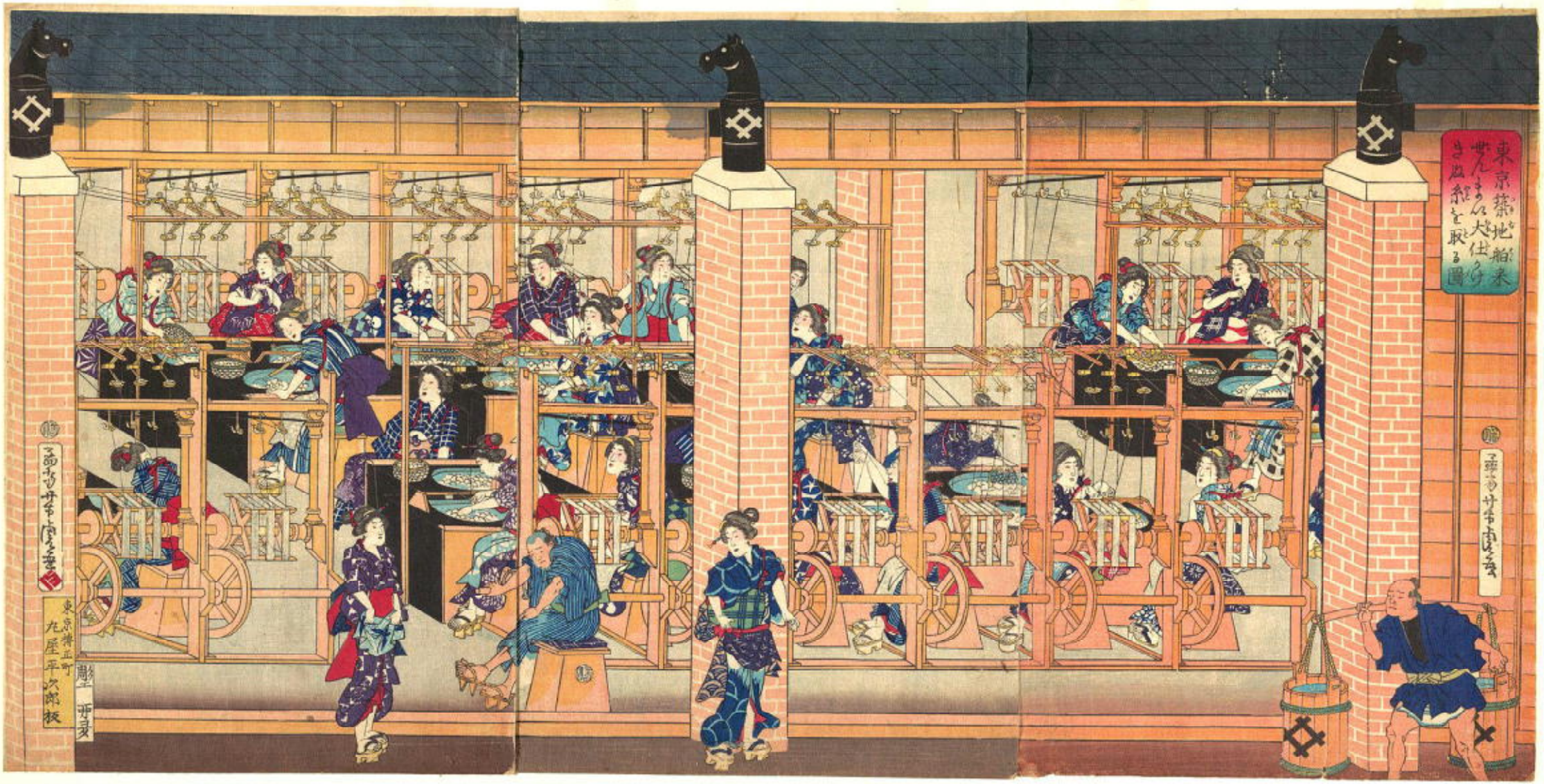
７月１９日に戦端の口火が切られ、セダンの戦いで１０万人のフランス兵とナポレオン３世が降伏。さらに７１年1月２８日、パリが占拠され5月１０日、フランスが正式にプロシャに降伏して終結した。

西川武臣『幕末明治の国際市場と日本――生糸貿易と横浜』（雄山閣）によると、１８６９年１０月下旬から生糸相場は下落を続けたものの、１２月には上昇に転じた。７０年６月下旬まで売込商人も利益を上げていたが、７月初旬から生糸相場が急激に下落した。売込商人の一つ、吉村屋の番頭の７月２６日の手紙には「各国戦争一条の義未実正は不相分候得とも（中略）糸・種とも未一切売込無之」としたためているように、外国商館が生糸や蚕種の購入を停止した。

吉村屋の番頭の手紙の日付や内容などから、普仏戦争によって横浜の生糸がフランスに輸出できなくなったことが歴然としている。西川氏も「１８７０年の後半期は開港以来最大の不景気となり、売込商たちは普仏戦争の影響によって大きな損失を受けた」という。１８６９年１０月から１２月まで横浜で生糸相場が下落したことは長崎でも無縁であるはずはなく、それが長崎港での６９年の生糸輸出ゼロという惨憺たる結果につながったと思われる。

前掲書によれば、横浜港での生糸の取引停止は２カ月続いたが、９月下旬から少量の取引が始まった。同番頭は9月２８日付の手紙に、信州上田の商人がＪＤ商会の船を借りて、売れ残った蚕種１０万枚をヨーロッパに直輸する計画を立てている、と述べている。売込商人たちは最大限の知恵を働かせて、必死に生き残ろうとしたのだろう。実際、１８６０（万延元）年には横浜の生糸売込商人は９３店だったが、１８７０年には４３店と半分以下に減っていた。

売込商人が大打撃を受けたのと同様に、外国の商人もダメージをうけた。生糸不況のなか、「蚕種を求めてヨーロッパから来日した商人もすべて帰国することになった」（『幕末明治の国際市場と日本』）のだ。



歌川芳虎画「東京築地舶来ぜんまい大仕かけきぬ糸をとる図」＝１８７２年（ウィキペディアより）

生糸が結ぶヒコと五代

グラバー商会が生糸不況をもろにかぶったことは想像するに難くない。冒頭に述べたように五代がヒコに出した手紙は「明治初年」だという。初年とは明治元～３年くらいまでを指すのだろう。とすれば、生糸輸出が思うようにならず経営に瀕したグラバー商会のために、ヒコは五代に援助を申し込んだ可能性は高い。

ではなぜヒコは五代に頼ろうとしたのだろう。五代と生糸の関係をみておきたい。

五代友厚は１８３６（天保６）年、鹿児島城下城ケ谷の五代家の次男として出生。父、直左衛門秀堯は薩摩第十代藩主、島津斉興の命で編纂された薩摩、大隅、日向の地誌『三国名称図絵』の執筆責任者だった。秀堯が琉球差配の役人として出仕したとき、藩主・斉彬から、オランダ人から手に入れた世界地図の模写を命じられた。秀堯が１４歳になったばかりの息子に託したところ、五代少年はこの地図を２枚複写し１枚を献上、もう１枚を自室に張り付け、飽かずに眺めていたという。（桑畑正樹『五代友厚――明治産業維新を始めた志士』高城書房）

五代３２歳の１８６４（元治元）年、薩摩藩は生糸貿易の具体化を図った。このころ、幕府は朝廷の攘夷の求めに応じて「横浜鎖港」を命じており、生糸貿易が厳しく制限されていた。このため開港直後から生糸貿易に乗り出していた諸藩が撤退を余儀なくされ、生糸価格は下落、生産地では生糸が山積みされていた。こうしたなか、薩摩藩は幕府の意に反して生糸貿易進出を決定、売れ残った生糸を安く買い集め、諸外国に密輸しようともくろんだ。

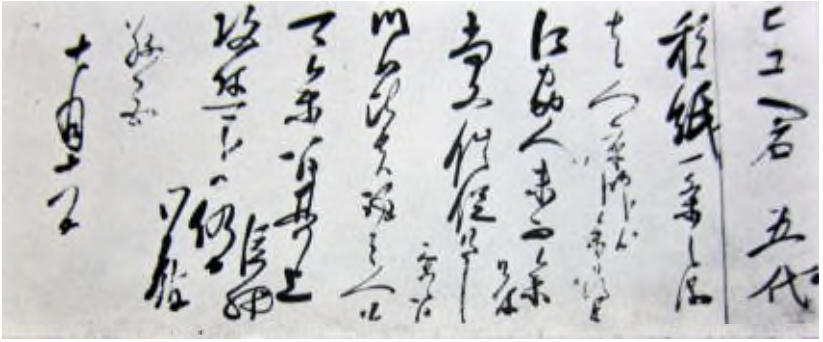
この密輸計画を立案したのが五代である。彼は以下の意見書を藩に提出した。

「白糸の儀は当今粗承り候へは横浜交易に鬻候儀御禁制相成候よし、此機会に御座候間本文にも申上候通、江戸御屋敷より御手を被廻、関東出産の白糸悉く御買求相成候はゝ当分余程下直に御手に入り可申、左候へは上海表の御益高尚又相増可申哉奉存候」

五代は幕府から貿易が抑えられているのを逆手にとり、この機に乗じて江戸藩邸から手を回し、関東で生産される生糸を買い占め、上海市場に持ち込めば大いに利益が上がる、と提言したのだ。

同年９月の西郷隆盛の書簡には、最低でも２万両、できれば１万両の生糸を買い占めたい、とある。この西郷の記述からも、薩摩藩は五代の意見を採り入れ、生糸の買い占めを進めた（『幕末明治の国際市場と日本』）のは疑う余地がない。幕府は１８６０（万延元）年、「五品江戸廻し令」を発して江戸の糸問屋が横浜に送ることを禁止しており、横浜には正規の生糸が入荷しなくなっていた。こうした間隙をぬっての薩摩藩の密売である。前掲書によると、横浜のイギリス領事ウィンチェスターは１８６４年１０月６日付の手紙のなかで、薩摩藩の密売を、商社の代理店から持ち込まれた苦情を明かす形で以下のように述べている。

「幕府の役人が横浜の近くの本牧という所で、Mr.L.A.Josephs が買い付けた２３箇の生糸を拘留。この生糸は薩摩藩の商業代理人である Nakeiyah によって船積みされたもので薩摩藩の紋章がついていた。私はただちに神奈川奉行に拘留した生糸の解放を求めた。また生糸の拘留が条約に反するとして奉行をなじった。数時間後、神奈川奉行支配組頭が領事館を訪れ、船の拘留がい



五代がヒコに宛てた書簡（ウィキペディアより）

かなる点で条約違反になるかを尋ねた。私はただちに条項を示して条約違反であることを指摘した」

前掲書は「薩摩藩の船によって横浜港内に運び込まれた生糸は、薩摩藩と契約した売込商によって外国商館に販売された」としている。この手紙によると、取り引きは横浜港から離れた海上で行われ、生糸には薩摩藩の紋章がついていた。『幕末明治の国際市場と日本』の著者、西川武臣氏は「薩摩藩に対して神奈川奉行所から正式に抗議が行われた様子がなく、奉行所では生糸の押収にとどまっている。西国の雄藩である薩摩藩に気をつかう幕府が表だって事件を公にできなかったのかもしれない」と推察している。

私がこの手紙のなかで注目したのはウィンチェスター領事が「生糸の拘留が条約に違反する」と奉行を責めたことだ。国内的には禁制ででも、その禁制そのものが国際的には条約に反しているというのだ。１４歳のとき、世界地図を模写するほどに、藩主、島津斉彬のもとで国際感覚を磨いた五代である。国際的には通ることを計算に入れて「禁制品輸出」を提言したのかもしれない。ついでながら、五代の提言のなかに「上海表」というひと言がある。彼は上海事情にもある程度精通していた可能性があることを示している。

こうした彼の国際性については、後に詳しく述べていきたい。

ところで、幕府の貿易統制は諸外国の強い反対により、１８６４年９月に停止、横浜には大量の生糸が入荷するようになった。薩摩藩にとって、濡れ手に泡のうま味はなくなった。

さてヒコである。ヒコは１８６４（元治元）年に『海外新聞』を発行。このなかでイギリスでの生糸相場を載せたことは、本シリーズ３回目「岸田吟香編」で詳細に述べた。この新聞の発刊が、五代の生糸密貿易提言と時間的に近接しているのは興味深い。このころ、二人の間には何の関係もないが、「生糸輸出がこの国の経済のカギ」という思いは共通していたようだ。

私は本シリーズ３回目を執筆時、ヒコが生糸に着目した理由を十分考察できてなかった。このたび『開港と生糸貿易』に目を通したことで、次のことを知った。

横浜開港とともにアメリカ人のホールが経営するウオルシ社でも生糸や緑茶を扱い「米一番館」と呼ばれた。つづいてデント商会ができ、やはり生糸を扱った。ヒコは「自伝」のなかで「ホール氏が初めて横浜に居を構え、デント会社も横浜に居留した」とかいている。ということは、ヒコはホールやデントが生糸を扱っていたことを知っていたはずだ。『海外新聞』の刊行の前、ヒコは横浜で貿易業務に携わっていただけに、彼らの商行為には大いに関心をもっただろう。こうしたなかで、ヒコの生糸への着目度が高まったと思われる。

以上述べてきたことを総合すると、苦境に陥ったグラ

バーを救うために、ヒコが五代に支援を頼んだのは、五代ならば生糸をなんとか危ない手を使ってでも輸出してくれるのでは、との期待をもっていたから、と言えるだろう。

冒頭にあげた五代のヒコへの手紙には「江州」が出てくる。これは何を意味するのだろう。１８７２（明治５）年、売込商の吉村屋が外国商館に売り込んだ生糸の産地別実績（単位斤）では、上州糸１万１１５０、武州糸７８００、奥州糸８０２０、越後糸５００、近江糸２００。横浜では江州の糸は微々たる存在だ。主産地である上州、武州、奥州に対し、隠れた存在である江州糸ならば秘密裏に突破口を見いだせる、と見込んだのかもしれない。

もう一つ「種紙」。蚕の卵である蚕種が産みつけられた紙をさし、生糸の輸出規制の抜け道として使われた。蚕種紙、蚕卵紙とも呼ばれる。菅野和太郎『幕末維新経済史研究』（ミネルヴァ書房）によると、１８６５～６６（慶応元～２）年、初めは蚕卵紙１枚の価格が２、３ドルだったが、しまいには５、６匁にまで下落したすえ、天保銭１枚で蚕卵紙６枚になり、溝に投げ捨てられるありさま。この間、外国商人が横浜で１枚５、６匁で買いこみ、本国で４０倍以上の４、５ドルで売りさばき、暴利を得たという。五代は柳の下のドジョウを狙ったのかもしれない。

こうした手立てが成功したかどうかは定かでない。いずれにせよ、グラバー商会の経営は生糸取引で打開するには余りにも悪すぎた。

五代とグラバー

ヒコは１９６７年１０月、長崎における長州藩主の代理人になる契約を木戸孝允、伊藤俊輔（博文）との間で交わしたことは前号（木戸孝允編）で述べた。ヒコ自伝によると、この契約を終えると木戸は国もとへ帰ったが、伊藤はイギリスの軍艦ロドニー号で神戸に向かうことになった。出発前、伊藤は日本人街の自分の宿舎で晩餐し、その席にヒコを招いた。伊藤は「相客は五代才助ただひとりだから」という。午後５時ごろ、五代は何か約束があって出かけたが、ヒコは９時まで伊藤の宿舎にいた。伊藤は９時半、波止場まで歩いていった。

これがヒコ自伝のなかで五代が登場する最初だ。才助は元服にさいしてつけられた名前。後、友厚を名乗るが、ヒコと初めて出会ったときは才助だった。

次に登場するのが１８６８年３月２５日の項。ヒコの商社の「頭」（グラバー）から大坂に来るようにいわれ、長崎からコスタリカ号に乗って兵庫に着き、翌日、大坂支社に出かけた。数日後、五代が訪ねて来て、「横浜まで来てくれ」という。軍艦ストーン・ウォール号を合衆国公使からミカドの政府に引き渡す交渉をするため、とヒコは書いている。

３月２５日といえば「五箇条誓文」が発布（１４日）され、天皇が大坂行幸（２１日）をしたばかり。新政府ができたものも、その基盤がまったく不安定な時だ。ヒコの自伝によると、ストーン・ウォール号はアメリカから日本に送り出され、日本国旗を掲げて横浜港に入ったものの、新政府軍と旧幕府軍との動乱が治まっていなかったため、合衆国公使は星条旗を掲げておき、将軍側と

五代が渦中となった薩英戦争（ウィキペディアより）

ミカド側のどちらを日本の統治権力と見るべきかがはっきりするまで、船を自分の手に保有しておくのが賢明と考えたという。

五代は新政府の意向を受けてヒコに交渉の仲介を依頼したのだろう。ということは、五代はそれだけの地位にいたということだ。五代がヒコと出会うまでの前半生を概観しておきたい。

１４歳の時に世界地図を模写したことはすでに触れた。１８５７（安政４）年、長崎海軍伝習所に派遣され、勝海舟の知遇を得たことなどから、外国への思いをつよくした。

６２（文久２）年、船奉行副役だった五代は、幕府の内命で千歳丸を上海まで渡航させる計画があることを知り、このチャンスをとらえてこの船による渡航の一行に加わろうと手をつくしたが、すでに満員だった。そこで水夫に変装して船に乗り込んだ。

千歳丸には幕府使節や勘定方をはじめ幕吏や商人ら約５０人が乗り組んでいた。日本からの輸出を試験的に行ったもので、干しアワビ、煎りナマコ、昆布などに加えて石炭１５０トンを積み込んでいた。長州の高杉晋作、佐賀の中牟田倉之助も藩から「国外視察」の一員として一行に加えられていた。五代は長崎海軍伝習所で中牟田とは旧知の間だったが、高杉とは初めて出会った。高杉は渡航記『内情探索録』に「薩摩より五代才助と申人千歳丸水夫と為り、上海え罷越せしなり」としたため（『幕末維新経済史研究』）、さらに「肝胆を吐露して大いに志を談ず。海外に去りて国益の友を得る」とも記している。

上海に着くやいなや五代は両刀をたばさみ、武士の姿に戻って汽船の購入に奔走。時価５０万ドルのドイツ船ジョージキリー号を１２万５０００ドルで購入契約をし、同船を長崎に回航。天祐丸と名づけ、自らその船長になった。（『五代友厚秘史』）

五代は上海から帰った後、江戸に向かう。江戸到着と入れ違いに島津久光一行が京に向けて出発し、生麦事件を起こした。英国政府は幕府に賠償金１０万ポンドを要求、薩摩藩には犯人の逮捕、引き渡しを求めるという外交問題に発展した。

こうした緊迫した事態を受けて、五代は急きょ長崎に戻り、グラバーに対英工作の相談をもちかけた。グラバーとは上海密航前、蒸気船を購入したことがあり、上海で購入した船の回航もグラバー商会を介して行うなど、すでに取引実績があったのだ。英国は幕府から賠償金を受け取ったあと、ユーリアス号（２３７１トン）を旗艦とする艦隊７隻を横浜から鹿児島に向けて出航させた。ユーリアス号にはニール代理公使が乗っていた。五代は艦隊が石炭補給のため長崎に寄港すると予想、そのとき公使と面談し、賠償金１万ポンドを支払って横浜に帰港させようと考えた。ところが艦隊は鹿児島に直行、もくろみ倒れに終わった。五代はただちに鹿児島に向かう。

いわゆる薩英戦争が勃発したのは１８６３年８月１５

日。ヒコの自伝は「ある地方紙の記事」として以下のように報告している。

鹿児島湾に艦隊が投錨中の１５日正午、（薩摩軍は）われわれに向かって砲門を開いた。提督は機を移さず「拿捕船を焼き払え」の信号を出した。３隻の日本の蒸気船――すなわち、もとイングランド号、サー＝ジョージグレイ号およびコンテスト号――に火をかけた。これらの船舶は午前中に捕らえられ、艦隊のすぐそばに、錨でつながれていたものである。砲台から撃ってくると、艦隊は進発して戦闘隊列をととのえ、５００～６００ヤードの距離から砲台を攻撃した。

砲台からの砲火も、ひどく激しいものだった――６０～７０門の大砲が、１０インチ榴散弾や、１２ポンドおよび２４ポンド砲弾を撃ってきた。ジョスリング大佐（ユーリアラス号艦長）とウィルモット中佐（同副艦長）はともに２時５５分、艦橋において砲弾に当って戦死した。１０インチ榴散弾が中甲板に炸裂し、戦死７人、兵員５人負傷。風は強く、まともに陸に向かって吹き上げ、雨も降った。午後３時、町に火がついた。３時２０分、艦隊は戦闘を切りあげた。７時１５分、砲艦ハボック号が５隻の琉球ジャンクに火災を起こさせた。９時２０分、工場と鋳造所が燃えているのを確認。町は夜もすがら燃えさかり、ジャンクも工場もあかあかと炎をあげた。

８月１６日午後３時３０分、発進して湾口を目ざして航行した。

ヒコは以上の記事を紹介したあと、「記事を読んで、外人居留地はみんなひどく興奮した」と結んでいる。記事内容から、「ある地方紙」は横浜居留地で発行していた外国の新聞とみられる。

記事中の燃えさかる工場、鋳造所には島津斉彬が心血を注いだ集成館が含まれる。ここでは洋式船建造、武器弾薬製造からガス灯の実験まで行われていた。この戦争によって集成館事業の重要性がかえって見直される形となり、やがて後述するように紡績事業などにつながる。

ところで、この記事にある拿捕された薩摩の３隻は天祐丸（英国船イングランド号）、青鷹丸（同サー・ジョージ・グレイ号）、白鳳丸（米国船コンテスト号）だ。いずれも五代が購入に携わった薩摩藩虎の子の洋式蒸気船だ。五代のかかわりはこれだけではとどまらない。というより、拿捕事件の渦中にほうりこまれる事態になった。英国艦隊に従軍していたイギリス人外交官アーネスト・サトウの代表的名著『一外交官の見た明治維新』（岩波文庫）から、拿捕の状況をみてみよう。

１５日払暁汽船の拿捕を開始した。汽船に近づくにつれて、もちろん私たちは大いに興奮し、任務に従って各自忙しく立ち働いた。薩摩人の抵抗を予期したからだ。ところが、アーガス号がサー・ジョージ・グレイ号のわきに横付けになったとき、その船の乗組員が反対側から用意の小舟に乗り移って、すばやく姿を消すのが見えた。われわれは決して捕虜を獲るつもりはなかったのだが、二人の日本人がサー・ジョージ・グレイ号に残っていて、私に向かって五代と松本弘菴であると名乗った。この二人は艦隊に移されてから、オタニと柏という変名を用いた。前者は気品のある容貌のすこぶる立派な男子で、私の見るところでは船長だったと思う。

サトウが目撃したように五代は拿捕船に乗り組んでいて、英国軍の捕虜になった。

五代の渡欧

五代は松本とともに英国艦隊によって横浜に到着、引き続きユーリアラス号内で拘束されているところに、米国領事館書記のヴァン・リードがやってきて身元引受人になってくれた。彼は１８５８年６月、ペンシルバニア州でヒコに会っており、ヒコとは旧知の間柄だ。もちろんこの時、やがて五代がヒコと昵懇の仲になるとは知る由もない。五代は「英国のスパイ」の疑いがかけられて、幕吏だけでなく薩摩藩からも探索されていたため熊谷に潜伏。やがてヴァン・リードの手紙で薩英間の和睦がなったことを知り、６３年、長崎に向かった。

（写真・ロンドンでの紡績機械輸入調印の模様＝中央が五代（『五代友厚秘史』より）

五代は長崎のグラバー邸に滞在する間、薩摩藩の富国強兵策についての計画を立てた（『明治維新とイギリス商人』）。藩に「勤王攘夷の徒は世界の大勢に暗く、国家の危急をみずから招いている」と攘夷非難の提言書を祖送付。このなかで「イギリスとの戦争ではおびただしい損失をうけたにもかかわらず、それが三州（薩摩、大隅、日向）士民の無知を啓発したのはまさに天から与えられた幸いで千金にもかえがたい」と、薩英戦争を啓蒙というプラスとしてとらえたうえで、「開国の時期が近づいているという予測のもとに諸大名にさきがけて富国のために興業すべき」と力説した。

そのうえで「米、生糸、茶、シイタケ、昆布、スルメ、木材などを上海に輸出する」とした。以下はその具体的内容。

①茶は道路の左右まで並木のように植え、紅茶として売れば砂糖に次ぐ重要産物になる。

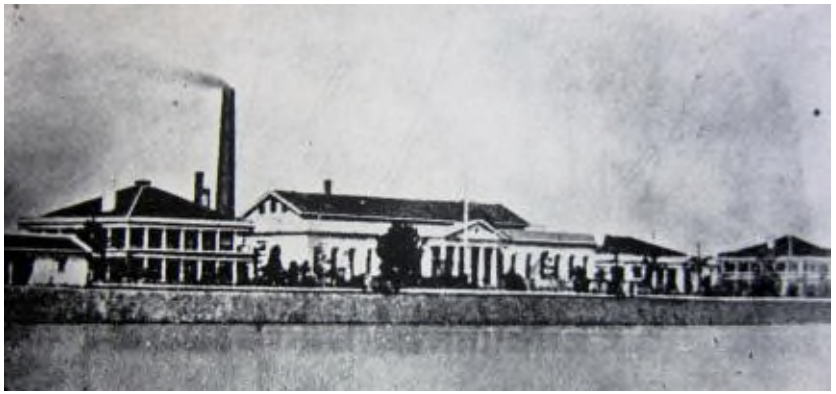
②昆布は北海道の松前から長崎に輸送してかこっておき、チャンスを見て上海に回すと利益大。

③米を上海で売って、それで製糖機械２０台を買い入れ、藩内の砂糖を白砂糖に精製し、上海で売れば１００万両以上の利益。

以上のように、武士とはとても思えないほど商業についてはこと細かい。五代による「関東の生糸買占め」案を本稿でふれたが、実はその意見もこの提言の一環なのだ。

『五代友厚――明治産業維新を始めた志士』によると、五代はさらに綿密な提言をしている。日本からの輸出（外貨獲得法）、輸入（機械や武器・艦船などの耐久財）、視察団や留学生の派遣（科学技術に取得・育成方法）の三つに分類し、産物の輸出や砂糖精製機械の購入のほか、英仏など先進国への留学生の派遣、軍艦や新式大砲（アームストロング砲）の購入と武器開発、銀銭製造（貨幣鋳造）機械の導入――などを藩に求めた。

五代の提言に従って、薩摩藩は６４年、新納刑部を全権大使とする使節団４人と１５人の留学生を英国に派遣。使節団のなかに五代も使節副使として加わった。幕府の目をはばかって全員が偽名。五代は関研蔵だ。



大阪造幣寮＝１８７１年（『五代友厚秘史』より）

一行にはグラバー商会のライム・ホールが同行。ロンドンに着いた一行１９人はグラバーの兄、ジェームス・グラバーの世話でホテルや下宿に分かれて泊まった。この渡欧中、五代はさまざまな買い物をする一方で、後に殖産興業につながる重要な見学をした。『五代友厚秘史』には次のように記載されている。

【購入】
木綿紡績機械（マンチェスター・レート会社より）
騎兵銃５０丁、大砲隊小銃、常短小銃各２００丁、短銃５５丁、小銃２３００丁、元込小銃１２丁
【見学】
（ベルギー）ニッケル貨幣所、大砲製造所、小銃製造所、綿・毛織物の機関製造所、貨幣鋳造場、砂糖製造所、ビール酒醸場、新聞紙出版所、ランプ製作所

五代が帰国したのは１８６６（慶応２）年３月。薩長同盟が成り立ったときと相前後していた。

五代の提言を細かく述べてきたが、こうした積極貿易策をとる薩摩藩はグラバー商会にとって最大のお得意先になる。

五代が提言した翌年の６５年、グラバー商会は４隻の艦船の取り引きをしている。竜田丸、万年丸、桜島丸（乙丑丸）、環瀛丸である。いずれも薩摩藩に納入された。売上総額は３０万４０００ドル。グラバーにとって、薩摩さまさま、というより五代さまさまであろう。グラバーは６６年、幕府に３隻、熊本藩に２隻、薩摩、佐賀長州各藩に各１隻、６７年に熊本藩２隻、宇和島、薩摩、福岡各藩に各１隻、６８年に長州藩２隻、佐賀藩に１隻の艦船を売っている。だがこれも幕府と反幕府の戦いがあってこそだ。倒幕がなって明治政府ができると、「戦争商法」は成り立たなくなる。

こうしたなか、グラバーは薩摩藩と組んで小菅スリップ・ドックの建設に取り組んだ。長崎の小菅の５４００坪の土地にドックを築くもので、長さ１１０フィート、幅２４フィート、算盤のような凹凸がついていることから「算盤ドック」と呼ばれた。いうまでもなく薩摩藩が富国強兵策の一環として取り組んだもので、１８６６年ごろからグラバー商会が４万ドルを出資して着手、６９年１月、操業を開始した。主として１２００トン以下の船舶を対象としておりドック使用料は３日間トン当たり３ドルに設定。６９年に３０隻、７０年には２４隻がこのドックで修理された。

グラバー商会は資金繰りが苦しくなったため、完成を前に明治政府に１２万ドルで売却。グラバー側が売り急いだため予定より１万ドル安かったという。薩摩藩への支払いなどがあり、グラバーが手にしたのはグラバー・ブラザース社の分も含めて３万ドル余りだった。

小菅スリップ・ドック建設中の６８年、明治政府は大阪に造幣寮を設置することを決定。香港から機械を購入することになった。五代は新政府樹立とともに大阪府判事に任命されていた。ヒコは自伝のなかで、この購入のいきさつを次のように述べている。

香港からのうわさでは、数年前に設立された造幣局で作った貨幣を清国人が心よく受け取らないので、当局はその造幣局を処分したく思っているそうである。日本人が通貨事情で困っているということは周知のことであったので、わが社の頭（グラバー）は、私に権知事に会って、香港の造幣局ならきっと安い値段で入手できるのだが、日本政府に買う気がないか、当たってみてくれないか、と言ってきた。私が五代知事にこのことを尋ねると、彼は喜んだ。（略）数日たってから、彼は私を呼びに使者をよこし、日本政府は香港の造幣局をそっくり指定された価格で買いたい、その際、わが社には一定額の取引手数料をみてくれる旨告げた。こうして大阪の造幣局は、きわめて安い費用で設立のはこびとなった。

真木洋三『五代友厚』（文藝春秋）は「五代は大阪府判事となったが、当時の通貨に対する外国の不信感が強く、優れた造幣機械を購入する必要を感じて、長崎のグラバーを通じて香港のイギリス造幣局の機械を六万両で買う契約を結んだ」とあっさりと片付けているが、ヒコにしてみれば、「あれはオレが間に入ったのだ」と言いたかったのだ。『明治維新とイギリス商人』によると、グラバーは手数料をとらず、純益をＪＭ商会と折半することにした。しかし日本側購入価格を８万ドルと見込んでいたため、もくろみ外れとなり、損失を出したという。

グラバー商会は結局、業績回復を前号で取り上げた高島炭坑にかけるしかなかった。１８６９年１２月に操業、７０年１月には昼夜操業で１日６０～９０トンを採掘し、アメリカ、フランス、ドイツ、ロシア海軍や太平洋郵船などに提供。事業は順調に進んだかにみえた。しかしグラバーの債務額は１０万ドルにのぼっており、ＪＭ商会に対する債務を返済できない状態に陥っていた。その後、紆余曲折を経て、高島炭坑の操業、高島炭の販売、不動産などグラバー商会の全ての活動がオランダ貿易会社の管理下に置かれることになった。（『明治維新とイギリス商人』）

こうした経緯をへてグラバー商会は７０年８月、倒産した。ヒコは「無担保の債権者たちは相当の損害をこうむる羽目になったが、私もいくらかの額を出資していて、その中の一人となった」と自伝にかいている。

実業家になった五代

グラバー商会の倒産をもって幕末の終了といえなくもない。幕末の混乱に乗じて販路を広げたものの、「殖産興業」という新しい時代にうまく対応できなかったのだ。五代にとっても大阪造幣局の業務をもってグラバーとの関係は終わる。ヒコも新たな道を模索しなければならなかった。

五代が渡欧中、マンチェスター・レート社から木綿紡績機械を購入したことはすでに述べた。この紡績機は鹿児島城下の磯地区に据え付けられ、我が国初の洋式紡績である「鹿児島紡績所」がスタートした。英国から技師を招いて本格的に生産に取り組み、薩摩藩の殖産の大きな一歩となった。この経験を五代は生かそうと考えたのだろう。１８６８（慶応５）年、大阪府権判事に就任し

た五代は堺・戎島に堺紡績所の建設を進めた。鹿児島紡績所の別工場として計画されたのもので、薩摩藩が出資して会社組織で運営されることになった。『五代友厚――明治産業維新を始めた志士』によると、薩摩の開成所教授だった石河正龍（確太郎）、伊地知貞馨（壮之丞）らが中心になって設立された「泉州堺薩州商社」がそれである。

英国・ビギンズ商会製のミュール紡績機２０００錘が鹿児島経由で堺に運び込まれ、我が国初の大規模紡績工場が誕生した。１８７０（明治３）年４月に蒸気機関の試運転が行われ、同年１２月の本格的に稼働。五代は営業を担当し、できあがった製品の海外輸出についても関わった。だが業績は思わしくなく廃藩置県を機に７２年５月、新政府の所有となり、大蔵省勧農寮によって運営。石河はそのまま勧農寮に出仕し後に富岡製糸場の事業指導を行う。

堺紡績所は１８７８年、浜崎太平次、肥後孫左衛門に払い下げられたが、浜崎が没落したため８１年、川崎正左衛門の所有となり、「川崎紡績所」に改称。８９年、正左衛門の娘婿、川崎愛之助を中心として設立された泉州紡績の中核工場となる。同紡績は「戎」印を商標にしてブランド化に成功、中国・香港市場に進出した。１９０３年、岸和田紡績に吸収合併されたが、工場は引き継がれ「戎」印商品は引き続き生産された。施設は老朽化し、１９３３年に取り壊された。

１８８０（明治１３）年、渋沢栄一の肝いりで大阪市大正区三軒家村に大阪紡績が完成した。８６年には直流発電機を使った白熱電灯をともして２４時間フル操業を行うに至る。明治２０年代には川崎紡績や大阪紡績を含め、大阪は全国の４割の生産シェアを占める繊維産業の町になり、「東洋のマンチェスター」とまで呼ばれるようになる。その元を築いたのはマンチェスター・レート社の木綿紡績機械を購入した五代だった、といっても言い過ぎではない。

五代はすでに述べたように旧薩摩藩士だ。官僚のままでいれば薩摩の代表として参議の座も夢ではなかった。しかし１８６９（明治２）年、上京して大隈重信邸に滞在、財政問題について大久保利通らと議論を重ねた後、会計官権判事の辞令を受けて横浜への赴任を命じられたのを機に、官を辞して大阪に戻った。この時をもって五代は実業家に完全に転身する。。

五代が着目したのは鉱山開発だった。すでに触れたように高島炭坑にかかわったことから、鉱山に強い関心をいだいたのであろう。『五代友厚秘話』を引用してその概観をまず述べておこう。

同書は「彼は紡績業界（堺紡績所）に目鼻がつくと、これを人に委せて、さらに活躍を開始、次は企業家として彼の胸中に山積していた地下資源の開発に向けられた」とし、五代が手をつけた鉱山を以下のように羅列。

天和銅山（奈良県）、赤倉銅山、栃尾銅山、駒帰村辰砂鉱、蓬谷銀山（滋賀県）、半田銀山（岩手県）、新慶銅山（兵庫県）、和気銅山（岡山県）、大立銅山（兵庫県）、水沢銅山（三重県）、神埼銅山（大分県）、豊石銅山（島根県）、鹿籠銅山（鹿児島県）、助代銀山（同）など。その数は大きなものだけで１５カ所あり、北海道から鹿児島まで１４０鉱区におよんでいた。

もう少し説明が必要だろう。『五代友厚――明治産業維新を始めた志士』によると、五代は以前薩摩藩主に出した建策の中に「欧羅巴より土質学の達人を相雇い御領中普く採検せしむる事」と、外国の専門家による鉱山探

半田銀山（『五代友厚秘史』より）

索を提案していた。同書は五代が富国、殖産興業の一として「鉱山開発」に重きを置いていたことはまぎれもないとみる。実際、我が国自前の重工業が育つ前、鉱山業は第一の基幹産業であり、地下資源発掘による産業育成の資金獲得がもくまれていた（高橋直樹『五代友厚――蒼海を越えた異端児』潮文庫）のだ。

五代が最初に手掛けたのは大和の天和銅山である。高橋氏は「大和の国とその周辺山地（吉野、高野山）は古代からの銅山地だったが、この鉱山の鉱脈の大きさに最初に気づいたのは、おそらく外国人鉱山師。五代がこの鉱山の責任者にしたのも、モンブランが連れてきた鉱山技師コワニエだった」とかいている。

モンブランというのは薩摩藩の英国使節団の副使として五代が英国に渡ったさい、ベルギーにおもむいて会った伯爵のことだ。モンブランは１８５８年から４年間長崎に滞在し、フランス政府のために政情や経済的調査をしたという経歴の持ち主。モンブランはベルギー政府の高官らを五代に引き合わせて信用を得たことから、１８６５（慶応元）年、「薩摩白耳義（ベルギー）商社」の仮契約を結ぶに至っている」。鹿児島の鉱山開発や生糸・砂糖などの特産物の輸出販売、重機械の輸入・製造をするための合弁会社計画だった。五代は帰国後、本腰を入れて計画を進めようとしていたが、薩摩藩当局から賛同を得られず、頓挫したという（『五代友厚――明治産業維新を始めた志士』）。

五代がグラバーとともに建設を進めた小菅修理船場が完成した１８６８年、戊辰戦争が勃発し、五代は軍艦奉行として兵庫に入る。このころモンブランは薩摩に行き島津茂久と久光に薩摩とベルギーの商社設立の契約履行を迫っていた。色良い返事をもらえず、モンブランは五代とも会った。

五代はグラバーとモンブランを両股にかけていたといえるだろう。廃藩になり薩摩のくびきがなくなるとともにモンブランとの関係を強め、鉱山開発についてもモンブランに協力を求めたのだろう。モンブランにとっても五代とのパートナー関係は重要だったに相違ない。

フランス人技師のコワニエは１８６７年、モンブランの紹介で薩摩・大隅・日向の鉱山探索に招かれた後、新政府と契約して生野銀山など閉山寸前の鉱山を生き返らせるなど、日本の鉱山の近代化に尽くした。五代はそのコワニエに依頼し、１８７０（明治３）年、まず天和銅山の鉱脈の探索に着手。その後赤倉銅山など前記の鉱山を次々に手掛けた。

これらの鉱山の多くはすでにツチとノミを使った手掘りで掘り尽くされていた。使い古し鉱山のなかから、地質学的な探索によって未開発の鉱脈を見つけ出し、爆薬と蒸気機関を使用して開坑しようというもので、近代技法を駆使して成果を得るにはコワニエの知識と経験を必要としたのだ。

これらの鉱山のなかで『五代友厚――明治産業維新を始めた志士』の著者の桑畑氏は蓬谷（よもぎたに）銀山に注目する。五代は１万両で採掘権や鉱山施設など一切を葛城屋安蔵から買い取り、現地責任者として彦根藩士族だった杉村次郎を送り込む。慶応義塾に学び鉱山研究を志していた杉村は滋賀県令から火薬使用許可を取ったほか、「懲役人拝借願」を出したりした。「坑夫として受刑者を労働させて、低賃金で銀を産出させていたようである」と桑畑氏はいう。受刑者をこき使ったというのであろうか。富国強兵・殖産興業の裏面が垣間見えるようだ。

７３年、五代は長崎の豪商だった永見米吉郎らと、鉱山経営の拡大のため大阪に弘成館を創設。全国の鉱山の探索や経営管理をする鉱業会社で、７４年に半田銀山を経営することになったことから東京に出張所が置かれた。

半田銀山は佐渡金山、生野銀山とならぶ我が国三大鉱山の一つだった。元は伊達氏、次いで上杉氏が開発、江戸時代には幕府直轄の奉行所も置かれていた。ところが幕末の元治年間（１８６４～６５年）には掘り尽くされ、北半田村の庄屋・早田伝之助が細々と坑を守っているにすぎなかった。五代はこの鉱山に目をつけ現地事務所を設置。早田と年５０円の報酬で契約して事業に着手。１８７６年、銀鉱脈が再発見され、早田を総代理に委任した（前掲書）。『五代友厚秘史』は、半田銀山の１カ月の産出純益は３０万円だったとしている。

以上、るる述べてきたように次々に鉱山開発が成功し、五代は「日本一の鉱山王」と呼ばれるようになった。

鉱山事業の核となる弘成館が大阪に置かれたこともあって、五代は大阪で新たな事業を展開する。１８７６年、朝陽館を創設して製藍事業を開始。７８年、大阪株式取引所開設、同年、大阪商法会議所創立、８０年、大阪商業講習所（現大阪市立大学）設立――など枚挙にいとまがない。

８１年、五代は関西貿易社を設立し、総監（社長）に就任した。このころ北海道開拓は廃止に方向に進んでおり、開拓使長官の黒田清隆は開拓事業の継承のために施設・設備を払い下げる方針を示していた。この事業継承のため「北海社」が設立されたが、資本が乏しかったため黒田は五代に相談。五代は払い下げを引き受けた。これが新聞や民権演説会で「黒田と五代の癒着」と糾弾される事態に発展、「開拓使官有物払下げ事件」と呼ばれ、政府は官有物の払い下げを取り消した。『五代友厚秘史』は「大久保、西郷を失って支柱をなくした薩長閥政府は、集中砲火を浴びてその陣営はゆさぶられた」としたうえで、「（五代が）薩人であったことで、民権論者の政府攻撃の材料として俎上に挙げられたに過ぎないともいわれている」と五代を擁護している。

さらにこの筆者が「払い下げ事件についての先生（五代）の心境に触れたい」と、資料の調査をしたところ、五代が鉛筆で走り書きしたメモを発見。メモには「政府がなさざるを得ざるは又開拓の一言」「開拓論、但しこれを以てアメリカの保護論を主張す……」としたためられていた。筆者はこのメモから「先生のアメリカを模範

視しての保護論は、日本民族の努力の成果と相まって、（開拓者として）先生はその先駆者の名をはずかしめない」とうたいあげている。

五代は一度も渡米していない。なぜアメリカがでてきたのだろう。ヒコから影響を受けた可能性を否定できない。話をヒコに戻したい。

ヒコの茶輸出事業

グラバー商会が倒産して２年後の１８７２（明治５）年、ヒコは大蔵大輔になっていた井上馨（聞多）のすすめで大蔵省に出仕し、会計局に勤めた。

ヒコは長崎時代に井上とはすっかり顔なじみになっていた。ヒコの自伝によると、木戸孝允、伊藤俊輔（博文）が初めてヒコを訪ねて来て半年後の１８６７年１２月、「長崎滞在中は御世話に預りかたじけなく存じ奉り候」との書簡が井上から届いている。この書簡には「明七日、兵庫開港期限と立ち至り申し候。各国の見込如何成り行き候哉」と、兵庫が無事開港できるかを心配したうえで、「外国公論等、是非承りたく候」と、ヒコから諸外国の態度や意向をききたい旨をつづっている。

井上が心配した通り、神戸事件が起きた。６８年１月１１日、岡山藩の隊列が神戸・三宮神社前あたりを通過した際、その前方をフランスの水平が横切った。藩兵が槍の穂先で突いたことに端を発し、仏、英、米の守備隊との交戦へと発展、列国側は居留地を封鎖し、港に停泊していた各藩の蒸気船５隻（６隻の説も）を抑留したうえで「国として陳謝せよ」と新政府に強く抗議した。

抑留された蒸気船の一つ、宇和島藩の祥瑞丸は五代とグラバーの共有船だった。五代にとってもことは深刻なのだ。『五代友厚』の著者、真木洋三氏は、五代が「できるだけ穏便に解決してもらいたい」とフランスの副領事レックスに申し出たが拒否された、としている。結局、新政府が列国と交渉することとなり、外国事務取締掛として東久世通禧が兵庫に派遣され、１月１５日、英、仏、伊、米、普、蘭の６カ国公使と会議、天皇名の国書を手渡した。結果的には、日本の元首が将軍から天皇に代わったことを諸外国に外交文書の上で示すことになった。

岡山藩の滝善三郎が責任をとって兵庫・永福寺で各国外交官の前で切腹。五代は宇和島藩主・伊達宗城の使者として切腹に立ち合っている。五代にとってはさまざまな意味で忘れることのできない事件だった。

ヒコの自伝には神戸事件に関する記述はない。その理由はわからない。滝はいま神戸市長田区の能福寺に眠っている。その同じ境内にヒコ英文碑がたっている。同寺の第１９世住職、加藤慈晃師が１８９２（明治２５）年ごろヒコに依頼して寺の縁起を英文でしたためたもので、横文字の下に漢字で「傳教大師延暦廿三年――」と彫られており、我が国最初の英文碑とされる。

という次第だから、ヒコにとって神戸事件は全く無縁とも言い切れない。もっとも井上馨がヒコを東京に呼んだのは神戸事件とは何の関係もない。自伝によると、８月１０日、東京に行き、７４年初頭まで大蔵卿・大隈重信のところで働いたという。この３年前、五代が大隈邸で行われた財政諮問に参加している。このことはすでに触れたが、ここでもヒコは五代と見えない糸でつながっていたのだ。

自伝の記述を追いたい。８月２１日、大臣代理の渋沢栄一（大蔵大丞兼紙幣頭）に呼ばれて大蔵省に行くと、

神奈川の大江卓県令から「ペルーのマリア・ルース号の訴訟事件に関してヒコの力を貸してほしい」旨の手紙が届いていた。

清国人のクーリーを乗せて横浜港に入港した同船がクーリーを虐待している、として訴訟問題になったもので、法廷で県令と同席してほしいとの依頼だった。ヒコは自伝に「全法廷に出た」とかいている。「クーリーを売買している」と、人権侵害が問題になったこの裁判で、娼妓問題が掘り起こされることになった。被告弁護人が娼妓と抱え主との間で結ばれた契約書１通を提出し「日本でも人身売買が行われている」と主張したのだ。前県令の陸奥宗光は娼妓制度の廃止の請願書を起草、１１月、政府は娼妓と芸妓を抱える契約を廃止する命令を発した。

本シリーズの前号（木戸孝允編）で、ヒコが人権規定をおいた憲法草案を建言したことに触れた。ヒコはこの法廷で現れた前近代的人身売買をどう判断し、大江県令にどう伝えたのだろう。フィクションでない本稿では「ヒコに感想を聞きたかった」というしかない。

７４年５月、ヒコは船で兵庫に向かい、回船問屋の北風荘右衛門と会う。北風は司馬遼太郎の『菜の花の沖』に出てくる兵庫の大豪商だ。ついでなから能福寺のヒコの英文碑の隣に北風氏の顕彰碑がたっている。その北風との話し合いで茶の輸出を行うこととなり、ヒコは神戸に事務所を設けた。資本は北風の本店から得た１万ドル。実際はその３倍が必要になり、不足分は「隣県の県庁」から借りた、と自伝にいう。

ヒコはなぜ茶に着目したのだろう。グラバーに事業の一つに茶の輸出があったことをヒコが思い出したのかもしれない。

山口幸彦『明治維新の大功労者トーマス・グラバー――フリーメーソンとしての活躍』（長崎文献社）によると、グラバーがまだ何の商品から手をつけるべきかのめどが立ってなかったころ、アイルランド生まれのウィリアム・オルトを紹介された。オルトはジャカルタで手にして興味をもった日本茶の輸出をしようと日本にやってきた商人だ。オルトは油商を営む大浦慶と知り合い、慶から仕入れる話がついた。この取り引き話にグラバーが加わり、茶輸出に乗りだしたという。

グラバーはやがて幕末の動乱のなか、軍艦や武器・弾薬の輸入に力を入れるようになるが、あるいはヒコは茶が輸出用の有力商品であることを早くから気づいていたのかもしれない。五代が薩摩藩への提言の中に茶の輸出を書きこんだことはすでに触れた。五代からも聞いていただろう。

『明治維新とイギリス商人』には長崎のイギリス領事報告による１８６３～１８７０年の「幕末・維新の長崎貿易」が掲載されている（単位１０００ドル）。茶と生糸についてすでに触れたが、ここでは茶の輸出額と石炭、水産物、人参などの全輸出総額との対比をみたい（茶の輸出額は再掲になる）＝いずれも単位千ドル。

１８６３年＝茶１０９、全体５０８▽１８６４年＝茶１１０、全体７３７▽１８６５年＝茶１５８、全体５６１▽１８６６年＝茶４７４、全体１９９５▽１８６７年＝茶３６８、全体１７７６▽１８６８年＝茶３９９、全体１９８８▽１８６９年＝茶５０８、全体１３２３▽１８７０年＝茶３５８、全体１３２６。

おおざっぱに言えば、茶の輸出の伸びが輸出総額の伸びにつながっている。長崎では輸出を茶に頼っていたといえる。

ヒコの着眼は間違いではない。明治時代の主要産品の輸出推移をみると、茶は１８６８年に全体の２３％を占めていたが、１８７５年には３８％に急増しているのだ。

ヒコ研究の第一人者、近盛晴嘉氏も『ジョセフ＝ヒコ』（吉川弘文館）の中で「日本から外国への輸出の最大のものは茶であった。輸出入の商権は当時の法では外国人が握り、日本商人による直輸出はできなかった。北風家のねらいもその辺にあったようである」という。北風荘右衛門らはヒコがアメリカ市民であることに目をつけ、茶輸出事業に手を出した、というわけだ。

だが、ヒコの茶の輸出事業はうまくいかなかったようだ。自伝のなかでヒコは「９カ月ほど商買を続けたが、北風氏との気が合わず、とうとう支店を閉店することに話がきまり、私はその商売いっさいを、あとを引き継いでくれと頼まれた。私は気がすすまぬまま引き継ぎ、１８８１年に神経症にかかって、廃業のやむなきに至るまで商売をつづけた」と書いている。この記述によればヒコの茶輸出事業は６年間だったことになる。

ヒコが自伝に記した不成績の理由を箇条書きすると次のようになる。

ヒコがアメリカ市民であったため、ヒコ名義で商売できず、親戚の名義で別の貿易会所の中の一つとして事業登録した▽この貿易会所は伊藤博文知事のもとで神戸に設立されたもので、輸出入の統計をとることに存在価値があった。これによってわずかな登録手数料を徴収していた▽はじめのうちは経営が順調だったが、しばらくすると役員が身を引き、やがて部外者の手に経営がわたった▽新たな経営者は外国人から商品を売買する際、双方から手数料を取り立てたため、非難の声があがった――などを挙げている。

実際の茶の輸出統計をみても、１８７５年に全体の３８％を占めていたがその後１７％に急落、茶の輸出に陰りが出ていた。１８９７年には５％にまで低下し、生糸と並ぶ輸出２本柱の時代は過ぎ去る。北風家が手を引き、ヒコ単独事業となって仮にうまくいったとしても、いずれは暗礁に乗り上げた可能性が高い。

１８８１年、ヒコは神戸で精米所を立ち上げた。自伝によると、川崎に５馬力の蒸気エンジンと４５基の臼と杵のある精米所を設立。１週間に７２時間稼働したところ、玄米２１０石を精白し、白米１８１・２２石ができたほか、粉米１・２０５石、ヌカ３０石ができたという。収入は４４・７５円、支出は４４・５０円。利潤はわずか０・２５円にしかならない。

なぜこうなるのかをヒコが調べたところ、水車式精米業者は米の２～３％を横領し、不足分を石粉で埋め合わせて所有者に渡していたことが判明。ヒコは新たに精米所を建設し、杵と臼を７０個に増やし、精米所の規則や料金表を公表した。これが裏目にでた。商人にとって、ヒコのところでは規則や料金を守らねばならないが、水車式精米業者ならば相当気ままなことができるのだ。というわけで、精米を依頼にやってくる商人は思ったほどはおおくなかった。水車精米という古い時代に生きた人には、蒸気機関精米という新時代にすぐには対応できないのだ。

ヒコの精米所はむしろ電灯がともることに貢献したことの方が特筆されるべきだろう。１８８４年１２月２６日、神戸で電灯をともす試験が行われた。弁天浜（神戸市中央区弁天町）でアーク灯７個を１週間灯すもので、県はこの点灯のためにヒコの精米所の蒸気機関を借用した。これによって神戸市で初めて電灯がともったのだ。

我が国で初めて電灯がともったのは１８７８年３月２５日。東京・虎の門の工部大学校でアーク灯が点灯されたもので、現在３月２５日は電気記念日になっている。神戸はそれから６年後だ。ヒコの精米所がなければもう少し遅れていたかもしれない。

女工哀史の製糸

政井みねの碑

ヒコの自伝の１８９１年５月１１日の項に、秩父製糸工場に招かれて見学したとの記述がある。「本庄の停車場から９里半のところ」だ。ヒコはここで何を見たのだろう。

自伝によると、この工場の製品の売れ行きが不振になっても事業がつづけられるように、運転資金の融通に力を貸してほしい、との依頼があったという。この工場には各種の日本式の織機が据え付けられており、操業するのに毎月１２８０円かかる。そのうち１０００円が生糸代、１８０円が女工たちの賃金、１００円が臨時費。女工は５０人の機織工と、同数の職工。すべて越後からきており、１２歳から１５歳になると雇い入れ、３５～４０歳の女の監督下におかれる。労働時間は食事の３時間を含めて１６時間――などとヒコは説明を受けた。ヒコが何らかの資金的な援助をしたかについてはふれていない。

女工が５０人にすぎず、日本式織機で操業していたというのだから、旧来の工場だろう。原料代にほとんどが食われており、生糸相場の上下に大きく左右されることがみてとれる。

ヒコの自伝はこの見学の９日後、大津事件の記事で事実上終わる（１０月２８日に地震があったとの３行の記事が最後)。その意味で、『海外新聞』に生糸相場の欄を設けるなど、生糸とかかわってきたヒコの人生を象徴するような見学だった。

ヒコが亡くなって１２年後の１９０９年１１月、東京・帝国ホテルで「生糸輸出世界一大祝賀会」が盛大に催された。我が国の生糸生産が８２００梱と先進国のイタリアや中国を引き離し、世界中の全生産量１万４０００梱の７割を記録、輸出金額は１億４２００万円と、我が国輸出総額の３分の１を占めるに至った。祝賀会には蚕糸業界のお歴々が参加、洋々たる前途をたたえあい、女性たちがシルクのスカートのすそを泳がせながら、華やかに舞踏を演じた。

そのころ野麦峠の頂上で一人の女工が息を引き取った。政井みね。２０歳になったばかりだった。みねは諏訪湖畔、岡谷の製糸工場の優秀な女工だった。「百円工

女」といわれていたが、腹膜炎を患い、重体に陥った。工場から「みね病気ひきとれ」の電報を受け、兄辰次郎が新潟との国境に近い飛騨の山村から七つの峠と１２０キロの山道を休むことなく二日で工場に駆けた。工場は死人を出したがらず、みねもふるさと飛騨で死ぬことを希望した。

辰次郎はネコダ（背負子様のもの）に座布団を敷き、みねを載せて工場を裏門から出た。松本の病院に入院させるつもりで松本の旅館に泊まったが、「飛騨へ帰りたい」とのみねの希望は強く、野麦街道を飛騨・高山に向けて上った。峠に着くと、みねは「あー飛騨が見える」と喜び、その場に崩れた。辰次郎が抱き起したとき、すでにこと切れていた。（山本茂実『あゝ野麦峠――ある製糸工女哀史』（朝日新聞社）

みねが息を引き取ったころ、横須賀では国産戦艦第一号の「薩摩」（１９，４００トン）が完成、はでなリボンの女子学生が街を闊歩し、ハイカラ節が流行していた。山本氏は「どれもこれもみねの死んだ野麦峠とはあまりに遠い国のできごとであった」と書いている。

明治前半期の蚕糸類輸出実績（単位１０００円）をみると、１８６８（明治元）年、１０，３６４▽１８７２（同５）年、８，２０３▽１８７７（同１０）年、１０，６６７▽１８８２（同１５）年、１９，２６１▽１８８７（同２０）年、２１，９２０▽１８９２（同２５）年、３９，９１４と推移。１８９５（同２８）年は５０，９２８に跳ね上がっている。ヒコが秩父製糸工場を見学した１８９１年は３２，１７５だ。このころから輸出量が増えたことがうかがえる。

主要産品輸出総額に占める生糸輸出の割合も、１８７６年４８％、１８８３年４５％、１８８８年、１８９２年各４０％などと高い数値になっている。我が国の輸出は生糸に支えられてきたのだ。

諏訪地方のある製糸場の１９００年６月の就業状況を見ると、午前４時５分起床、４時半就業、６時朝食、６時１５分就業、１０時３０分午食、１０時４５分就業、１５時３０分小憩、１５時４０分就業、１９時３０分終業だ。食事時間と小憩合わせて４０分しかない。ヒコが見た秩父の工場では３時間の食事時間があったという。仮にこの工場がうそいつわりなくヒコに話したとすれば、そのころはまだ超過酷就労ではなかったのかもしれない。輸出が伸びるにしたがって生産現場にはっぱがかけられ、休むことなく女工たちは働かされるようになったとみられる。これが「女工哀史」といわれるゆえんだ。

１８６９年、新政府が榎本武揚らが立てこもる箱館を攻めた際に参加した軍艦は６隻。うち４隻は藩から借り受けたもので、新政府保有艦はわずか２隻だった。ところが日清戦争が起こった１８９４年、５５隻・６万１３００トンの艦船を保有。１９０４年の日露戦争勃発時点では軍艦５７隻・２５万１７００トン、駆逐艦１９隻、水雷艇７６隻、合計１５２隻・２６万５０００トンを擁するに至った。富国強兵は生糸輸出のおかげ、日清、日露の勝利は過酷な労働を強いられた女工らの犠牲のうえにあったといっても決して間違いではない。

ヒコがこうした製糸工場の実態を目にしたらどう思ったであろうか。

ヒコはアメリカのリンカーン大統領に会ったただ一人の日本人である。本シリーズの２回目（リンカーン編）でこのことは詳述したが、リンカーン大統領が奴隷解放宣言をしたことも、いずれかの機会に学んだであろう。だからこそ合衆国憲法をモデルとした憲法草案を幕府に

建言したのだ。このなかに人権規定を盛り込んだこともふれた。ほとんど休み時間もない労働強制は人権侵害にあたる、と考えた可能性は高いと思う。

では本稿に登場した五代はどうか。蓬谷銀山では受刑者を低賃金で働かせていたことはすでに述べた。女工たちの労働を人権侵害と考えたとは思えない。一介の船乗りのせがれであるヒコと高級武士だった五代との違いだろう。

明治維新は革命だと司馬遼太郎はいう。革命だとしても、結局は武士がつくった政権である。本当の意味での最底辺の庶民のための政治にはほど遠かった。

クリスチャン・ヒコ

最近私はヒコに関する２冊の古本を手に入れた。いずれも著者は近盛晴嘉氏。ひとつは『ジョセフ彦――《ドキュメント》リンカーンに会った日本人』（日本ブリタニカ）、もう一冊は『クリスチャン・ジョセフ彦』（アムリタ書房）。私は、前者はヒコがリンカーン大統領にただ一人会った日本人であることに力点を置き、後者はヒコが洗礼を受けてクリスチャンになっている点に着目した本であると思った。ところがページを繰って驚いた。二つの本の中身は全く同じなのだ。同じ版を使って出版し、表紙だけを替えたものであることは歴然としている。発行は前者が１９８０年、後者が１９８５年。この５年間に出版社を変える特別な事情が起きたと推察される。

「漂流」から「新聞」まで１０章の目次を掲げているのは、当然のことながらいずれも同じ。目次の次のページも全く同じ言葉が掲載されている。ヒコの半生を極めて簡潔に言い切った一種の詩だ。

黒船の時代、ひとりの少年が
漂流した
のちに
リンカーンに会った男、と
歴史が記す
播磨の生まれ　浜田彦蔵
アメリカでミルクの味とことばを覚え
洗礼を受け帰国
完全なアメリカ語をしゃべる青年通辞として
日米外交史に登場
鎖国、尊王攘夷の世の中で
アメリカ彦蔵とよばれたデラシネ
桂小五郎にデモクラシーを説き
日本で初めて新聞を発行し
終生ミルクを愛飲いたという
ジョセフ彦とは
アメリカと日本に引き裂かれた
最初の男であった

近盛氏はヒコがカトリックの洗礼を受けた後「この日（１８５４年１０月３０日）を機に、彦のその後の人生は、キリスト教徒であるという自覚から外れることはなかった」と書き、浜田家の養女となった吉子さんの「日曜日に父と教会に行ったことや、父が毎朝バイブルや他のキリスト教の本を読んでいたことを憶えています」との追慕の言葉を紹介している。

ヒコがリンカーン大統領に会ったのは１８６２年３月１２日。「比類ない誠実さと、思いやりの深さのゆえに、

一度会った誰からも敬愛されるといわれるリンカーンであった。彦もまた、たった一度握手したこの人に魅了され、一生、リンカーの人柄と、その民主主義に親愛感を抱きつづけることなる」としたためる。

ヒコを「リンカーン大統領に会ったただ一人の日本人」であることと「キリスト教徒になった日本人」の二要素は、確かにヒコの人物像を特徴づけている。同じように漂流、日本に戻ったとき踏み絵をさせられた中浜万次郎とは決定的な違いだ。

キリシタン禁令のなか、クリスチャンになったいじょうヒコはもはや日本人とはいえなかった。だがやはり日本人でありたいという思いを持ち続けていたはずだ。その矛盾と葛藤のなかでリンカーン大統領に会ったヒコ。アメリカ合衆国憲法に信仰の自由を保障する規定があることを知り、人権意識に芽生えたのではないだろうか。

私は「ジョセフ・ヒコの幕末維新」と題した今回の企画では①中浜万次郎編②リンカーン編③岸田吟香編④木戸孝允編⑤五代友厚編の５編に分けて連載した。実は木戸孝允編を執筆のために資料を調べていて、ヒコの憲法草案の歴史的意義に気づいた。ヒコ自身、倒幕の勢いが増すなかで、憲法制定の夢をみたのかもしれない。

このように言い切れる史料はない。今回の連載を終えるに際して、ヒコにそうあってほしいと願う私自身の夢である。

能福寺のヒコの英文碑（左は北風荘右衛門顕彰碑）

（了）

冤罪のない社会をめざして

「再審法制定！　死刑制度廃止！」キャンペーンを開始

―元死刑囚・赤堀政夫さんの解放３０年を期に支援団体が訴え―

島田事件（1954年3月に静岡県島田市で起きた幼女誘拐殺人事件）で死刑判決を受けた赤堀政夫さん＝5月18日で満90歳＝が第4次再審請求審で無罪を勝ち取り、35年間の拘束から解放されて今年1月31日で丸30年が経った。この日、救援活動の中心的存在だった島田事件対策協議会は、現在再審請求中の袴田巌さんの支援団体と共に、再審法制定と死刑制度廃止を求める島田アピールを発表、5月の赤堀さんの誕生日までにアピールに賛同する団体・個人を募るキャンペーンを開始した。当面の措置として国・法務省に対して死刑執行停止と再審請求における改善を求めている。

賛同は、郵送やメール、Web（change.org　http://chng.it/nDq2YZNXX8　）で受け付けている。

島田アピール

冤罪を生み出す温床の解消を目指し、再審法改正と死刑廃止を

～ 1･31 赤堀政夫さん解放３０年に寄せて～

赤堀政夫さんは30年前の1月31日、35年間の闘いにより再審無罪を勝ち取り、生きて娑婆に帰ることができました。25歳で不当逮捕されてから還暦の年まで獄中に閉じ込められ、死刑囚として死と隣り合わせにありながらの闘いでした。

赤堀さんの勝利の前には、免田栄さんら３人の死刑囚による再審獲得の闘いがありました。そして、袴田巌さんをはじめ、冤罪に苦しむ人たちの再審無罪－解放が期待されました。

しかし、赤堀さん以降、死刑囚再審の道は閉ざされたままです。

2008年、飯塚事件の久間三千年さんは再審請求準備中に死刑が執行され、2017年には名張毒ぶどう酒事件の奥西勝さんは再審請求中に獄死しました。そして、2018年7月、2週間という短時日にオウム真理教幹部13人の死刑が執行されました。この執行は再審請求中であろうが精神疾患を抱えていようが、国家の意思で死刑執行を行なうという暴挙以外の何ものでもありません。

一方で2014年3月、47年7ヶ月の時間をかけた闘いによりいったんは再審の扉をこじ開け、袴田さん釈放という勝利を得た袴田巌さんの再審請求は、検察の異議申し立てに従った東京高裁により再審開始決定の不当な取消しがなされました。

赤堀さん解放から30年の歳月が流れ、死刑囚再審で無罪を勝ち取った免田さんは93歳、赤堀さんは今年の5月18日に90歳になります。確定死刑囚のままの袴田さんは3月10日を迎えると84歳です。

私たちは、「生きて再審無罪判決を」、「生きて故郷へ」等々の叫びを続け、冤罪のない社会の実現に向けて活動してきました。私たちは赤堀さん解放30年の日にあたり、日本政府・司法当局に対していまだに無実の人が冤罪を晴らせず、人権無視の社会が続いていることに強く抗議し、国内外の皆さんに以下のことを強く訴えます。

再審法制定!　死刑制度廃止!　国・法務省に求め、冤罪のない社会を実現しよう：島田アピール

1　冤罪を生み出す温床の解消を目指し、日本の司法制度の改革に取り組もう。とりわけ、無辜の民を救うことを目的とした再審法を制定させよう

2　再審裁判において、次のことを実現させよう

（1）すべての証拠開示
（2）再審請求人の三者協議への参加
（3）再審請求審における検察の新たな立証活動の禁止
（4）再審開始決定に対する検察の抗告・上告の禁止

3　世界的にも廃止が進む死刑制度を日本においても廃止させ、当面、死刑事件の再審請求中の刑の執行停止はもちろんのこと、日本政府に当面の死刑執行停止を宣言させよう

2019年1月31日

上の写真
change. org　から
http://chng.it/nDq2YZNXX8

島田アピール

（冤罪を生み出す温床の解消を目指し、再審法改正と死刑廃止を）に賛同を！

～１・３１赤堀政夫さん解放３０年に寄せて～

赤堀さんは獄中で次のような経験をしたといいます。
「ある日（の朝）、ダッダッダッと足音が聞こえたの。足音がどこかのドアの前で止まると、その房の人がその日処刑されるんだよ。その日、その足音が僕のドアの前で止まった。カチャカチャって鍵を開ける音がして、僕の房のドアが開いたんだ。僕はびっくりして腰が抜けちゃった。刑務官が『赤堀、お迎えだよ。』と言った。その時、保安課長が急いで部屋に入ってきて、その刑務官に何か言った。そしたら、その刑務官が慌てちゃって、私を置いて部屋から出て行った。間違えたんだよ、部屋を。」（「死刑冤罪」里見繁 P205）

このような極限の状況は、どんなに想像をたくましくしても、私たちの想像が及ぶものではありません。赤堀さんの死刑廃止の訴えは、このような経験を含む赤堀さんの全存在をかけてのものであることを、私たちは赤堀政夫さん解放３０年にあたり、あらためて重く受け止めたいと思います。
「死刑判決を取り消す」という宣告がない限り、自分の背中に十字架が張り付いたままだ　という免田栄さんの苦悶や傷も、周囲の人に見えないからこそ強く私たちに訴えるものがあります。（「死刑冤罪」P25~26）
赤堀さんに続いて再審公判に進むはずであった袴田巌さんは拘置の執行停止で解放されましたが、身分は死刑囚のまま再び死刑台へ連れ戻されようとしています。なんとしても再審を開かせ、無罪判決を勝ちとる必要があります。「裁判所に対してはいつでも弓を強く引き絞っておかなくてはならない」との故大塚一男弁護士の言葉を思い出します。
福岡事件の西武雄さん（1975 年没、享年 60 歳）、飯塚事件の久間三千年さん（2008 年、70 歳）は再審請求の途上で死刑を執行され、帝銀事件の平沢貞通さん（1987 年没、享年 95 歳）、波崎事件の富山常喜さん（2003 年、86 歳）、三崎事件の荒井政男さん（2009 年、82 歳）、名張事件の奥西勝さん（2015 年、89 歳）は、無念のうちに獄死に追いこまれました。
赤堀さんの無罪解放から 30 年、今年の 1 月 31 日を迎えるこのとき、私たちは無実の罪に苦しめられ、闘ってきたこれらの人たちや救援活動に人生をかけた人々を含め、多くの思いを共有し、冤罪のない社会の実現を社会に大きな声で訴えたいと思います。別紙の通り「冤罪を生み出す温床の解消を目指し、再審法改正と死刑廃止を求めるアピール」を皆様と共に公表したいと思います。

ぜひ、賛同していただきますようお願いします。

なお、1 月 31 日にアピールを発表した後も賛同団体・賛同者を募り、冤罪のない社会を多くの人が望んでいることを明らかにしたいと思います。5 月 18 日（土）の赤堀さんの誕生日までに集約して再度アピールするつもりですが、皆様にご相談しながら進めていくつもりです。Change.org におけるキャンペーン活動などさまざまな活動が考えられますので、アイデアをご提案ください。

以上、よろしくお願いします。

２０１９年1月３１日

呼びかけ
島田事件対策協議会
袴田巌さんを救援する清水・静岡市民の会
袴田巌さんを救援する静岡県民の会
浜松　袴田巌さんを救う市民の会

記

１．アピール内容
別紙，島田アピール（冤罪を生み出す温床の解消を目指し、再審法改正と死刑廃止を）求めるアピール」をご覧ください。

２．賛同連絡先：島田事件対策協議会：代表　秋野　正男
〒 427-0022　静岡県島田市本通六丁目７８５８－３　森伸一方
ＦＡＸ／ＴＥＬ　０５４７－３７－３０１３　メール：akahori30@erix.com

３．締め切り：２０１９年5月１５日（水）
※5 月 18 日（土）をめどに発表を予定しています。締め切り後であっても集約できる限り賛同団体・賛同者に入れさせていただきます。

◎次ページの内容でご連絡ください（郵送、ＦＡＸ、メールのいずれでも可）。できましたら貴団体の活動概要やアピールなどのコメントもお願いします。

島田アピール：冤罪を生み出す温床の解消を目指し、再審法改正と死刑廃止を求めるアピールに賛同します。

団体・個人名［　　］

・団体の場合[代表者　　][担当者　　]

住　所［　　］

電　話[　　]　メール［　　］

コメント：

びえんと

Lapiz 編集長　井上脩身
（ 写真も）

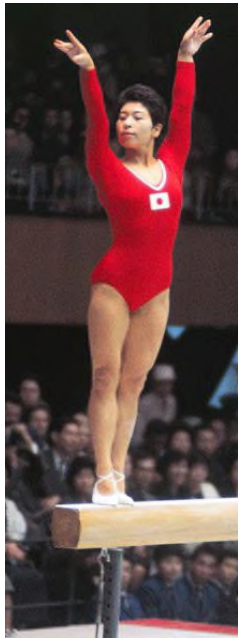
蒸気機関車の町の光りと影

～五輪メダリストの瀬戸内の里～

　私は大阪のあるデパート内で開いている文章教室を受け持っている。生徒の一人、岡田照子さんのエッセーに懐かしい名前が出ていた。「池田敬子」。１９６４年の東京オリンピックで女子体操選手として銅メダルに輝いた。岡田さんのふるさとは広島県三原市糸崎。今年８０歳になる岡田さんが中学生だったころ、町は三菱重工などの工場が立地していて、大いににぎわっていた。その糸崎の真向かいに佐木島という島がうかんでいる。池田選手はここで生まれ育った。糸崎の人たちにとって池田選手の活躍は「輝ける糸崎」の象徴だ。だが東京五輪を境に糸崎は衰退に向かう。糸崎は戦後日本の一つの縮図だった。

写真下　三菱重工の大煙突

憧れの故郷の大先輩



まず岡田さんのエッセー「逆立ちの人」を紹介しよう。

８１歳で、今も毎日逆立ちを続けている人。その名は池田敬子さん。旧姓、田中敬子さんである。

私はまだ覚えている。

ローマの世界体操選手権で金メダルを獲った人、田中敬子さんの名前を。私の家から見える、あの佐木島の人である。

それは１９５４年のことで、当時私は中学生だった。三原小学校の校庭に男子の体操選手たちと共に凱旋したのを見に行った記憶がある。彼女の高校の後輩である私の友人は授業を中止してラジオでその活躍を聞かされた覚えがあるそうである。

（略）

私の家から見える、灯台のある小さな島が佐木島である。私は、遙か沖の島々や、瀬戸内海を行き交う大小の船を家に居ながら眺められた。故郷にいた時分、夜ともなれば灯台の小さな灯りの点滅と、闇の中を僅かな明かりだけで航行する船体から流れる光がまるで呼吸しているような光景を見るのが好きだった。

（略）

私は故郷の大先輩のあっぱれな人生を今も誇りに思う。

筆者の岡田さんは三原市糸崎の中学生だったとき父親が病死。高校進学を断念し、隣の尾道市の病院に住み込みで働いたあと、大阪の病院で看護師として定年まで勤めあげた。退職後、趣味でエッセーを書き始めた。「逆立ちの人」は５年前に書いたものだ。池田さんは現在８５歳である。

（写真左・平均台を演じる池田敬子選手（ウィキペディアより）

五輪団体銅のローマの恋人

「逆立ちの人」には、池田さんはローマの世界選手権で金メダルとある。

池田さんは三原高校でテニス部に入っていたが、部活の最中に遊びで鉄棒をしたところ、体操部の顧問の目に留まって体操部に移った。現在の一流選手のほとんどが３～５歳ころから体操を始めていることに比べると随分晩稲だ。日本体育大に入ってから花が大いに開き、１９５３年の全日本体操選手権で初優勝した。翌年、日本の女子体操選手として初めて海外遠征し、ローマで開かれた世界体操選手権に出場。平均台で日本女子体操界初の金メダルに輝いた。

岡田さんのエッセーに出てくる金メダルはこの時のものだ。岡田さんが書いているように池田さんは当時田中姓だった。岡田さんの文中にはないが、池田さんが平均台でみせた華麗なターンがローマっ子を魅了、前年公開

された映画『ローマの休日』をもじって、「ローマの恋人」とまでいわれた。

５６年のメルボルン五輪でオリンピックに初出場し、ゆか４位、個人総合１４位。団体は６位だった。メルボルン大会のとき、私は小学６年生だった。男子競泳の山中毅選手が１５００メートル自由形に出場したのを雑音だらけのラジオ中継で聴いた。山中選手はオーストラリアのマレー・ローズ選手と壮絶な争いを演じ、ラストスパート及ばす銀メダルに終わったことを鮮明に覚えている。ことほどさように、私が関心をもった最初のオリンピックがメルボルン大会だ。だから田中という名前にも聞き覚えがあった。

彼女は５８年に結婚し、池田姓になる。６０年のローマオリンピックでは段違い平行棒で、女子選手としては初めてフルターンを決めたが５位に終わった。団体は４位。６１年に長男を出産。東京五輪の前年である６３年に次男が生まれた。その出産を前に「五輪を控えて子どもを産むなんて」と冷たい目で見られたが、彼女は「産みます、そして勝ちます」と言いきったという。

東京オリンピックは６４年１０月１０日に開幕。９日前の１０月１０日に東海道新幹線が開業したばかりで、まさに高度経済成長真っ盛りの中での五輪だった。体操競技は１８日から２３日までの日程で、東京体育館で行われた。

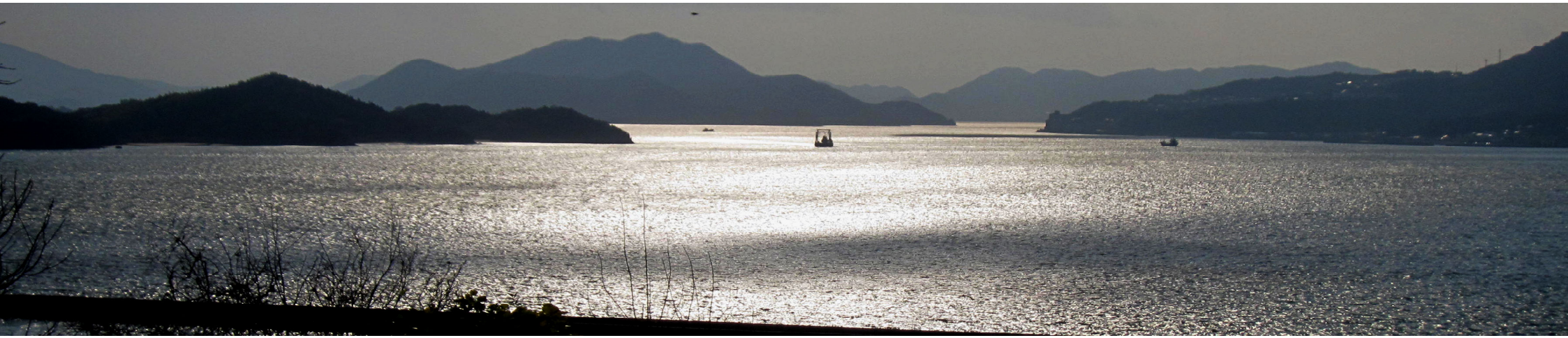
女子体操ではチェコスロバキアのチャフラフスカとソ連のラチニナの華麗な争いが演じられ、多くの人たちがカラーテレビにくぎ付けになった。カラーテレビはカー、クーラーとともに「新三種の神器」と呼ばれ、６０年代半ばの国民の憧れの的だった。私の家でも、オリンピックに間に合わせてカラーテレビを購入。母は「チャチャやん、憎らしい」と彼女が高得点をあげるたびにため息をついたものだ。

女子団体はチェコスロバキアとソ連が頭抜けていて、３位を日本とドイツ（東西の連合チーム）が争う展開。日本の最初の種目は平均台。３１歳になっていた池田さんが片足前方宙返りを鮮やかに決め、９・７０点を獲得。この高得点が最後まで効いてドイツを１・８５１点上回り３位に。表彰式で銅メダルが授けられた。オリンピックの体操女子団体で初のメダルであり、この後もメダルはない。それほどの歴史的快挙だった。

池田さんは６６年のドルトムント世界選手権で個人総合３位。平行棒ではラチニナを上回って銀メダルになったが、これが最後の国際大会になった。

蒸気機関車の町・糸崎

糸崎には青春１８きっぷで向かった。大阪から５時間がかりで糸崎駅に着いた。終点の三原駅の一つ手間の駅というのに運転士が替わった。ホームの脇は機関区にな



っている。運転士の控室もあるのだろう。かつて特急が止まった名残なのかもしれない。

改札を出るとき驚いた。駅員がいないのだ。自動改札になっているが、青春１８きっぷなので駅員に見せなければならない。駅員がいないのだからそのまま出る。外に出てみると、駅舎はまるで昭和の初めを思わせるレトロな木造の建物だ。

岡田さんから「墓地に上がると佐木島が見える」と聞いていた。糸崎駅から東に１０分ほど歩くと、山の斜面に墓地が見えた。上がってみた。港の前に比較的大きな島がある。岡田さんの文章によると、小さな灯台がある島だという。そのような島は見えない。どうも話が違う。（後に岡田さんに確かめると、岡田家の墓地は別の所）

墓地を出て、島々の展望がきく場所を探した。小さな畑があった。ここからなら大小さまざまな島が見える。冬とはいえ瀬戸内の陽光はまぶしい。逆光で島々がシルエットとなりぼーとかすんでいる。灯台までは確認できない。船が島と島の間をゆるゆると進んでいる。その右手に灯台とおぼしき影がうかがえた。たまたま通りかかった夫婦に「佐木島でしょうか」と尋ねたが、「私たちはここの者ではないので」と落胆する答えが返ってきた。

もう一度墓地に戻る。三菱重工の工場やタンク、煙突が見える。墓地から工場に向かった。

高さが５０メートルはありそうなパイプ状の装置には「ホワイトセメント」とある。ここではいったい何をつくっているのだろう。　　（写真・瀬戸内の島々）

三菱重工三原製作所の HP には「１９４３年、蒸気機関車と空気ブレーキ専門工場として発足」とある。三菱重工は終戦の２年前、糸崎に蒸気機関車工場を建設したのだ。恐らく軍事物資や兵隊の輸送が急務だったからだ

ろう。戦後も蒸気機関車の時代はつづいた。極限すれば、戦後復興は石炭と蒸気機関車が担った。

そういえば、岡田さんの故郷をテーマにしたエッセーの一つ「糸崎の花火」には「昭和２０年代の我が町は、三菱重工で製造した機関車を南米チリ―へ輸出していた。昭和２８、９年当時の三菱は社員数４０００人くらい。社宅は３カ所もあった」とあり、やはりふるさとを書いた「柿」には「同級生には神戸あたりから来た都会っ子もいて楽しかった」というくだりがある。別の資料にはこの工場で「貴婦人」の愛称のあるＣ－５７型蒸気機関車も造られた。池田さんがローマの世界選手権で優勝したころ、糸崎は最も輝いていた時期だったのだ。

写真・ＪＲ西日本で保存されているＣ５６蒸気機関車（ウィキペディアより）

池田さんの初めてのオリンピックであるメルボルン大会が開かれた１９５６年の１１月１９日、東海道が米原―京都間を最後に全線が電化した。東京オリオンピックが開かれた年、鉄道電化協会はこの１１月１９日を「鉄道電化の日」に指定。すでに触れたようにオリンピック直前、東海道新幹線が開通している。池田さんは蒸気機関車から電気機関車、新幹線へと文字通り超特急に交通体系が移り変わるなか、日本を代表する体操選手になったのだった。

鉄道が電化される時代になれば、当然のことながら蒸気機関車は製造されなくなる。東京オリンピックの年が「鉄道電化の日」設定の年であるということは、この年は「蒸気機関車さようなら」の年であることを意味する。蒸気機関車の町・糸崎が衰退へと下っていく年なのだった。その年、郷里の星、池田敬子さんが大舞台で輝いたのだ。今振り返れば、糸崎の輝かしい最後の大輪だった。

私は糸崎駅から３キロ西の三原駅まで歩き、三原発の電車で帰路についた。この三原駅に山陽新幹線が止まるようになって、糸崎の衰退に拍車がかかったのだ。糸崎駅を過ぎると車窓に瀬戸内海の島々が広がる。その光景は瀬戸内海のなかでも群を抜いている。確かに寂れた。だが、その結果、景観が守られたことも事実だ。

１９６４年のオリンピックのころのような経済的な繁栄はこの糸崎には二度とないだろう。だが発想を変えれば、心を癒してくれる海の里として生き続けていくことができる。地方が東京の陰であること以上に問題なのは、東京の真似をして自然を破壊することではないか。自然破壊は人の心の荒廃につながるのだ。２０２０年の東京オリンピックが地方の豊かな自然を見直すきっかけになればいいのだが――。そんなふうに思いながら帰途についた。

（了）

中川眞須良の

とりとめのない話

《地図ぶらあるき》

鯨の渡り　　その１

２０１８年、日本列島酷暑の年の夏から秋にかけての時期、北太平洋のある場所がとくに慌ただしくなることが多い、と過去のデータが示している。それは地球規模の鯨の回遊、と言うより鯨の大移動である。そしてその種類はザトウ、イワシ、ナガス、シロナガスなどのヒゲ鯨の仲間が多いようだ。子育てと食料確保の為であろうが一定の時期に一定のコースをとうり一定の区域で一定の時間を過ごし南へ帰っていく、その距離 8000 キロメートル以上に及ぶことはなにも珍しくない。今なお謎の多いこれらの行動、一部では「鯨の渡り」と呼ばれている。その慌ただしくなると言われる北太平洋のある場所とはアリューシャン列島である。

アメリカ、アラスカ州に属し北はアラスカ半島から南はアッツ島沖でロシアに接する、弓状に 2000 キロメートルに渡り大小多数の島々から構成されている火山列島である。
ここに昔から「クジラ通り」と別称されている三つの大きな海峡が北側から順に，ウニマック海峡、アムクタ海峡、セグアム海峡がある。
毎年の鯨の回遊数(移動数）の多さの順もほぼこの順と同じであったがここ数十年来、少し変化が現れている。
それは、最多のウニマック海峡と 2 位のアムクタ海峡の順位が逆転しつつあると言うのだ。２０数年前一人の日本人がヨットでウニマック海峡を通過する際「潮の入り」に合致したのか偶然かこの渡りに遭遇した時の印象を「海面が黒く大きく膨れ上がリ風の音、波の音が鯨の潮の吹く音にかき消され、転覆も覚悟する死の恐怖を味わった。」とするニュースは未だに新鮮であるが今この海峡に何が起こりつつあると言うのだろう。

ここでこの列島に於ける潮の流れ(海流）について少し述べておく必要がある。
言うまでもなく弓状に伸びる列島は内側(北側）の水深浅く(約５０メートル)、潮流ゆるやかなベーリング海と弓の外側(南側）の水深、深く(すぐ南、アラスカ海溝）潮流と波の激しい太平洋との全く性質の異なる二つの大海の境を形成している。この状態はベーリング海側から見れば自然の大防波堤と言えるだろう。
そのため列島を横切る海流の状態が時期、日時、天候により絶えず激しく変化しており特に注目の三海峡は海水温の変化もプラスされ更に流れが激しいとする報告がある。
これらの日常を総合してか、列島地元民やアメリカ海洋調査関係者らの間ではベーリング海から北太平洋側への海水の流れを「しおの出」、逆方向の流れを「しおの入り」、と表現されている。

三海峡を主とする鯨の渡りはこの海流の出、入り、をうまく利用し同じ海峡を往復、太平洋へ帰って行く行動は今までほぼ不変であった。

さて、「渡り」の数、一位を保ってきたこの「ウニマック海峡」、数の減少の理由が最近、少し明らかになりつつある。それはこれらの件に関しアメリカのある専門機関から政府に提出された調査、報告書が多くの内容を指摘している。

2010 年、アメリカ国内に於ける海洋学者、軍関係者、法律家、IWC 関係者など合同で提出されたこの報告書の一部に「鯨の回遊と国防」と題された今回の内容がある。
渡りと国防との関係はさておき、まず三海峡に於ける渡りの数の変化とその原因の調査と、
その必要性について多くのページが費やされ、なかでも列島最北に位置するウニマック海峡の現状が中心となっている。
その一つの項目に 2002 年から 7 年間の渡りの数の比較がある。
　1「入り」の数‥‥三海峡共に、ほぼ同じか、わずかにプラス。
　1「出」　の数　‥‥ウニマック海峡、14%マイナス
　‥‥アムクタ海峡、15・5%プラス
　‥‥セグアム海峡、　2・8%プラス
　等
これらの値はウニマック海峡の「出」の一部が 400 キロメートル以上南のアムクタ海峡からの「出」にコースを変更した、と見るのが自然である。このレポートが最も重要視しているのはこれらの行動の変化、通常からの変化のその原因である。
鯨の習性に関する膨大な資料、データは世界各国が共有しているが「渡り」のコース変更（一部）に関するものは少いようだ。
そもそもこの「渡り」、なぜアリューシャン列島の北端、ウニマック海峡を通過するようになったか一般的に推測してみると
1 アラスカ半島の付け根沖の北太平洋にアラスカ暖流が流れ込んでおり食料確保、休息、集合地として適している。
1 この海域から目的地のベーリング海へは最短距離の海峡である。
1 海峡入り後のベーリング海域は水深浅く、水温比較的高く、長期滞在に適している。
1 海峡内は水深浅く(36 メートル)、幅狭く（20 キロメートル以下）流れが速く不規則とマイナス要素が多いが遠い先の人工音などを感知し、速い潮の「入り」に正確に乗れば短時間で集団が通過できる。　等

　しかしこれらの事柄は鯨の帰りの「出」(ベーリング海から太平洋へ）の数の減少理由を考えるにはほとんど用をなさず、報告書に対するアメリカ政府の対応を注視するしかないが報告書の内容の一部は
1　通過する鯨に関して頭数、種類、推定年齢、スピード、多い時間帯
1　通過する船舶に関して数、船種、トン数、国籍、スピード、多い時間帯
1　海峡内の確認に関して海底幅、水深、形状、海水温度、プランクトンの状態、塩分濃度、海底ケーブルの状態。
等の政府による再確認の強い要望事項となっている。

　これらは地球上での鯨という動物のあらゆる意味での存在意義、人間とのかかわりがいかに大きいかを如実に物語っている。
　これらの各項目の結果が「渡り」のバランスを崩す要因の一つになる可能性があるかもしれない。

鯨の渡り 2

北緯 52 度、西経 172 度
アリューシャン列島のほぼ中間地点、セグアム島とアムクタ島の間、アムクタ pass と呼ばれる海峡に進路を北東にとり一隻の船舶がさしかかろうとしている。7 月上旬午前 2 時頃(日本時間）日の出まじかの薄明かりの中、後方に掲げる船籍国旗、汚れと劣化で認識しづらいが星条旗だ。

進路北東のまま、アムクタ島西沖約 5 キロメートル付近でディーゼルエンジンの回転が一段下がり 11 ノットに減速している。ベーリング海に入ったのだ。
スピードが落ち波が少し低くなったため、船腹に書かれた白字の船名が確認できる。
「col-1．14a 」と。
実はこの船舶、アメリカ海軍に所属する情報収集艦なのである。進水後 40 年、着任後 30 年のかなりのベテラン船、その概要を記すと、
1　長さ 55 メートル、幅 9，8 メートル、喫水 2，9 メートル
1　満水撥水トン、985 トン
1　最速、12，7 ノット、軽機銃 2 機装備
1　平常乗組員　士官 6 人、兵員 25 ー 30 人（民間人を含む）

このアマクタ pass の北東 9 キロメートルの海域に東西約 5 キロメートル、南北 3 キロメートルの海底台地が存在する。（台地水深約 70 メートル、周辺平均水深 150 メートル）、今回の「col-1..」の通常任務はこの台地に設置されている数十種類の計器のデータ収集、解析、と機能のチェック等であるが、今回更に試験的任務が追加されている。それは「ウニマック puss に関しても同等の調査を命じる」とする内容である。アメリカ政府はこれまで、この海域の調査に関しては半官半民の性格を持っ沿岸パトロール船にその任務を指示していたが、より高度で総合的な処理能力を持っ軍直属の情報収集艦に順次その任務を移行していく計画の第一段なのである。
アメリカ政府のこの急とも思えるこの動きは先述の「鯨の回遊と国防」の報告書の内容によるところが大きいようだ。
２日間にわたるアマクタ島沖での任務を終えた「col ー 1」、次の目的地はウニマック pass ではなくまず真北・115 キロメートル・6 時間の地点の中継港、セントポール島である。新任務に備え一人の専門官の乗船と 2 台の新計器（音波探知機）の搭載のために・・・。
この日の気温 3、5 度、風速 11 メートル、天候霙。

この島の停泊予定を半日切り上げ次の最終目的地、ウニマック pass での任務の指示があったのは 7 月 12 日、今までは沿岸パトロール船の調査水域であったアリューシャン列島唯一の国際海峡である。
その指示された調査内容は、民間からの報告書（要望書）と多くの部分で重なるがその概要は、
1　確認事項
潮流、魚類、哺乳類、海草、プランクトン、微生物、海水温度、上空通過の航空機、
ウニマック島に於けるアメリカ空軍基地新設による騒音　など。
1　調査事項
海底地形のより詳細なデータ、海峡両島間の海底ケーブル設置に関する事項　など　。である。

結論を急ぐと　今回の「col ー 1」の任務終了後、同艦長から軍経由でアメリカ政府に提出された報告書の結論の一つは、1990 年代後半当時と比較して現在までのウニマック pass を出入りする船舶の数（上空の航空機を含む）の変化は

1　入り、（太平洋からベーリング海）　8，5%プラス
1　出、　（ベーリング海から太平洋）　19、1%マイナス
なんとこれらの数値は同 pass を出入りする鯨の渡りの内容とほぼ一致しているのだ。はたして偶然なのだろうか、そして　出　の 20%マイナスの船舶はいったいどこへ消えてしまったのか。
残ったこの大きな謎の解明はアメリカ政府の緊急、重要課題の一つだ。なぜなら中国の大経済圏政策「一帯一路」の隠れた一つの政策　　ロシアに於ける北極海航路の早期実現構想　への積極的参入計画　の予兆である？　と危惧する一部の声があるからだ。

「渡り」の鯨は 30 年以上前からこの結果を予知していたのかもしれない。

原発を考えるシリーズ

瓦解した原発輸出計画

～安倍成長戦略の崩壊～

文　井上脩身

原発メーカーの日立製作所は今年１月、英国での原発新設計画の凍結を決めた。事業計画の前提である日本国内の民間企業の出資協力や英政府の追加支援の見通しが立たないためで、３月期中に最大３０００億円の損失を計上する。これによって日本の原発輸出の受注案件が事実上なくなった。安倍晋三首相は原発輸出を成長戦略の一環と位置づけ、自らトップセールスを行ってきたが、原発は採算に合わないと原発産業自体が見切った形だ。福島第一原発の事故から８年。「事故を起こしたからこそ世界一安全な原発」との安倍首相の逆立ちした論理が通用するはずはなかった。欺瞞そのものの″アトモミクス″は当然のことながら瓦解した。

写真：『世界の原発産業と日本の原発輸出』の表紙

英国原発計画の凍結

１月１８日の新聞各紙の報道によると、日立製作所は２０１２年に８５０億円で買収した英原発事業会社「ホライズン・ニュークリア・パワー」を通じ、英国中部ア

ングルシー島に１３０万キロワットの原発２基の建設を計画。２０年代半ばの運転開始を目指していた。ところが安全対策費の増加などから当初想定の２兆円を大幅に上回る３兆円規模に拡大する見通しとなり、国内企業からの資金集めが難航。メイ首相も１月１０日、日英首脳会談後の記者会見で「企業の商業的な判断になるだろう」と、追加支援に消極的な姿勢をしめした。計画については「凍結」として再開の余地を残すものの、再開の可能性は極めて薄いとみられる。

原発輸出計画をめぐっては、東芝が０６年、米原子炉メーカー「ウェスチングハウス」（WH）を買収し、事業の海外展開を目指した。しかし、米国での建設が遅延して損失が拡大、１兆円もの巨額損失により経営危機に陥った。稼ぎ頭だった半導体会社の売却を余儀なくされ、１７年、海外の原発新設事業から撤退。三菱重工がトルコで進める計画も総事業費が跳ね上がり、暗礁に乗り上げている。

こうした原発輸出の挫折の要因を探るのが本稿の狙いだが、その前にわが国の原発輸出の歴史を踏まえておきたい。

我が国の原発メーカーは東芝、日立、三菱重工の３社。東芝はすでに触れたように０６年、アメリカのWH社を買収。日立は１０年、やはりアメリカのゼネラル・エレクトリック（ＧＥ）社との間で原発事業についての統合を合意。一方、三菱重工はフランスの原発企業、アレバ社に出資して、三菱・アレバグループを形成した。世界ではほかに斗山重工業（韓国）、中国核工業集団公司（中国）、中国広核集団（同）、ロスアトム（ロシア）があるが、三つの企業が名を連ねる日本が突出している。

１９７３年、日立が台湾の金山１、２号機の原子炉格納容器を受注するなど、１９７０年代から原発輸出が行われたが、活発化したのはアメリカのブッシュ大統領が「原子力ルネッサンス」を打ち出し、京都議定書が発効した２００５年からといわれている（中野洋一『世界の原発産業と日本の原発輸出』明石書店）。「原発はCO_2を排出しないクリーンエネルギー」を錦の御旗に、２００９年、東芝がアメリカ・テキサス州の原発建設を受注。２０１０年、トルコのシノップ原発の４基の計画について、三菱重工・アレバ社に優先交渉権が与えられた。

福島第一原発の事故後も政府の方針は変わらず、２０１１年８月、菅直人内閣は「原発輸出継続」を閣議決定。翌９月、ベトナム南東部のニントァン第二原発に２基建設する覚書を締結。２０１２年１月、日本・ベトナム原子力協定が発効した。

同年、政権を奪い返した安倍首相は輸出政策を一層鮮明に打ちだし、１３年、トルコ、ＵＡＥのそれぞれと二国間原子力協定に署名。１４年４月に閣議決定した「エネルギー基本計画」で、原発をベースロード電源と位置づけ、「発電コストが低廉で安定的に発電でき、昼夜を問わず継続的に稼働できる電源」として輸出を積極的に展開することとした。このうえに立って安倍首相は海外への売り込みを開始。フランスのオランド大統領との首脳会談で両国の原発推進を確認し、インドのシン首相との首脳会談では原子力協定を早期に結ぶことで合意した。

『世界の原発産業と日本の原発輸出』によると、２０１

５年までに日本が関係した海外の原発事業はアメリカ、中国、台湾、ベトナム、インドネシア、カザフスタン、ＵＡＥ、トルコ、サウジアラビア、ヨルダン、リトアニア、フィンランド、イギリス、ブルガリア、チェコ、ポーランドなど１６の国、地域にのぼる。

メーカー別では以下の通りである。

【東芝】

サウス・テキス・プロジェクトの２基受注（アメリカ）、三門原発１、２号機、海陽原発１、２号機など受注（中国）、ゴズロイド原発７号機受注基本合意（ブルガリア）など。

【日立】

原発事業会社ホラインズ社を買収（イギリス）、バルト３国と事業会社設立（リトアニア）など。

【三菱重工】

仏アレバ社との企業連合がシノップ原発４基受注（トルコ）、テキサス州の原発２基新設計画に参加（アメリカ）など。

地震国トルコへの輸出頓挫

前項で述べたように、原発輸出事業は政府と原発企業にとって順風満帆に進んだようにみえた。だが、その底流では逆風が吹いていた。

日本のアメリカ進出例として注目されたサウス・テキサス・プロジェクト（ＳＳＴ）の場合、２００９年に改良沸騰水型原発２基の受注に成功したものの、福島原発事故を受けてアメリカの原子力規制委員会が態度を硬化、計画は停止状態になった。同計画に東芝が投じた出資や融資などの６００億円以上が宙に浮いた形だ。

リトアニアに輸出する原発計画は２０１２年、国民投票で否定され、１６年にはベトナムでの計画が白紙撤回された。

インドへの輸出を前提に２０１６年、日印原子力協定が結ばれたが、いまだに計画は具体化していない。三菱重工がトルコの黒海沿岸に中型の原発４基を建設する計画については、耐震対策費などの増加で当初２・１兆円程度と見積もられていた総事業費が５兆円規模に増大したことから頓挫した。

すでに触れたが、トルコへの輸出計画については、安倍首相が２０１３年５月にトルコを訪れ、日本とトルコの原子力協定と政府間協定を締結、日本に優先交渉権が与えられてた首相肝いり事業。三菱重工、伊藤忠商事、ＥＵＳＡ（トルコの発電会社）などで「プロジェクト会社」を設立し、最新加圧水型原子炉４基の建設を提案。２０２３年運転開始を目標とした。総事業費は２２０億ドル。日本の企業の海外プロジェクトとしては最大規模だ。

トルコは我が国と同様、地震国だ。１９９０年以降、Ｍ６以上の地震が７２回も起きており、１９９９年のトルコ北西部地震では１万７０００人以上が亡くなっている。こうした地震対策費も当然織り込んでおかねばならない。実際、ロシアの企業が受注したプロジェクトではコストが２００ドルから２５０ドルに跳ね上がり、さらに見直しを迫られていると伝えられている。結局、地震

対策費の膨張で計画が挫折したわけで、地震によって福島事故が起きた当該の国としてはまことにお粗末な計画だった。

『世界の原発産業と日本の原発輸出』の著者の中野氏は「トルコのエネルギー専門家は原子力発電が他の代替エネルギー源に比べて長期的にコスト高になると指摘している」という。原発は高い買い物なのだ。

政府は１キロワット当たりの発電コストが一般水力１３・６円、石油火力１０・２円、石炭火力６・５円、ＬＮＧ火力６・４円に対し、原子力は５・３円と算定、「一番安い」と言い続けてきた。しかし、火力９・９１円、一般水力３・９１円に対し原子力は１０・２５円と政府発表の２倍にもなる最も高いエネルギーと算出する研究者もいる。トルコのエネルギー専門家の指摘と合わせてみると、政府のいう「安い買い物」を真に受ける買い手が海外にはいないということだろう。

脱原発への新聞論調

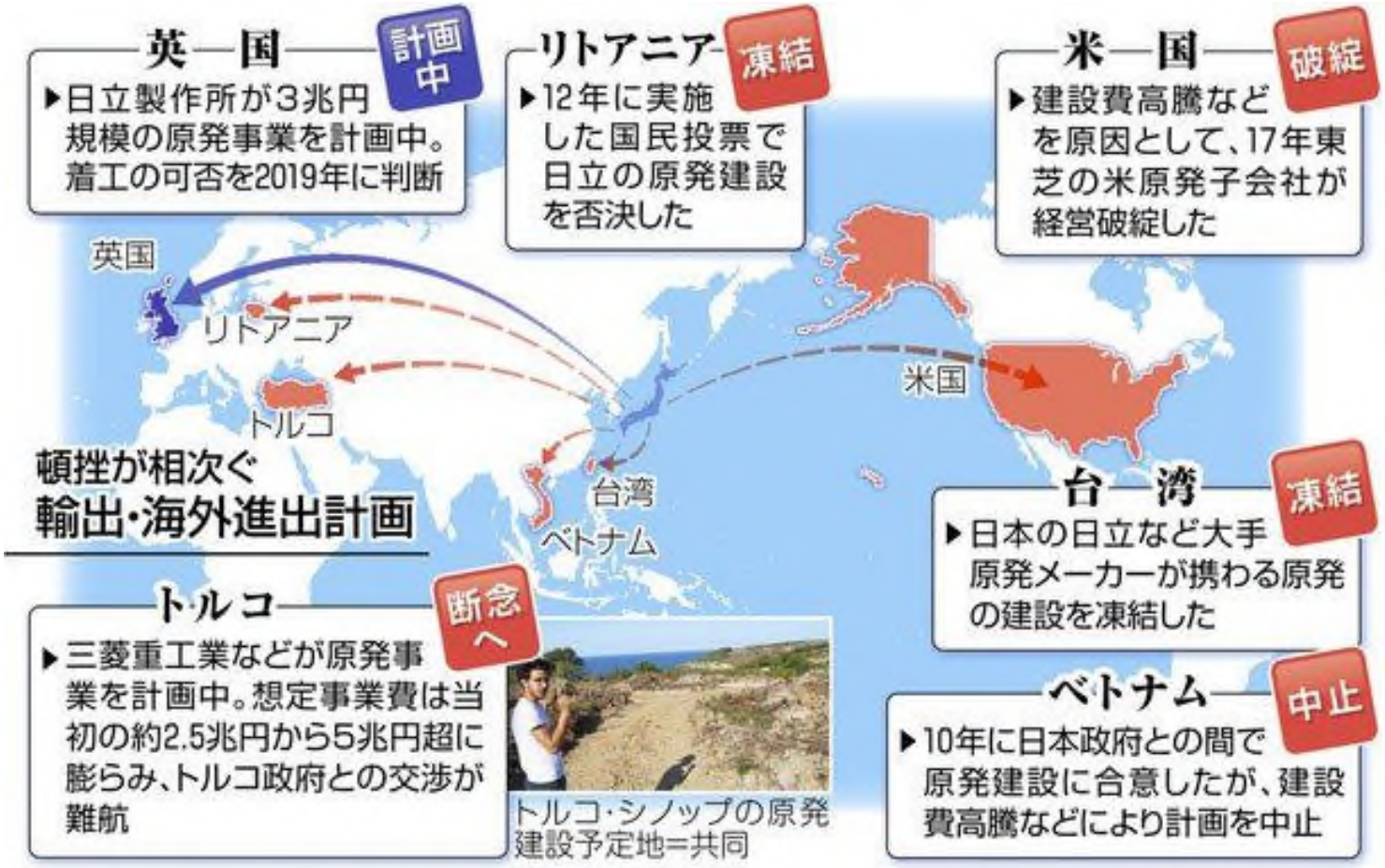
日立の決定の１カ月前の２０１８年１２月２５日、毎日新聞は「総崩れの原発輸出　官邸・経産省の責任は重い」と見出しをつけて社説を掲載した。「安倍政権が成長戦略の柱に据える原発輸出産業が、総崩れの様相を呈している」と書き出し、英国への原発輸出計画について「日立はリスク分散のため大手電力会社などに出資を求めたが、採算性が悪化したため難航。早期に利益を確保するため、英国政府に要請した電気の買い取り価格の引き上げも、欧州連合（ＥＵ）離脱を巡る英政界の混乱が手伝って行き詰っている」と説明。「経産省が、原発を電源構成の柱のひとつと位置づけ、原子力産業の保護・育成をはかっていた」と政府政策を解説し、「原発事故以降は、国内での原発計画が見込めない中で、輸出によって原子力産業の規模を維持し、同時に関連技術や人材を継承するという思惑があった」と指摘した。福島事故で日本国内では安全対策費がかさんで新設が難しいので、外国に売り出して儲けようという魂胆だったというのだ。

だが、「事故を起した国の原発」への目は国外でも想定以上に厳しく、英国での建設計画もトルコでの計画も、安全対策費が当初見込みより膨れ上がり、採算の見通しが立たなくなったというしだいだ。

同社説は「原発事故を契機に、世界の潮流は変わっていた。安全対策費を含めた原発の建設費が大幅に増大する一方で、太陽光発電などの再生可能エネルギーは、急速な拡大に伴ってコストを下げている。原発の相対的な価格競争は低下している。もはや安い電源とはいえない」と、原発輸出に固執する政府を批判。「そもそも、日本は史上最悪レベルの原発事故を引きこし、数十年にわたる廃炉作業の道半ばにある」との現状を踏まえて「速やかな脱原発に向けて原子力政策を抜本的に見直すべきだ」と提言している。

福島第一原発の事故の反省に立てば、他の国の人たちに同じような犠牲を強いる恐れのある原発というものを売り込めるはずがない。地震の被害に遭った当事国が地震対策費を十分に盛り込まずに計画を立てた実態をみれ

ば、福島事故から何も学ばなかったというほかない。核のゴミを排出する原子炉である。採算が合おうが合うまいが、原発を輸出してはならない。それが事故を起した国民の共通認識であるべきだ。国のトップにその認識がないならば、トップに居座る資格はないと私は考える。



（了）

breath of CITY

　めぐりめく変化する都市光景を一期一会として感じるままに
ファンインダーのフルフレームで切り撮っています。
　人間が利便性を探求して作り上げた都市が今や独自に生きる術を
得たかのように朝・昼・晩と表情を変えながら人の心を揺さぶり
その反応を眺めているかの様な虚実的な都市の空気感を撮らえて
行きたいと思っています。

北　博文

神戸生まれ。神戸市外国語大学卒業。
建築士、フォトグラファー。
http://tefteff.com/index.html

premium
you will
coffee beans

編集長が行く

砂川闘争の現場を訪ねる
～砂川一審判決６０周年を前に～

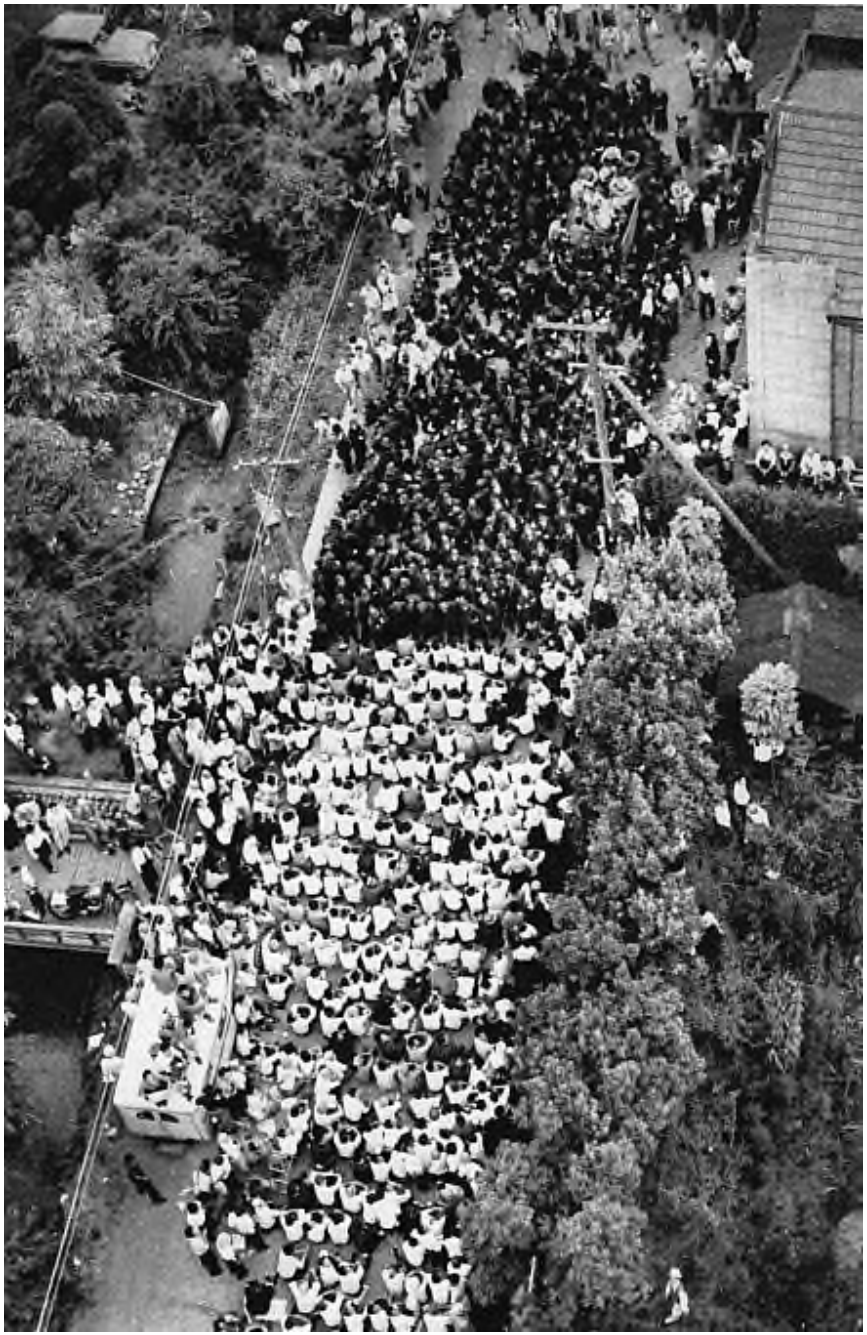
文・写真　**Lapiz** 編集長　井上脩身

今年３月３０日、砂川事件の第一審判決から６０年周年を迎える。「米軍の駐留は憲法９条違反」と断じた伊達秋雄裁判長の判決（伊達判決）は護憲運動の理論的支柱となってきたが、伊達判決は最高裁で覆され、米軍は沖縄を中心に日本に居座り続けている。加えて安倍政権はこの最高裁判決を根拠として、集団的自衛権の行使容認を閣議決定し、安保法制を成立させた。ところが最近、当時の最高裁判事が「判決は憲法９条や自衛権のあり方に踏み込んだ判断を示していない」と明記したメモの存在が明らかになった。最高裁判決自体、当時の政府にすりよったものだが、このメモはその判決が集団的自衛権行使容認の法的根拠といえないことを明白に示すもので、閣議決定の合法性が失われた、と私は考える。そもそも砂川事件とは何だったのか。東京都立川市の事件現場に足を運んだ。

（写真：旧砂川町に立つ「砂川五差路」の道路標識）

警察官に抗議する住民たち（ウイキペディアより）

警察官に抵抗する住民たち（ウィキペディアより）



警察官と対峙する住民たち（ウィキペディアより）

展開された流血闘争

東京都の立川市を中心に広がる米軍の立川基地は、元は旧日本軍の飛行場。戦後、米軍がＢ５２、Ｂ５７などの大型爆撃機の発着のために滑走路の延長を決定。これを受けて１９５５年５月、調達庁（現防衛施設庁）が東京都の砂川町長に基地拡張計画を申し入れた。計画には農地や宅地が含まれており、地元民は①拡張予定地は先祖伝来の土地②町の動脈である街道が分断される③原水爆を搭載するジェット爆撃機が発着し、原子戦争の基地になる――などとして反対の声を上げ、「砂川基地拡張反対同盟」が結成された。

同年９月ごろから予備測量が行われて境界が確定。５６年から本測量が始まった。１０月１２、１３日に行われた測量には総評、全学連、市民団体などの支援組織も加わって阻止運動が展開されて機動隊と激突。１０００人を超える負傷者が出る流血闘争となり、政府は測量中止を表明した。（土屋源太郎編著『砂川判決と安保法制――最高裁判決は違憲だった』世界書院）

５７年、占領軍に強制収容された土地の所有者である青木市五郎さんが国を相手取って所有地の明け渡しを求める訴訟を起こしたことを機に、国は土地収用法に基づく強制収用を決定、そのための測量を行った。この結果、基地内の私有地の測量反対闘争へと進展。７月８日、反対派が基地の柵を数十メートルにわたって破壊、この破壊か所から７人が侵入したとして日米行政協定に伴う刑事特別法違反容疑で逮捕、起訴された。

東京地裁の伊達秋雄裁判長は冒頭に述べたように５９年３月３０日、米軍の駐留は違憲とし全員無罪の判決を下した。その理由は概要以下の通りである。

憲法は９条において、国家の政策の手段としての戦争、武力による威嚇または武力の行使を永久に放棄したのみならず、国家が戦争を行う権利を一切認めず、陸海空軍その他の戦力を一切保持しないと規定している。同条は自衛権を否定するものではないが、侵略戦争はもちろん、自衛のための戦争や自衛のための戦力の保持も許さないのであって、正義と秩序を基調とする世界の永遠の平和を実現するための先駆たらんとする高遠な理想と悲壮な決意を示すものといわなければならない。憲法９条の解釈はこのような憲法の理念を十分考慮したうえでなされねばならない。合衆国軍隊の我が国への駐留について（の判断）も、わが国の安全と生存を維持するために必要であり政策上やむを得ないとする政策論によって左右されてはならない。

これらのことを考察すると、わが国が外部からの武力攻撃に対する自衛目的で合衆国軍隊の駐留を許容していることは、憲法９条２項前段によって禁止されている陸海空軍その他の戦力にあたるといわざるを得ず、わが国内に駐留する合衆国軍隊は憲法上その存在を許すべからずものといわざるを得ない。よって刑事特別法の規定は

憲法３１条（法定の手続きの保障）に違反し無効である。

統治行為論と集団的自衛権

闘争中、住民たちが服につけた布

砂川一審判決に驚愕した政府は最高裁に跳躍上告した。その審理を公正に行うべき最高責任者である田中耕太郎最高裁長官が米太平洋軍司令部のフェルト長官らと非公式に会談し、「来年（１９６０年）の初めまでには判決を出せるようにしたい」と述べるなど、米軍寄りの姿勢を示していたことが後に明かるみになるが、ここでは判決そのものに絞りたい。

最高裁大法廷は１９５９年１２月１６日、地裁判決を破棄する判決を下した。その理由として「これ（憲法９条の規定）によりわが国が持つ固有の自衛権は何ら否定されたものではなく、わが憲法の平和主義は決して無防備、無抵抗を定めたものではない」とし、「他国に安全保障を求めることを何ら禁ずるものではない」とした。その一方で、「本件（日米）安全保障条約は、主権国としてのわが国の存立の基礎に極めて重大な関係を持つ高度の政治性を有するものというべきで、その内容が違憲なりや否やの法的判断は、その条約を締結した内閣、それを承認した国会の高度の政治的ないし自由裁量的判断と表裏をなす点が少なくない。それ故、違憲なりや否やの法的判断はその使命とする司法判断の審査には原則としてなじまない性格のもので、一見極めて明白に違憲無効であると認められない限りは、裁判所の司法審査権の範囲外」とした。

この司法判断の審査になじまず、司法審査権の範囲外という考えは「統治行為論」と呼ばれるもので、「憲法の番人であることをやめた」と強く批判された。実際、高度に政治性のある案件について司法が何ら機能しないのであれば、政府の暴走を食い止めることは誰もできなくなる。統治行為論は司法が政府や国会の下位であることを認めたに等しく、この最高裁判決をもって三権分立が事実上崩壊したといって過言でない。こうした観点から私はこの判決には否定的評価をしているが、問題はこの最高裁判決が集団的自衛権行使容認の根拠になるのかである。

集団的自衛権について、政府は２０１４年７月１日の臨時閣議で、従来の憲法解釈を変更して行使の容認を決定。他国に対する武力攻撃に際して自衛権を発動させる

畑すれすれに飛ぶ米軍戦闘機（平和ひろばの展示写真より）

もので、「わが国と密接な関係にある他国に対する武力攻撃」が発生した場合、必要最小限の武力を行使することは「自衛のための措置として憲法上許される」とした。「わが国と密接な関係にある他国」がアメリカを指すことは明らかで、「地球の裏側まで自衛の範囲になる」と強い疑念の声が出た。

これに対し高村正彦自民党副総裁（当時）は、砂川最高裁判決が「わが国が持つ固有の自衛権は何ら否定したものではない」としたことを理由に挙げて、「最高裁判決によって集団的自衛権行使は憲法上認められている」と主張、安倍首相の強硬路線の後ろ盾となった。高村氏の主張の背景には、前年、安保法制懇報告書のなかに「最高裁判決は集団的自衛権と個別的自衛権と区別して論じておらず、したがって集団的自衛権を禁じていない」との記載があることだ。「集団的自衛権の行使はできないとは書いてないので、集団的自衛権行使は可能」というのだ。だれがみても屁理屈でしかないが、安倍政権は強引にまかり通したのだ。

「自衛権判断せず」メモ発見

屁理屈をこねまわす安倍政権にとって痛打となるメモは法制局長官（現内閣法制局長官）出身の入江俊郎裁判官（故人）が記載していた。２０１８年１１月１９日付毎日新聞によると、憲法史研究者の嘉多山宗弁護士が入江氏の私物の最高裁判例集を調べたところ、目次の余白の部分に「砂川事件」「入江　多数説起案」との書き込みがあるのを発見、砂川事件の最高裁判決の起案者が入江判事であったことが判明した。砂川判決の起案者が長らく不明だっただけに、そのメモの内容は注目された。

別のページの余白には「『自衛の為に必要な武力、自衛施設をもってよい』とまでは云わない」とのメモがあった。さらに、判決が「自国の平和と安全を維持しその存立を全うするための措置をとりうる」と言及した点について、「必要な措置をとりうるという中には、その為に必要な準備とその使用は当然みとめている」としながらも「ただそこまで、積極的に本件としてはいわなくてよかった」と、判断を意識的に避けたことを明記していた。加えて「本判決の主旨は、自衛の手段は持ちうる。それまではいっていると解釈してよい。ただそれが（憲法９条）二項の戦力の程度にあってもよいのか、又はそれに至らない程度ならよいのかについては全然触れていないとみるべきであろう」と指摘。自衛隊の合憲・違憲という個別的自衛権に関する判断も行っていないことを重ねて強調した。

このメモの存在を報じた川名壮志記者は、同紙の同年１１月２８日付「記者の目」で、「判決を起案した裁判官として他の１４人の裁判官の考えを一つにまとめた入

江が、そもそも判決は自衛権の具体的あり方には何も触れていないと、繰り返し強調していた」ことに驚かされた、と述懐。さらにメモを分析した嘉多山弁護士の「統治行為論で日米安保条約が違憲かどうかの判断を避けた以上、自衛のあり方については踏み込まずに全裁判官の意見を集約したことが確認された」との見解を紹介した。

記事によると、入江氏は現憲法の起草にも携わっており、最高裁の裁判官になったのは史上最年少の５１歳。在任期間は１８年に及んだ。統治行為論の理論的支柱で、政治のバランスの重要性を熟知する有能な行政官僚だったという。川名記者は「国際法上、集団的自衛権は権利として認められている。政府が時代の要請に応じて集団的自衛権を含めて防衛のあり方を考えるのは当然だろう」と、政府に一定の理解を示しながらも「だが、入江のメモを読む限り、『憲法の番人が認めている』として砂川判決を集団的自衛権合憲の解釈変更に使ったのは、相当無理があったというほかない」と結論づけている。

１１月１９日付記事には学者の見解として曽我部真裕・京大教授（憲法）の談話を掲載。曽我部教授は「判決が自衛権や自衛隊のあり方について司法判断を示さない姿勢を取っていることが分かった。最高裁が集団的自衛権についてお墨付きを与えているとする政府見解には、やはり無理があるだろう」と述べている。

入江氏のメモに戻ろう。「本判決の主旨は、自衛の手段は持ちうる。それまではいっていると解釈してよい。ただそれが（憲法９条）二項の戦力の程度にあってもよいのか、又はそれに至らない程度ならよいのかにつては全然触れていないとみるべきであろう」という記述がポイントだ。自衛の手段として持ち得る手段は、上限が憲法９条２項の戦力の程度、というのだ。憲法９条２項は「前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない」である。この規定とよる戦力の程度とはどの程度なのだろうか。

忘れてはならないのは、砂川裁判はわが国に米軍が駐留していることが憲法に違反するかどうかが問われた案件であることだ。米軍統治下の沖縄の基地の是非でなく、ましてや地球の裏側における駐留問題ではない。したがってここにいう「戦力の程度」とは最大が日米安保条約で決められた程度を指す。安保条約は「日本国の施政の下にある領域における、いずれか一方の武力攻撃」（第５条）について規定したものだ。入江氏ら裁判官が判決を下すに際して、日本列島とその領域の外の地域について全く念頭に置かなかったのはまぎれもない。したがってどのように屁理屈をつけても、最高裁判決がわが国の領域外での集団的自衛権行使容認の根拠になるはずがない。

事件資料残す平和ひろば

砂川事件の現場となった立川基地は、旧日本軍が１９２２年、帝都防衛の拠点として飛行場を設けたのが最初。戦後、米軍が摂取し、２０００メートルを新設。５６年、立川基地の名称になった。同基地計画の９０パーセントにあたる２５万平方メートルの用地が買収されたが、ベトナム戦争では横田基地が主に使用され、６８年、米軍は拡張計画を中止。６９年１２月には飛行を停止し、７７年、全面返還された。現在は陸上自衛隊立川駐屯地、

プレハブ造りの「砂川平和ひろば」

警視庁航空隊、東京消防庁航空隊などのほか、国営昭和記念公園としてボート池や渓流、日本庭園もある憩いの場にもなっている。

私はＪ Ｒ 立川駅を降り、とりあえず昭和記念公園を目指した。地図には同公園の北に自衛隊の駐屯地が記載されているからだ。同公園から北に進むと駐屯地の柵が張りめぐらされている。柵の内側ではとこどころで雑木林が広がっている。その合間から奥多摩の山々が望める。元は武蔵野の林が点在する自然が豊かな所だったにちがいない。

歩き出して１時間ほどたったころ、柵の北の端に到達した。「砂川五差路」の道路標識があり、このあたりが旧砂川町だとわかる。柵はここで直角に曲がっている。その柵に沿って今度は西に向かう。１００メートルほど歩いたところで、柵の隙間から雪でまっ白に覆われた富士山がくっきりと見えた。見とれていると、大型ヘリが降りてきた。

ヘリをカメラに収めてふりかえったとき、道路を隔てて反対側に「砂川平和ひろば」と壁に書かれた平屋建てプレハブ小屋が見えた。

小屋は基地拡張反対運動の副行動隊長だった宮岡政雄さんの次女、福島京子さんが「若い人にも砂川闘争を知ってもらおう」と２０１０年につくった。広さ約３０平方メートルの「砂川平和ひろば」は反戦平和運動の拠点でもあるという。

中に入ると、「砂川町団結反対同盟」と墨でかかれたむしろ旗が出迎えてくれた。展示ケースには「基地拡張絶対反対」などと記された長さ５０センチ、幅５センチの細長い布。地元民はこの布を服につけ、むしろ旗を掲げて闘ったのだろうか。天井には「砂川の大地からとどけ平和の声」とかかれたのぼりが吊るされている。壁には１０数点の当時の写真。家々や畑のすぐ上を戦闘機が降りてくる写真にショックを受けた。米軍は地元の農民を人と思っていなかったのではないか。傍若無人という言葉も当てはまらないほどに人々の生活を無残に荒らしているではないか。これでは住民たちの怒りが爆発するのは当然だ。

「ひろば」の当番の男性が「近くに逮捕された場所がある」と教えてくれた。「ひろば」の脇から柵が東西に延びている。この柵は事件当時の基地の柵の位置に当たり、「ひろば」から３０メートル東の、いまは狭い道になっている所が現場だという。

現場の脇のコンクリートの壁にわけのわからない落書きがかかれている。おそらくここが砂川闘争の歴史的現

ヘリが離発着する滑走路

場とは知らずにいたずらをしたものだろう。他意はないのかもしれないが、砂川平和ひろばのそばだけに暗然とした思いにかられた。

この現場周辺は畑地になっている。この少し北に団結小屋が建っていたという。

軍事費膨張の防衛大綱

政府は昨年１２月、新しい防衛計画の大綱と中期防衛力整備計画を閣議決定した。防衛大綱は「中国の軍事行動は強い懸念であり、北朝鮮の核・ミサイル能力は重大で差し迫った脅威」として①宇宙・サイバー・電磁波などの「新たな領域」での優位性獲得②陸海空に新領域を融合させて領域横断作戦を可能にする多次元統合防衛力の構築③現有の艦艇から短距離離陸・垂直着陸型（ＳＴＯＶＬ）戦闘機の運用――などを挙げた。中期防では「２０１９～２３年度の防衛費は現行の中期防（１４～１８年度）よりも２兆８０００億円多い２７兆４７００億円とし、①ステレス戦闘機Ｆ３５を４５機調達。うちＳＴＯＶＬ機のＦ３５Ｂは１８機整備②ＳＴＯＶＬ機の運用が可能となるよう海自護衛艦「いずも」を空母化に改修――などとしている。

これらがただちに集団的自衛権の行使のための戦力というわけではない。ただ、そうした思惑を込めての防衛力整備であるとみるべきだろう。ことし１０月から１０％にアップする消費税が集団的自衛権の行使に使われる可能性がないとは言いきれないと私は危惧する。

伊達判決の「憲法は自衛戦争も許していない」という考えには護憲派内にも異論がある。だが自衛のためであろうがなかろうが、戦争というもの、軍事行動というものは人、とりわけ農民の生活の手段を根柢から破壊するものであることは、古代から現代に至るまで、ありとあらゆる事例から明白だ。まして他国にでかけて「自衛のため」と称して、その国の人たちに塗炭の苦しみをさせることなど、断じて許されない。砂川闘争の魂、伊達判決の精神はこの一点にあると言っても過言でない。

（了）

［リニア中央新幹線はいま］

静岡県とJR 東海の協議進まず
大井川水系の流量減少リスク等で基本認識に差、静岡工区未着工のまま

文　渡辺幸重

◎中央新幹線環境保全連絡会議で静岡県と JR 東海が対立

リニア工事
議論かみ合わず紛糾
県・有識者とJR協議　リスク認識に差

静岡県と JR 東海の対立を伝える毎日新聞静岡版

「このような事業のやり方は認められない」――今年の 1 月 25 日、静岡県庁での会議で静岡県の難波喬司副知事が語気を強め、こう言い切った。言われた側の JR 東海側も、傍聴席の県民も驚いたほどの強さだった。翌日の新聞には「リニア工事　議論かみ合わず紛糾」「リニア工事　県と JR　審議進まず」などの見出しが躍った。

この会議の名称は「静岡県中央新幹線環境保全連絡会議　第 1 回地質構造・水資源専門部会」。リニア中央新幹線静岡工区内の南アルプストンネル工事に伴って大井川水系の流量が減少する問題で、静岡県が昨年末に JR 東海に 63 項目の質問状を出しており、JR 東海がその回答を提出して説明する予定の場でのことだった。質問書は「地質構造・水資源」に関して 36 項目、「生物多様性」に関して 27 項目あり、「トンネル工事に伴う全体の影響予測の中で不確実性の存在や程度の推定及び管理方針に対する基本的考え方」「限られたボーリング調査に基づく諸定数の信頼性（不確実性）」「大量の湧水による地盤沈下など不測の事態が起きる可能性についての基本認識」「何らかの理由により中央新幹線が廃止となった場合や JR 東海が存続できなくなった場合の恒久的にトンネル湧水を戻す処置」など基本認識に関する質問のほか「工事中の湧水全量戻しの確実な方法」「湧水温度や水質のコントロール」「突発的湧水の発生事態リスクへの

南アルプストンネル問題を訴える市民グループ（静岡県庁前で）

見解」「中下流域地下水への影響に関する見解」など多岐にわたっている。

この日の専門部会では、リスク管理に対する基本認識について議論が行われ、静岡県側が JR 東海に対して、流量減少などのリスク予測に不確実性があることを認めた上で事前のリスク軽減に努力することを求めた。これに対して JR 東海は、不確実性を認めながらも事前にできることは限られているとして実際の工事でデータを得ながら臨機応変に対応していくと説明。県は「基本認識に大きな差がある。これ以上、対話を進めようがない」と批判、議論は進まなかった。

難波副知事は会議後、報道陣に対して「このような不十分なリスク管理で巨大事業を行うという JR の意思が明確に示された。このようなやり方は認められないという意思表示をしたい」と述べた。

◎「公共事業チェック・議員の会」の国会議員がヒアリング

2 月 4 日、静岡県庁に「公共事業チェック・議員の会」の国会議員 4 人が訪れた。難波副知事をはじめとする県幹部から「リニア央中新幹線工事における大井川水系の水資源の確保及び自然環境の保全等に関する JR 東海との協議状況」についてヒアリングを行うのが目的。1 月 25 日の地質構造・水資源専門部会の内容などが静岡県側から説明され、大井川の水資源に頼っている農家、企業、住民の不安や自然生態系破壊への心配が伝えられた。また、事前予測の方法について県と JR 東海の間に大きな基本認識の違いがあることが話題となり、「JR 東海に誠意が見られない」という判断から初鹿明博衆議院議員（立憲民主党）が国会で JR 東海に対する説明を求める可能性を示唆した。参加した国会議員は、初鹿議員のほか、山崎誠衆議院議員（立憲民主党）、宮本たけし衆議院議員（共産党）、武田良介参議院議員（共産党）で、県庁前では「南アルプスとリニアを考える市民ネットワーク静岡」のメンバーらリニア中央新幹線建設に疑問を呈する住民が「大井川渇水・大量残土　JR 東海の環境破壊　南アルプスリニア巨大トンネル」と書いた横断幕で国会議員らにアピールした。

◎未経験の難工事が予想され、2026 年の完成に暗雲

リニア中央新幹線は、JR 東海による民間事業として計画されたリニアモーターカーで東京－大阪間を最短

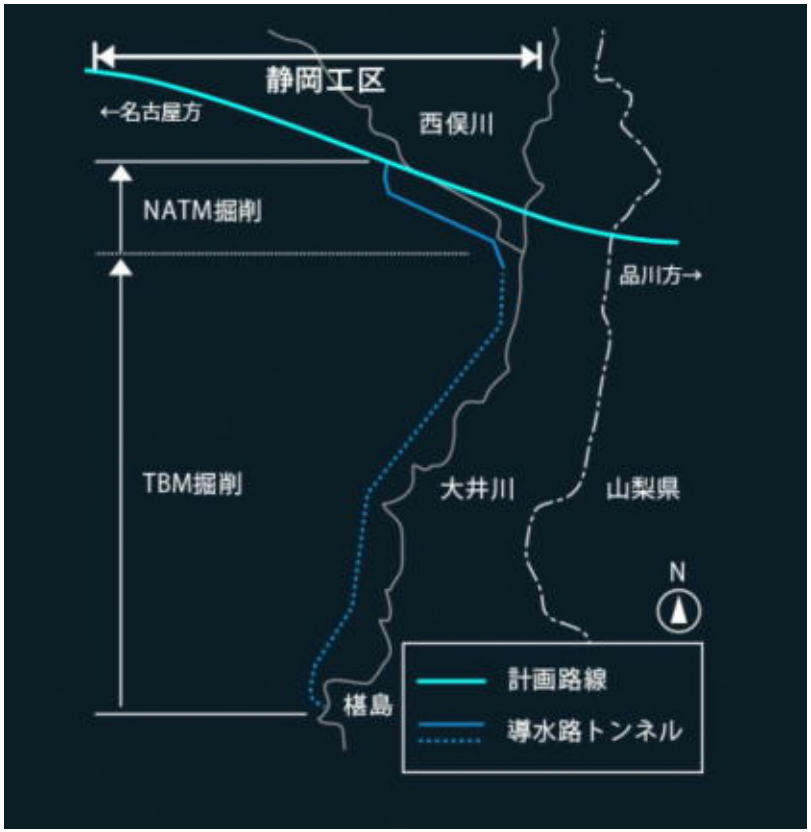
リニア中央新幹線のルート。南アルプスをいくつもの長いトンネルで抜ける

67 分で結ぶ新路線で、JR 東海は 2027 年の品川ー名古屋間開通をめざしている。財政投融資から 3 兆円の資金が出されることから公益事業となっており、スーパーゼネコンによる談合事件も起きている。

南アルプスはトンネルで通過することになっており、山梨工区、静岡工区、長野工区に別れる。トンネル工事には 10 年かかる予定だが、日本で有数の山岳地帯を通るトンネルは地表から最大 1,400m の地中を貫く未経験の工事で、「掘ってみなければ何があるか分からない」と言われるほどの難工事が予想されることから 2026 年 10 月に完成時期（予定）には間に合わず大幅に開通が遅れると予想する人も多い。その中でも静岡工区は、品川ー名古屋間で唯一未着工の区間となっており、JR 東海にとっては大きな障害となっている。

◎平行線の議論の行く末は？

JR 東海は「環境省や国土交通省に環境影響評価書を提出し、沿線各県に意見を聞くなど法にのっとってやってきた。会社としてきちんと対応している」という立場で、今回の静岡県の指摘に対しては「実際の工事でデータを



JR 東海は、トンネル湧水は全量、導水路トンネルで下流に放出するとしている

得ながら臨機応変に対応していく」としている。しかし、その姿勢では静岡県の要求に答えることにはならず、といって他の対応方法も難しいとしているため静岡県の強い立場には「困惑している」というのが本音だ。

一方、静岡県は法的な手続き論で言うと工事を止めるまでの権限はない。しかし、指摘している問題は静岡県の産業や県民の生活、自然生態系にとって深刻な内容ばかりで、簡単には引き下がれないということのようだ。関係市町と連携して JR 東海に誠意のある対応を求めていくとしている。
しばらくは平行線の議論が続きそうだ。

◎環境アセス法の抜本的改正と地方自治体の権限強化を

ここで取り上げられている問題は、本来ならばもっと以前に検討すべきことばかりである。なぜ今になってこのような事態になっているのだろうか。
その原因の一つは、環境アセスメントの考え方、やり方にある。すなわち、環境影響評価法が十分でないということだ。

現在の環境アセスメントは事業が決まってから実施する“事業アセスメント”であり、事業実施を前提に評価を行うので最小限の変更・修正しか行われない。これに対し“計画アセスメント（あるいは戦略的環境アセスメント）”は、計画を立てる段階で大気、騒音、悪臭、水質、地質、生物多様性の確保、温室効果ガスの排出、景観などを対象に行うので、計画の大幅修正や断念もありうる。
環境影響評価法を計画アセスの考えで作るべきだという声は立法段階から出ている。その後も改正が不十分でいまだに事業アセスの考えに立っているので環境破壊が進んだという批判が出ている。今回のリニア中央新幹線南アルプストンネル問題も国レベルの手続きが進み、いざ着工という段階で流域の住民・企業の死活問題につながる議論がわき上がってきた。計画作成時にこれらの問題が議論されるよう環境影響評価法の抜本的改正が必要

で、立法府はこれまでの怠慢を反省して早急に取り組むべきである。
もう一つ指摘したいのは地方自治体の権限が弱い点である。地方分権一括法によって国と地方自治体は対等であると宣言されたものの実際はそうなっていない。沖縄・辺野古新基地建設では沖縄県を先頭に“オール沖縄”で反対しているにもかかわらず、国はなりふりかまわず建設工事を強行している。
南アルプストンネル問題は、静岡県・流域市町と JR 東海の対立となっているが、リニア中央新幹線工事は、原発と同じように “国策”とも言えるもので、国は、関係自治体から「意見を聞く」程度で地元の問題を軽視したまま計画の推進を認めてきた。何かあっても後戻りできない巨大プロジェクトだからこそ、地域の住民の暮らしや産業を守る立場の地方自治体に場合によっては工事をストップさせるくらいの権限を持たせるべきであろう。

◎県民の声を背景にした課題解決へ

大井川流域の住民を除けば、静岡県民の関心度は高くない。すでに沿線のあちこちで工事が始まっていることもあって諦めムードも蔓延している。既成事実を積み重ねて反対意見を封じ込めるというのがこれまでの巨大プロジェクトを進める側の常道であった。しかし、今回の工事は日本を代表する山岳・南アルプスを巨大トンネルで貫くという前代未聞の規模であり、未知の領域に足を踏み込むことになる。工事優先の考えではなく、取り返しのつかない事態を避けるためにここは徹底した議論が必要であろう。静岡県・流域市町は住民に十分に問題点を説明し、県民と一体となって国と JR 東海に誠意ある対応策を迫るべきだ。

実験線を走るリニアモーターカー

（了）

人物時計

第二土曜日の再会

大阪ぐりぐりマルシェ

（御堂筋西沿い難波神社境内）

写真・文　中川眞須良

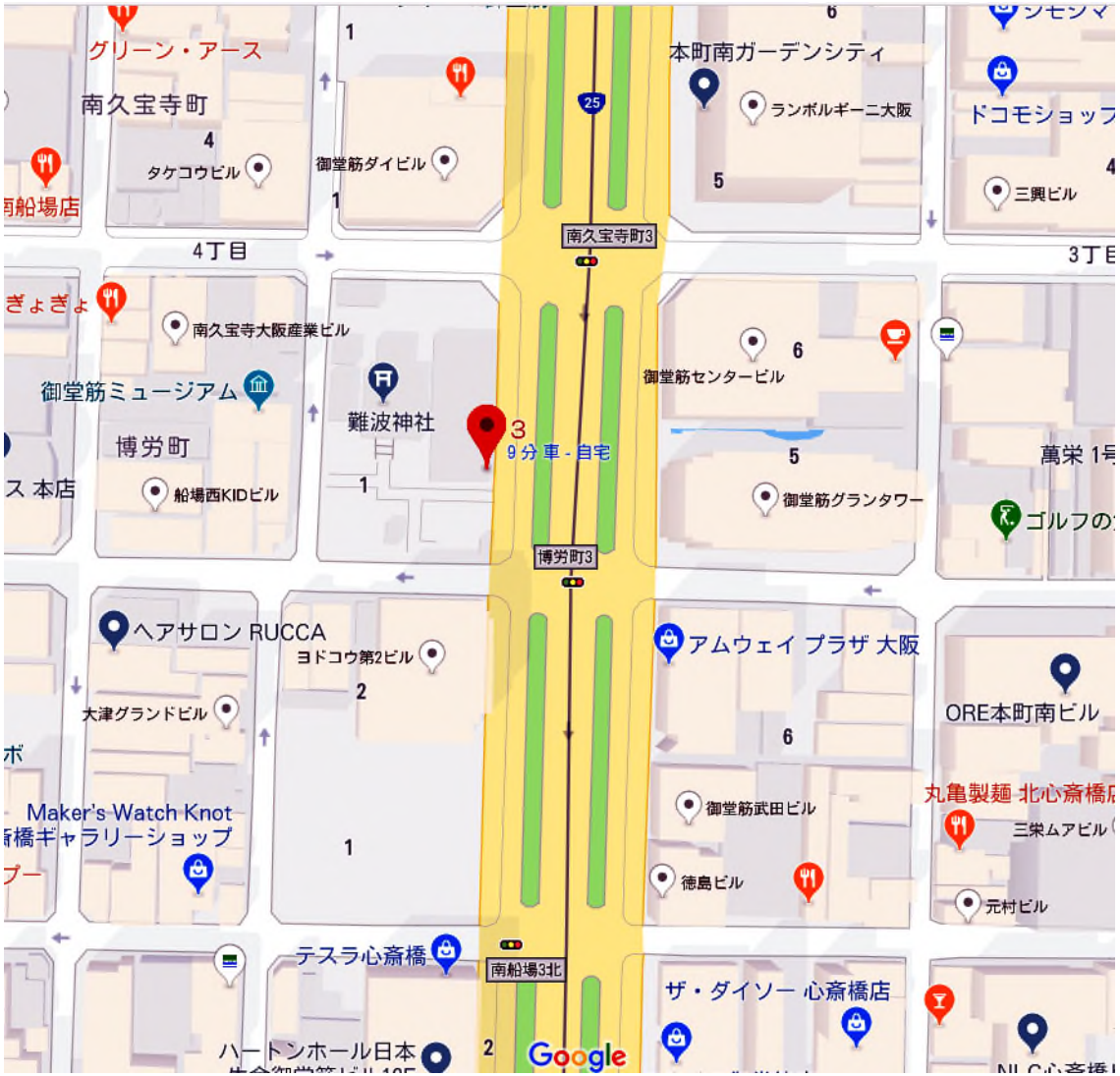
毎月第二土曜日、ここに人と人とのつながりを重視した、自然に寄り添い、大地に負担をかけず、収穫物の旬を大切にし、さらに本来の味を追い求めながらの農産物及びそれらの加工品全般の即売会の「市」が立っている。

取り扱われている品物は現物（コメ・麦・大豆・野菜全般）、加工品（豆腐・こんにゃく・茶・ジャム・油など）、食品以外の関連品（染物・生地・小物・アクセサリーなど）、その場で味を楽しめるジューズ、コーヒー、カレー、餃子の店など、多様にわたり店舗総数は約 **30** に及ぶ。この「市」の一番の特徴は何といっても、あたたかい人の繋がりと底抜けの明るさである。一店舗 **2・3** 人（夫婦・親子・兄弟・グループ・友人）とお客様との会話には、笑顔が絶えない。

今回より **4** 回にわたりこの「市」に出店して、常に自己を表に出し、奮闘している皆さんの表情を紹介します。

内板と難波神社の地図

御堂筋沿いの案



岸田の畑　（ひらかた独歩ふぁーむ）
畑長　岸田　崇　（きしだ　たかし）

　オーガニック農法にこだわり、沖縄野菜を中心に生産販売。
「野菜本来の味を引き出すにはこのやり方しかありません」 吹田市在住

食と農を考える!
世界に誇る農業革命!!
オーガニック・エコフェスタ2018
農業技術者会議

最優秀賞

白菜部門
岸田　崇 殿

あなたの出品された農作物は
オーガニック・エコフェスタ2018栄養価コンテストにおいて
優秀な成績を収められましたのでこれを賞します

平成30年2月24日

一般社団法人日本有機農業普及協会
代表理事 小祝政明

紀州　漁彩　代表
加藤　元英　（かとう　もとひで）

「家庭で至高の一品を！」、「料亭の味を家庭で！」をモットーに元寿司店の経営のノウハウを生かし、開発に6年をかけメイン商品・紀州漁彩「金の鯛めし」に到達

「当マルシェ以外では入手困難かもしれません」

和歌山県橋本市在住

宿場町シリーズ

東海道・三島宿

未知の体験できそうな街
―走り飛脚に思いはせる旅―

文・写真　井上脩身

作家、宮部みゆきが『黒武御神火御殿』という小説を毎日新聞に連載している（2019年1月末現在）。苦難や災い、後悔話をじっくり聞いてくれる江戸・深川の三島屋に飛脚問屋亀屋の走り飛脚、亀一が顔を出す。亀一は餓鬼風邪で両親と妻と娘を亡くした悲しみを忘れるため、ひたすら飛脚として東海道を走っていて出合った出来事を、三島屋の当主、富次郎に打ち明ける――という物語がおもしろい。人情の機微を軽妙なタッチで描くこの小説に魅了され、すっかり宮部ファンになってしまった。さてその出来事。亀一が小田原宿から箱根宿を経て三島宿の手前まで降りてきたところで起きた。一体何事なのであろうか。私はこのラピスの宿場町シリーズで小田原宿、箱根宿を取り上げている。こうなれば何としてでも三島宿に行かねばならない。

箱根道の下りの終わり

新聞小説『黒武御神火御殿（藤枝リュウジ絵）』

『黒武御神火御殿』を引用して亀一の人となりを紹介しよう。どうしょうもないワルだった亀一だが、その逃げ足の速さを見込まれて飛脚になる。これが亀一の性に合い、３０歳のころには器量よし､気立てもよしの女房をもらい、珠のような女の子を授かった。逆らってばかりだった継父からも信頼されようになったが、幸せは長く続かなかった。娘が二つになった年の冬、たちの悪い風邪がはやった。遺体の下腹だけがぽっこりふくらむので「餓鬼風邪」と恐れられた。継父が倒れ、母親が寝込み、女房も動けなくなった。病は娘にも飛び火したのに、亀一は休むことができなかった。１月半ば、亀一が１０日ほどの遠走りから帰ると、両親は死んでいて女房もいまわの際に。ほどなく女房と娘も息を引き取った。

亀一は４人を葬ったあと、走っていないと正気を失いそうなので飛脚の仕事に戻った。その亀一のいでたち。細縞の着物の尻をはしょり、手甲脚絆をつけ、額には白い鉢巻き。藍染の丈の短い丸袖の半天の背中には、丸に「定」という定飛脚問屋のしるしがくっきり。書状箱をくくりつけた担ぎ棒の先端には、用向きによって違う御用札をぶらさげる。「奉行所」「月〆」「〇まわし」（割り増し）などの御用札に加えて、「手形」を示す黄色い札をさげている。

江戸市中のいくつかの商家からまとめて預かった手形を、日本橋をたって保土谷（武蔵）、小田原（相模）、沼津（駿河）、金谷（遠江）、吉田（三河）、草津（近江）の亀屋の取次所へ届けるのが亀一の仕事。帰り道でその決済書を受け取るのだ。亀一は今回も小田原の軒下で休んだだけで早朝、宿場を出た。箱根の関所で定飛脚の焼印札を役人にあらためてもらい、箱根峠を越えて三島宿へと下った。

箱根道の下りの終わりを示す一里塚から三島大社までの間に休み所がある。その手前の茶屋が焼けおちていた。人々の会話から落雷に遭ったとわかった。そのとき亀一はいきなりお寒に襲われた。

「宿場町」シリーズに飛脚を登場させるのは初めて。というわけでついつい亀一の紹介が長くなった。亀一のように、旅籠にも入らず、家の軒先で夜を過ごすというのも初めてのケースだ。今回はいささか勝手が違う。ともかく、落雷に遭ったという茶屋あたりを訪ねることにした。

歌川広重「東海道五十三次・三島」（ウィキペディアより）

三島には横浜から青春１８きっぷを使い、小田原と熱海で乗り換えた。三島駅から２車線の道を東に約２０分。河原ケ谷というバス停を過ぎると小さな祠がある。道はここで二つに分かれ、車道は右に急カーブし、幅５メートルの道は真っすぐ伸びている。この道が旧東海道。１００メートル先から山道へと急な上りになっている。少し歩いてみると小さな川が流れていて、愛宕橋という橋がかかっていた。雪をかぶった富士山が冬の空に浮かび上がっている。箱根から下ってここまでくると、誰だってほっとするだろう。作家の宮部さんに叱られるかもしれないが、一応このあたりを茶屋があった所とすることにした。三島宿探訪の旅の始まりである。

家康、ハリスゆかりの本陣

河原ケ谷バス停のすぐ西に大場川という川が北から南へと流れている。幅約３０メートル。ここに新町橋という橋がかかっていて、そのたもとに１９９６年に造られたコンクリート製灯ろうが建っている。この灯ろうの向こうに箱根の山々が見える。江戸から西に向かう旅人は、無事に箱根越えを終えたことに感慨を覚えたことだろう。

走り飛脚の亀一には感慨という情緒は無縁だ。たったとひた走る。その亀一の目に三島大社の鳥居と、行き交う参詣者たちが目に入ってきた。ここから先が三島宿。江戸から２８里２０丁。境内の入り口には客待ちの山駕籠がいくつか行儀よくとまっている。旅装の人びとのあいだをすりぬけて、亀一はひたすら走る――。

私は亀一のように走り続ける脚力はない。そもそもこれを機に、三島宿の名残を訪ねるのがこの旅の目的だ。新町橋から数分で三嶋大社に着いた。宮部は小説のなかで「三島大社」かいている。戦前は「三島神社」と称したが、戦後「三嶋大社」と称すようになったという。本稿では、小説の引用部以外は三嶋大社とする。

伊豆一宮である三嶋大社が歴史上最初に登場するのは『吾妻鏡』の承久４（１１８０）年の記事だが、天平宝治２（７５８）年に「伊豆三島神」があったことを示す記録があり、奈良時代には原型があったとみてよいだろう。戦国時代には後北条氏から造営の支援を受け、江戸

三島宿の二つの本陣を示す古図（樋口本陣掲示板より）

時代には５３０石を有していた。亀一がこの前を走り抜けたとき、神社は宿場に泊まる旅客や参拝客でにぎわって、すこぶる羽振りがよかったはずだ。

正門前の鳥居は「大鳥居」と通称されている。平安神宮のような巨大鳥居を想像していたが、高さ５メートル程度だから、大きいとは言えない。その鳥居をくぐると薄緑の堂々たる瓦屋根をのせた拝殿とその奥に本殿がある。いずれも国の重文だ。本殿には３０人くらいの参拝の列ができていた。ずらっと並ぶ山駕籠を彷彿とさせんばかりに、神社の横の駐車場には車がひっきりなしに出入りしている。

小説に「ここから先が三島宿」とある通り、ほどなく本通りから脇道にそれたところに問屋場跡の標識があった。そのそばの説明板には「役人をはじめ公用の貨客を運ぶため、人馬の調達を目的としたもの。問屋場には問屋年寄り、御次飛脚、賄人などがいた。三島は交通が多かったが、この問屋場１カ所ですべてをまかなっていた」とある。亀一はこの問屋場には立ち寄っていない。亀一が所属する亀屋の取次所は三島にはなかったようだ。

神社の前を東西に貫くこの道の両側に意匠を凝らした商店が建ち並ぶ。この街道のそこここで幅が５０センチの溝が交差している。溝にはきれいな水がさらさらと流れていてすがすがしい。富士山の地下水から流れてきたのだろう。

その脇に「世古本陣跡」の碑、さらに通りを隔て向かい側に「樋口本陣跡」の碑が見えた。樋口本陣跡はいま「山田園」という茶葉の店だ。趣のある瀟洒な店舗は「歴史的風致形成建造物」に指定されている。一方の世古本陣は一の本陣と呼ばれ、家康が５８歳のときここで阿万の方を見染めたとの逸話が残っている。眉唾ものであることはいうまでもない。初代アメリカの公使ハリスが三島に泊まったとき、この本陣の日本庭園を見たことを日記に残している。樋口本陣は世古本陣に負けず劣らす、書院造りの広大な屋敷だったという。

大名が泊まる三島の二つの本陣に亀一の用があるはずがない。亀一は脇目をふらずただ走る。

三島八景・三石の鐘

三石神社の「時の鐘」

小説には出てこないが、亀一は鐘の音を聞いたかもしれない。三石神社の鐘である。樋口本陣から２００メートルくらい東に進むと三石神社。本殿は幅５メートル程度の小さな社だ。その本殿から１５メートル離れたところに鐘楼。説明板には次のようにかかれている。

最初の鐘は寛永年間（１６２４～４４）に鋳造され、その後、何回か改鋳された。なかでも宝暦１１（１７６１）年、川原ケ谷の鋳物師、沼上氏によって造られた鐘は大きく、三島八景の一つになった。宿場の人たちはこの鐘で時間を知ることができ、旅人に親しまれた。戦時中に供出されたが１９５０年、市民の有志で再興された。

川原ケ谷は私がかってに落雷に遭った茶屋があった所とした地区名だ。偶然とは言い切れないだろう。亀一の耳にもその響きが入ったはずだ。その音色をじっくりと聞き入る余裕もなく亀一は走りに走ったにちがいない。

鐘楼の周りはいま青空休憩所になっている。脇を幅５メートルの川が流れており、夏は観光客の格好の涼み場だ。隣はうなぎ屋。どうやら有名なうなぎ屋らしく、十数人が自分の番を待っていた。三島の街を歩いて気づいたのはやたらうなぎ屋の多いことだ。私のようにうなぎに目もくれないのは、亀一同様、異端者かもしれない。

亀一の話に戻ろう。

三島宿の西の出口を抜け、喉の渇きを覚えても亀一は走りつづける。突然、ぷつんと脚絆の紐が切れた。街道は黄瀬川に迫り、松並木がまばらに散っている。脚絆を締め直し立ち上がったとき、半丁（５０メートル余り）ほど離れたところに、男が一人たたずんでいるのに気づいた。男は赤いタスキをしている。走っても走っても男はぴったり半丁後ろをついてくる。亀一は男に詰め寄った。銀杏まげのなまっちょろい顔は、眉毛も鼻も口もなく、豆腐のようなのっぺらぼうだった。「おおううううわあぁ～！」。亀一は魂を吐きだしてしまいそうなほどに大口を開けて叫んだ。

私は「おおううううわあぁ～！」にみられる宮部独特の表現が気に入っている。だからというわけではないが黄瀬川を目ざすことにした。「時の鐘」から小一時間歩いて、あきらめかかったころようやく黄瀬川にたどりついた。幅約１００メートル。ここから西は沼津市。富士山には相変わらず雲が半分かかっている。箱根の山々がこの旅の起点である川原ケ谷に比べると遠くに見えるようになった。西に７キロくらい遠ざかったのだ。

ここがこの旅の終点である。三島駅に向かって少し戻ったところの道路脇に、「対面石」という標識があった。その横の細い道が八幡神社に続いていて、本殿の裏に二つの石が並んでいる。二つとも大人が両手でなんとか抱えられる大きさ。説明板には「治承４（１１８０）年１０月、平家の軍勢が富士川まで押し寄せてきたとき、鎌

倉から源頼朝が出陣。奥州から駆け付けた弟の義経と対面し、源氏再興の苦心を語り合った。その時二人が腰かけた二つの石」とある。

私はこの旅に出る前、三島宿のことを一応調べておいたが、この対面石は意外だった。源平の合戦話がでてくるとは全く想定していなかったのだ。来たかいがあったと思った。

この説明通りならば、亀一の時代、この対面石はあったはずだ。そうだとしても、目にもくれずに走っただろう。それはともかく、亀一が対面したのはのっぺらぼうの男だった。

その亀一。金谷宿まで行ったところで、取次所の支配人に落雷に遭った茶屋までその男を連れていくようにと諭される。そして茶屋があった所まで戻ってナゾが解ける。男は茶屋の息子、寛吉。彼は妻子を失くした後、自らも死ぬ。だが死んでもその霊が浮かばれないでいるのだ。亀一に箱根の賽の河原まで連れて行ってもらい、ようやく魂が落ち着く――という次第。

亀一の心も晴れ晴れとしたはずだ。そんなふうに亀一に思いをはせながら来た道を戻ると、私の気分も落ち着いてくる。亀一、いや宮部みゆきのおかげというべきだろう。景観を見る旅でなく歴史探訪の旅でなく、何らかの知識を得たのを目的として旅でもない。にもかかわらずのっぺりとした旅ではなく、何か心に残る旅になった。こういう旅もいいものだ。

樋口本陣跡に建っている茶葉店

三島と沼津の境の黄瀬川

小田 真

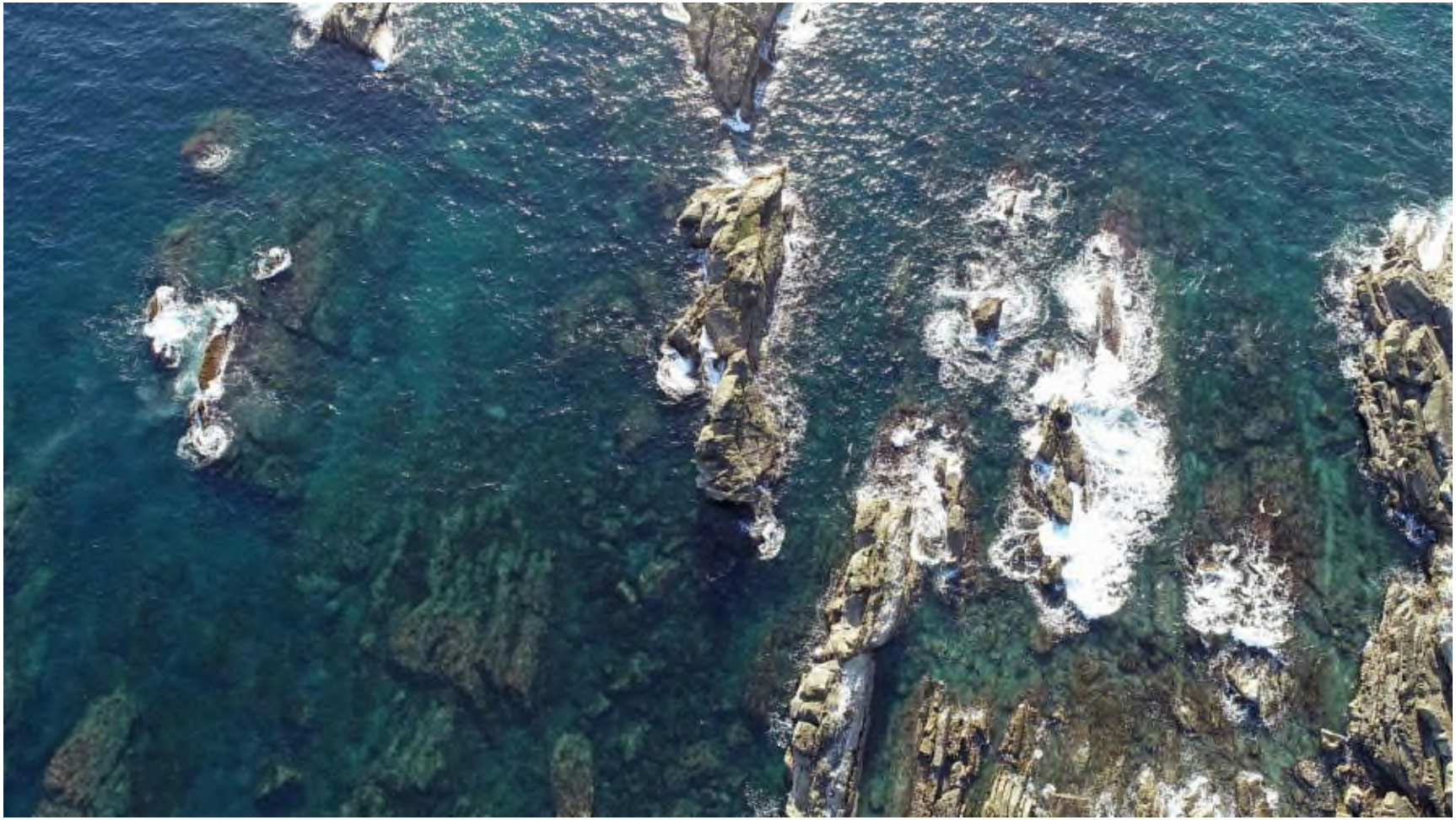
ドローンの世界

「春」

滋賀・高島

滋賀・近江舞子

3 紀伊日置



紀伊日置志原海岸

白浜・三段壁

中務敦行の
徒然の章

元読売新聞写真部長　中務敦行

　この冬は東が寒く、西は暖冬が続く。正月明けに北海道に行った。
空港は寒波の影響で、Ｕターン客の積み残しが出て私たちが新千歳空港に着いたのは定時だったが、駐機場の空くの待って１時間遅れ。高速道路も通行止めが相次いだ。
本格的な寒波がやってきた１月下旬から２月は大混乱のようだ。

　こちら関西は雪も珍しく毎年凍る渓流も普段通りだ。
それでも寒い日をめがけて山に登ると昨年の台風で倒れたのだろうか、倒れた灌木にも見事な樹氷が着いていた。
山頂から少し下った八丁平では強風が吹き荒れ、ザックカバーを谷底に飛ばされた。

＝いずれも奈良・三重県境の三峰山で

凍結した阿寒湖、温泉が流れ込むところは水面が見える。

観光スポットの美瑛はインバウンドが増えたがこの季節は静かだ。

真っ白に凍った滝。温泉が流れ込むので湯気が上る。（白金温泉で）

倒木にできた樹氷

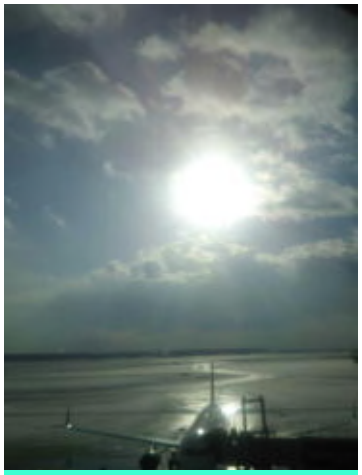
強風で粉雪が飛ぶ（八丁平で）

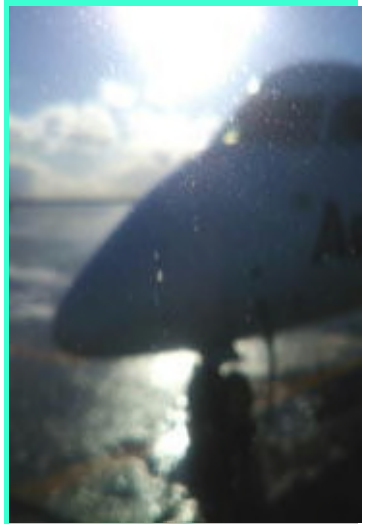
強風で粉雪が飛ぶ（八丁平で）

サハリン紀行

写真　片山通夫

この 1 月、厳寒のサハリンへ出かけた。



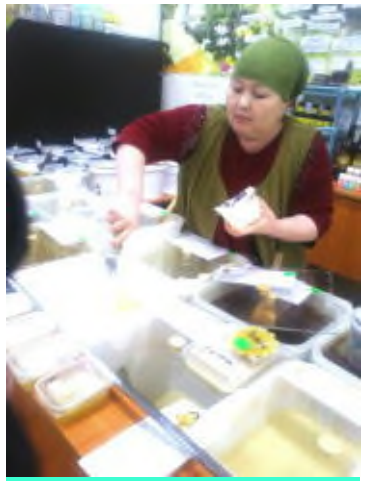


　ユジノサハリンスクへはボクはいつも札幌から向かう。
　札幌からおよそ 1 時間 20 分。機材は DHC8。

　上の写真は札幌空港で。左の写真はユジノサハリンスク空港

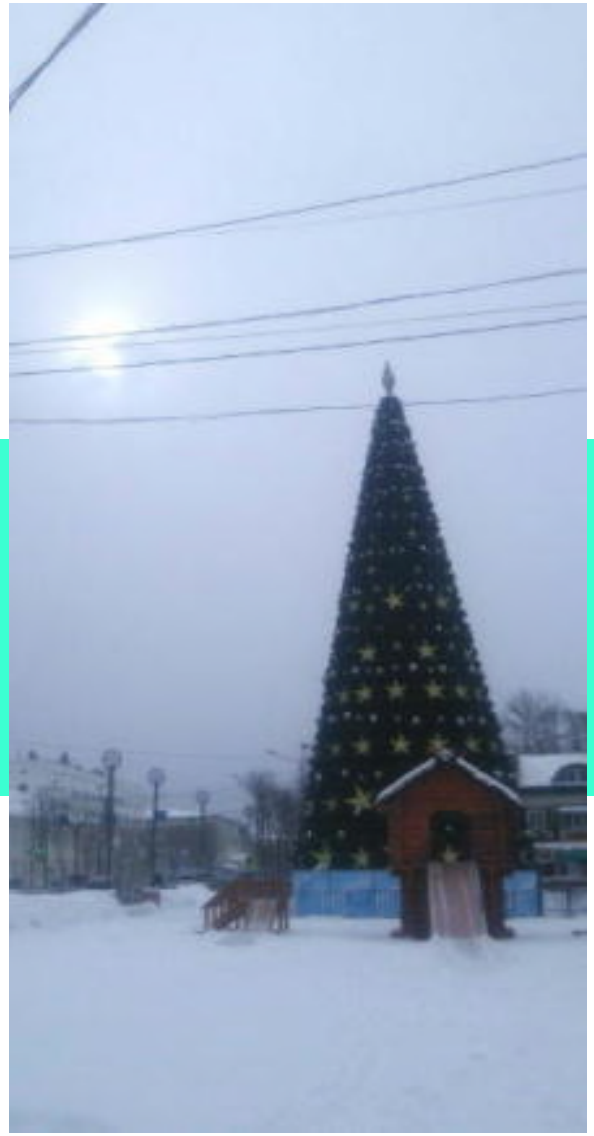
　黒夜とは行かないが正午頃の太陽。結構低い所にある。

ちなみにユジノサハリンスクの緯度は
４７度５７分４０秒



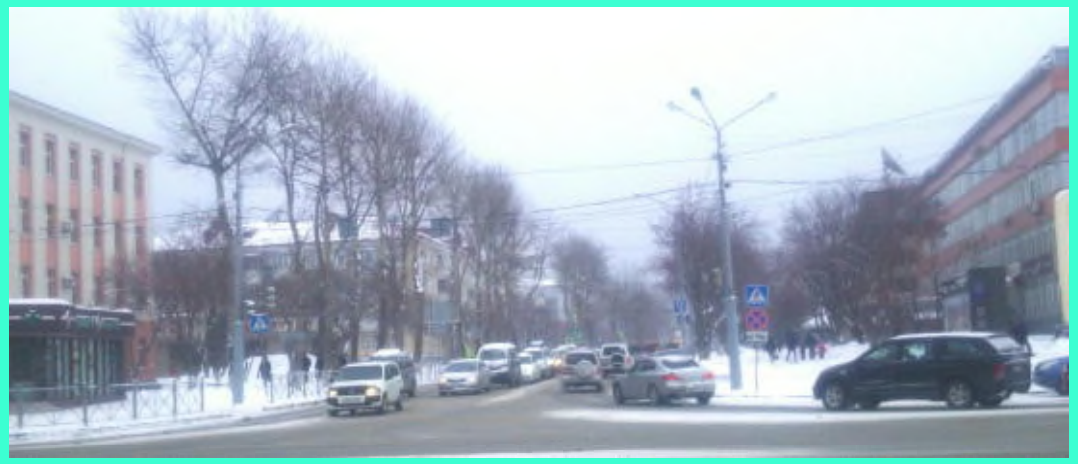
ユジノサハリンスクの印象

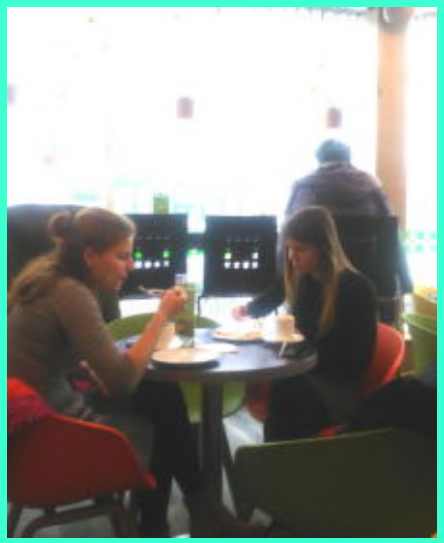
健在なレーニン



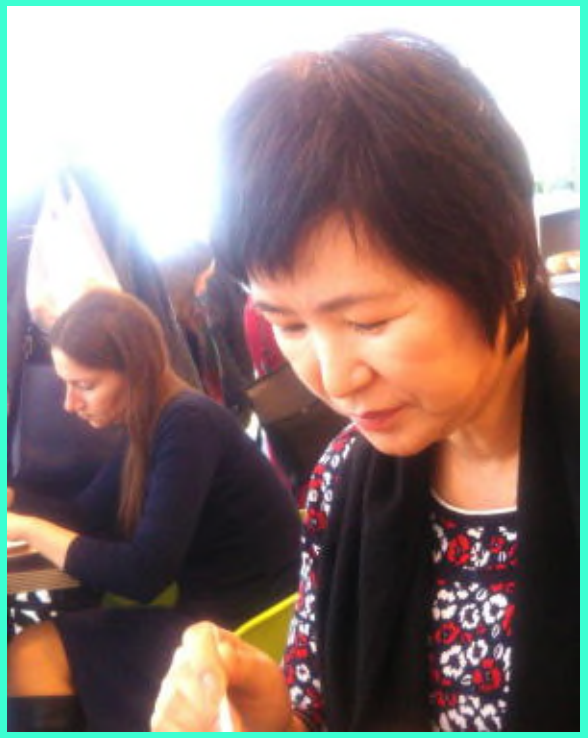
ヨールカ

　ロシアの祭り。
ヨールカの意味は「小さなもみの木」
　年末年始に切り出したモミの木に、飾りをつけ、そこに子供たちが集まって年末・年始の祝いをする。



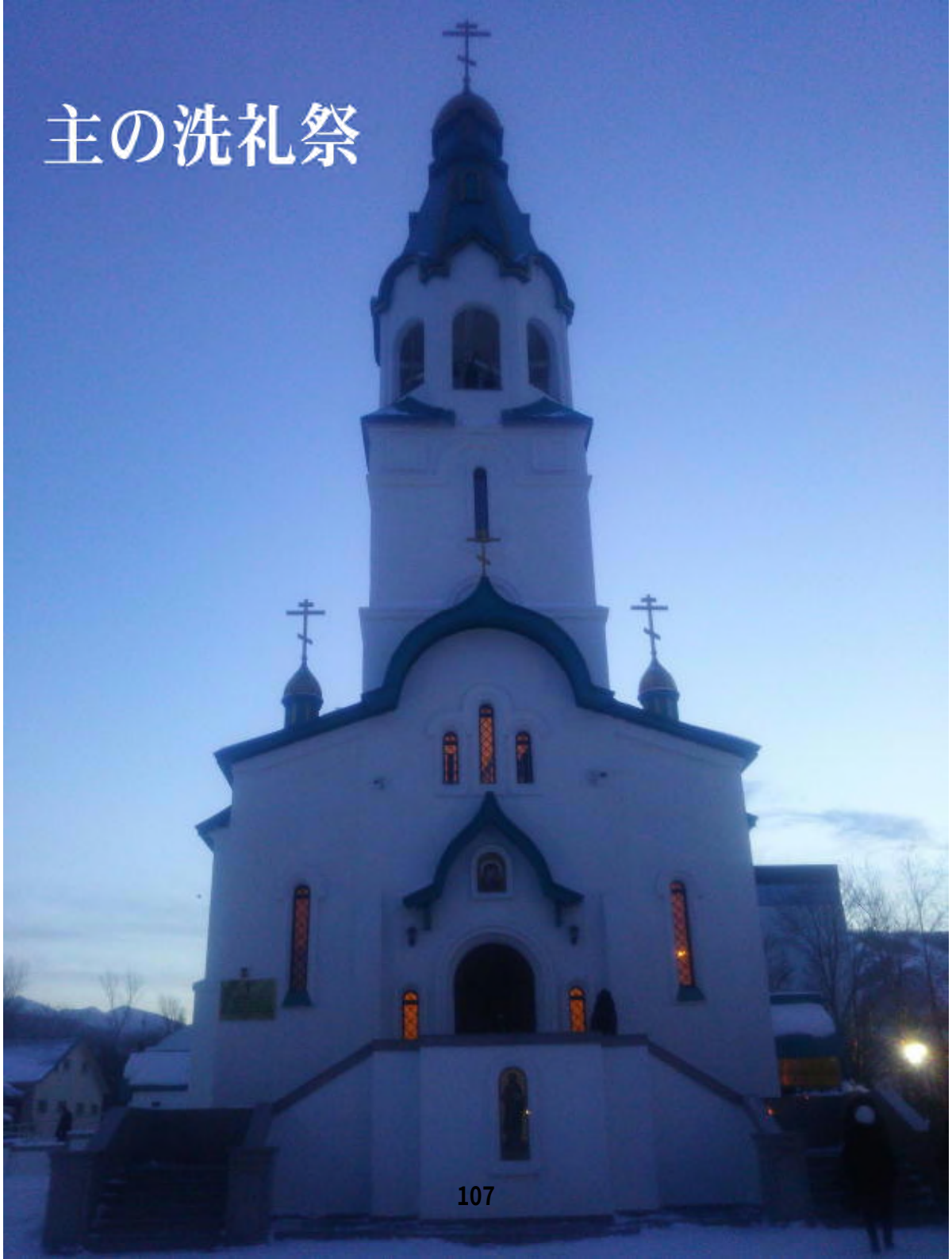


カフェテリア

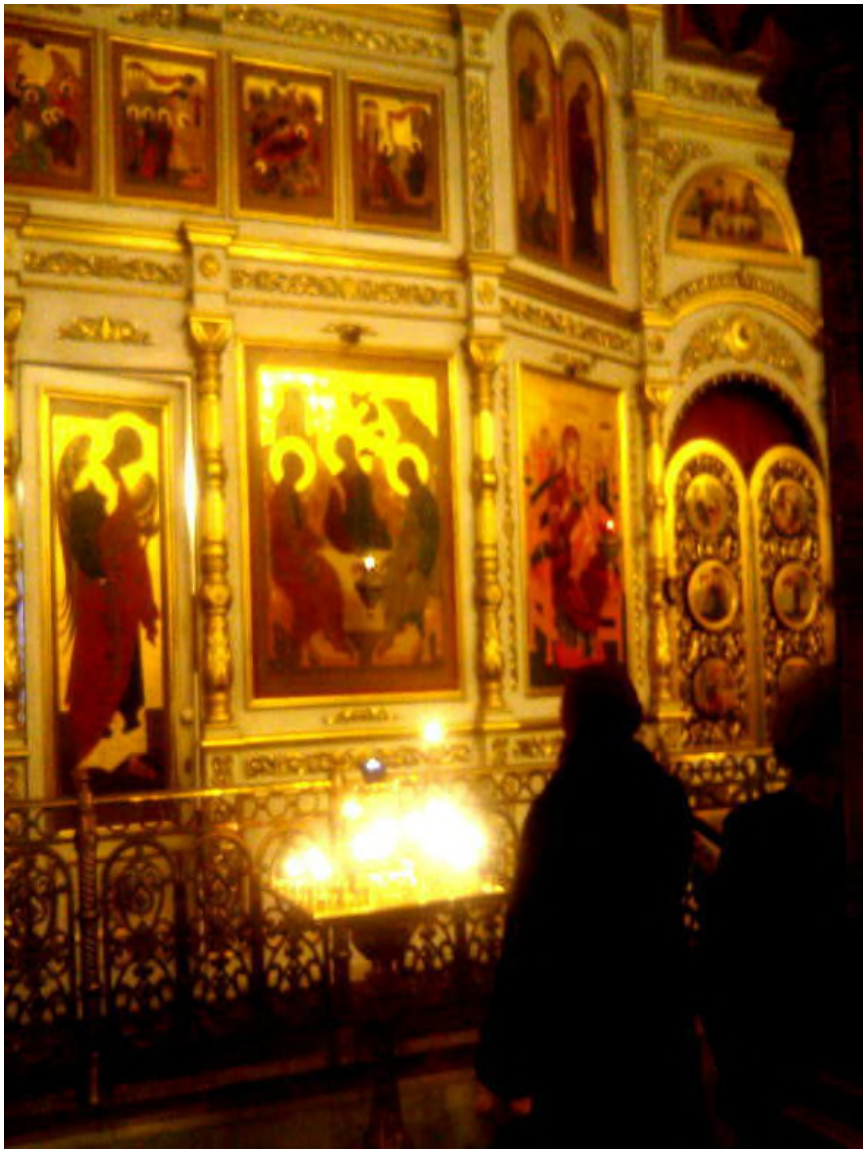


カフェのオルガ

この通りは両側にサハリン州政府や旧共産党本部など重要な施設がある。この通りの突き当りはレーニン広場とユジノサハリンスク市庁舎。反対側には勝利広場。



未明のロシア
正教会



ВХОД
в купель

1 月 19 日は「主の洗礼祭」: ロシア人のように祝うための 3 つのステップ

1 月 19 日（ユリウス暦 1 月 6 日）は神現祭（主の洗礼祭）だ。というと外国人の多くは、ああ、あのクレイジーなダイビングの日か！と思うだけだろうが、それは実は、極めて重要な祭日だ。

ステップ① 聖水をもらい、教会のミサに連なる

正教会の伝統によれば、これは、イエス・キリストが洗礼を受けたことを記憶する日だ。この日、30 歳だったイエスは、洗礼者ヨハネのところへ来て、ヨルダン川で洗礼を受けた。そのため、正教会の神現祭（主の洗礼祭）は、水と関連している。信者は、彼らが飛び込む氷穴を、中東のヨルダン川にちなみ、やはり「ヨルダン」と呼ぶ。

1 月 18 日、すなわち祭りの前夜、正教徒はたいてい教会に行き、聖水を飲む。この水には「有効期限」はないので、ふつうロシア人は年間を通して保存する。聖水を飲んだ後、人々は通常、晩の勤行に連なる。

教会や大聖堂によっては、儀式が屋外でも行われる。すなわち、氷穴などの冷水浴を行う場所を成聖（聖別）する特別な儀式がなされる。

ステップ②　聖水に浸かる

氷穴などに全身を浸す大聖水式のプロセスは、イエスの洗礼を象徴し、それをなぞったものとなっている。1 月 18 日から 19 日にかけての夜、人々は、頭も含めて全身を 3 回続けて水に浸す。海の近くに住んでいる人は、川や湖沼でなく、冷たい海の波頭に飛び込むことが多い。ロシア全土にわたり、1 月にはすべての川、湖、沼、池が通常は厚い氷層に覆われている。

普通の釣り人が開ける氷穴は、「ヨルダン」としては不十分だ。大聖水式のための特別な氷穴をしつらえるには、多くの準備と、そのやり方を弁えている人が必要になる。

通常、正教会は、「ヨルダン」を希望者のために用意する。一方、地方自治体や救護隊は、暖かいテントを設置する。ここで服を脱いだり、飛び込んだ後で熱いお茶を飲み、温まることができる。

しかし、この場合酒を飲むことは、もちろん伝統にない。そして、医者はいずれにしろ身を切るような氷水に飛び込む危険を警告する。それは最良の考えとは言い難い、と。

ステップ③ 再び聖水をもらう

1 月 19 日の朝、正教徒は教会に行き、新鮮な成聖（聖別）された聖水をもらう。正教会によれば、夜と朝の聖水に違いはないので、どちらを選んでもいいとのこと。

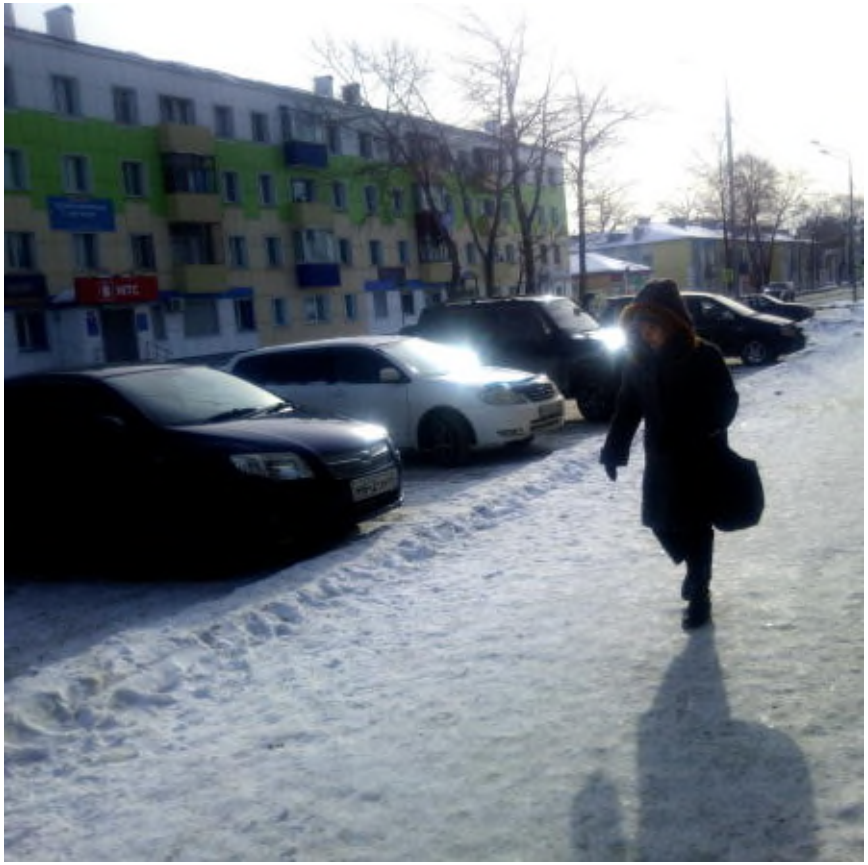
しかし、一部の信者は、夜と朝の水は異なる目的を果たす。すなわり、夜の水は、悪魔、悪霊を追い払うために、顔を洗ったり、家の中の四隅に振りかけたりするのに使うべきだとし、朝の水は、朝食前に飲むと健康に良いと考えている。

RUSSIA　BETOND
https://jp.rbth.com/arts/81492-seireisai-no-iwaikata

このおっちゃんらよーやるわ！

　ボクはオホーツクに出かけることにした。上手くすれば流氷が二本より早く見られる。

ドリンズク（落合）の町は寂しい
かつては製紙工場の城下町だった。



オホーツクに立つ！

ブズモーリエ（白浦）駅前のカニ売り

レーニン広場のヨールカがシルエットとなって凍った道路が光るの図

実はこの雪原は湖なのだ。トウナイチャ湖（富内湖）

宮澤賢治が訪れた栄浜
琥珀が採れる浜としても有名

宮澤賢治は、妹・トシの鎮魂の旅に樺太東線を北上、豊原（現ユジノサハリンスク）から落合（現ドリンスク）へ。さらに北へ行くと栄浜駅（スタロドゥープ駅＝廃止）に降り立った。１９２３（大正１２）年夏のことだった。
　賢治が花巻から樺太の栄浜まで旅したのは、トシの魂が北にあると思ったからだとか。その経験が、童話『銀河鉄道の夜』着想に結びついたと言われている。

栄浜はオホーツクに面した浜まである。

これでサハリン紀行はおしまい。使ったカメラは携帯電話のカメラと Ricoh　GR

ボクがサハリンにいた頃、安倍首相がプーチン大統領と会談していた。その前座で河野外相がロシアの外相と会っていた。

勿論領土問題が主要なテーマだ。歴代の日本政府は戦後一貫して４島の返還を要求してきた歴史がある。左の写真は北海道庁に掲げられた標語である。

ところが安倍首相は自分の功を焦ったのかどうかは知る由もないが、２島で話をつけるつもりのようだ。

足元を見たロシア側の要求は凄まじい。おそらく首相官邸はたじたじでクレムリンは高笑いだろう。

中川眞須良

ミナミ気圧

撮影　大阪　新世界　にて

ビリケン神社
賽銭箱
24h
¥200

フリータイム ¥1600
FIRST
FIRST
DVD 20000本 最新・人気 人気女優
見放題
チェンジOK
ビデオ試写室
完全3時間 1,800円
完全7時間 2,200円
フリータイム 1,600円
90分 1,000円
スグソコ

撮影　2018 年 12 月

三匹が撮る！

ロシア・サハリン州ユジノサハリンスクに住む
一人の画家と写真記者、
それに日本人の写真家が競作する。

Free assignment

国際競技大会「チルドレン・オブ・アジア」

国際競技大会「第１回冬季チルドレン・オブ・アジア（アジアの子どもたち）」が１６日、ロシア極東のユジノサハリンスクで閉幕した。同大会は、国際オリンピック委員会（ＩＯＣ）と国連教育科学文化機関（ユネスコ）による後援のもと開催され、２０カ国からユース選手１２００人が出場した。

Lee　E-sik

39
38
37
36
35
33
32

三匹が撮る　Lee　E-sik

SAKHALIN2019
1ST WINTER CHILDREN OF ASIA INTERNATIONAL SPORTS GAMES

KAZAKHSTAN

三匹が撮る　Lee　E-sik

SAKHALIN20
WINTER CHILDREN OF ASIA INTERNATIONAL
Children of
Games Internat
Committee
LIN2
NTERNATION
KH

103
102
073
HKG

3
1 85 Nassen, A. KAZ
2 107 Skomorokhov,... RUS
3 90 Kim, J. KOR
4 72 Kwok, T. HKG
Ural

SAKHALIN2019
SAKHALIN2019

RUSSIA
MONGOLIA
AFGHANISTAN
YUZHNO-SAKHALINSK
INDONESIA
CAMBODIA
UAE
THAILAND
INDIA

SAKHALIN2019
1ST WINTER CHILDREN OF ASIA
INTERNATIONAL SPORTS GAMES

People

Dju Myong Su

Магазин
нижнего
белья и
бижутерии

до 40%
СКИДКИ

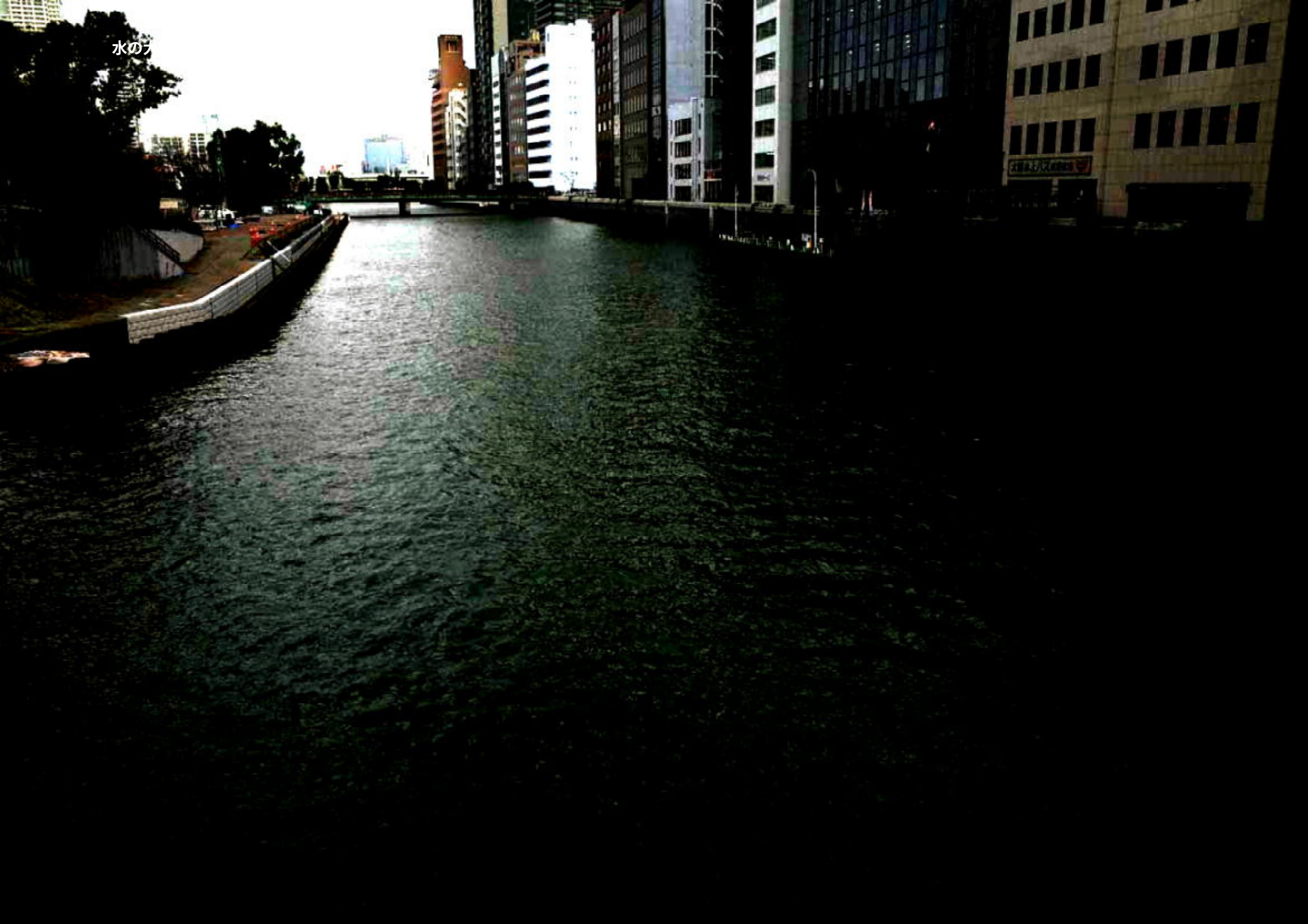
НОВОСТИ
М707АУ

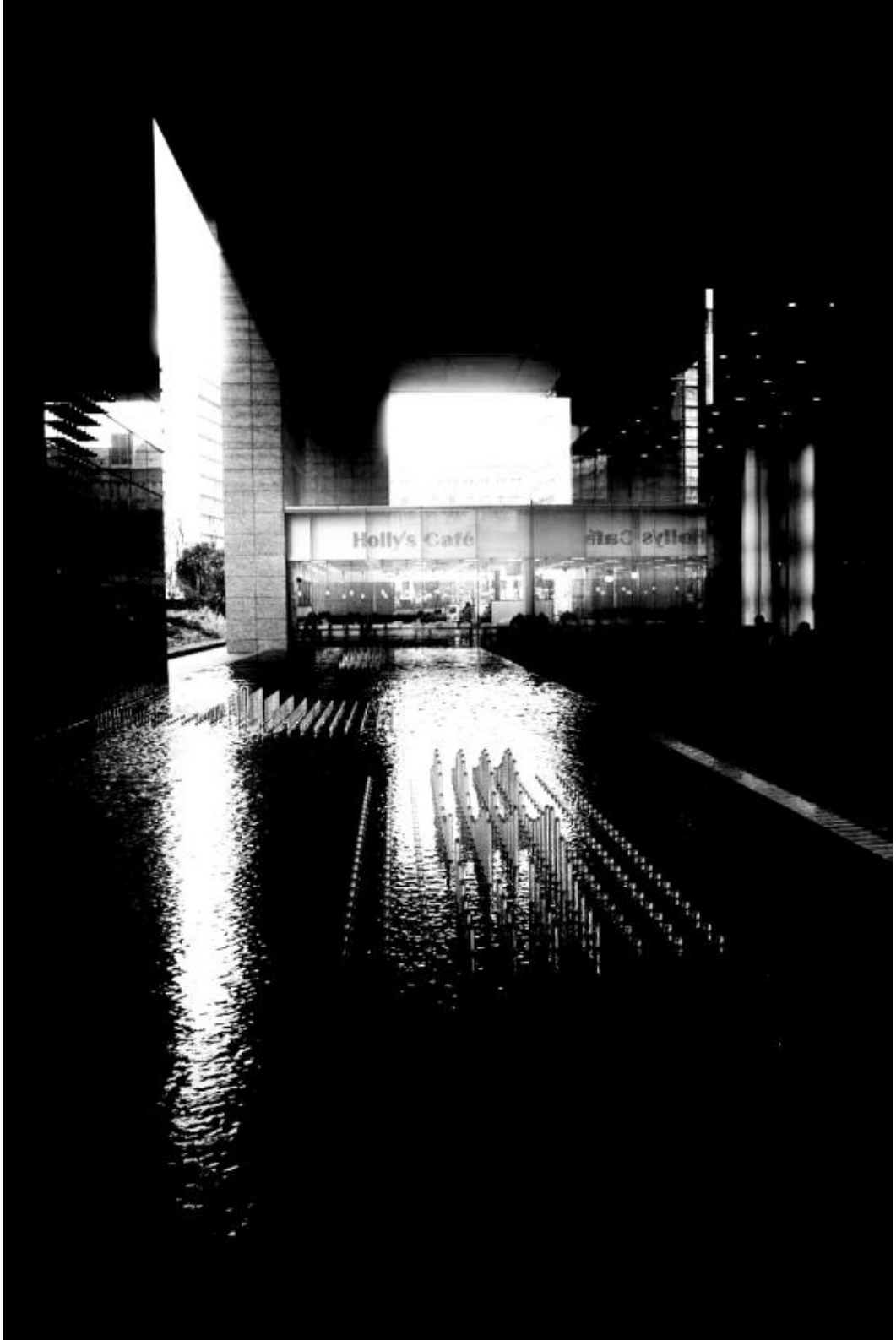
Качество,

80

24
ЧАСА
БАНКОМАТ
ДОСТАВКА
КАРТОФЕЛЯ
НА ДОМ

片山通夫が撮る
水の大阪
Осака воды

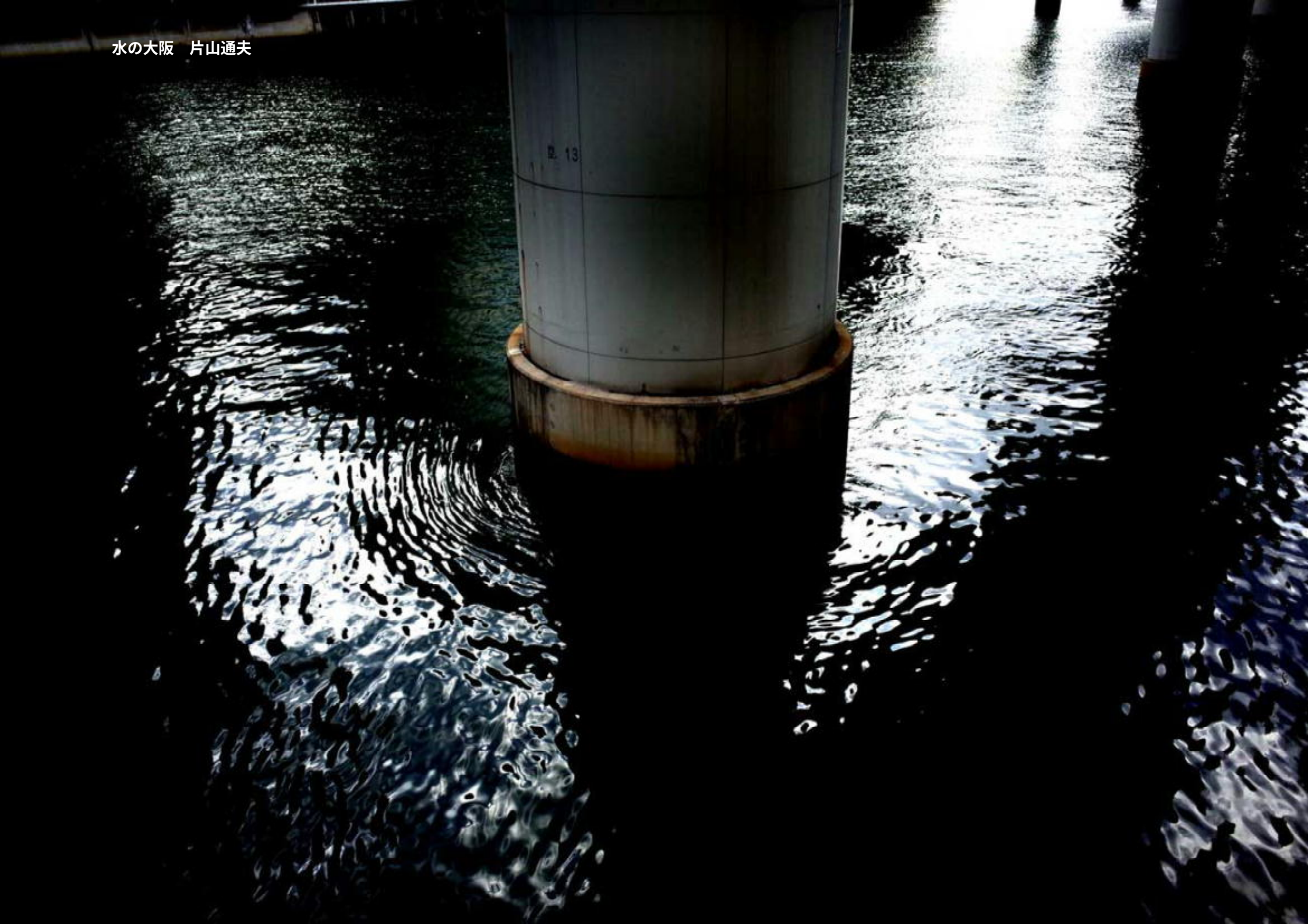

水の


Holly's Café

ANA CROWNE PLAZA

水の大阪　片山通夫

水の大阪　片山通夫



おこない

琵琶湖の北、湖北町（現長浜市）に伝わる神事

写真　片山通夫

「おこない」とは行いとも言われている、滋賀県湖北地区に今も残る「五穀豊穣 」を願う厳粛な祭事である。時期は**2**・**3**月に、湖北地区の集落で行われている。

近年、ご多分に漏れず、過疎化や高齢化が進み、厳粛なこの祭事も担い手の確保が困難となってきており、簡素化が進んでいるのはいささか残念である。

ここにあげた写真は滋賀県湖北地区・小谷郡上町という小谷城下で栄えた集落で撮影した。尾崎神社がある。この神社に関してはわずかな伝承が残るだけである。尾崎神社の名になったのは享保年間のこと、それまでは神明さん、お宮さんと呼ばれ親しまれてきたと言われている。

また樹齢千年と伝えられる杉の老木があり、祭神は伊弉諾尊（イザナギノミコト）が祀られている。

＊小谷城：戦国武将浅井氏三代の居城で北陸道と中山道の要所をおさえた要衝の日本五大山

郡上町は北國脇往還が通る宿場町だった。この脇往還は木之本宿で北國街道から分岐し小谷城下の郡上地区を通って伊吹山の山麓を経由し、関ヶ原に繋がる。

尾崎神社　この神社で郡上地区のオコナイが行われる

「おこない」は五穀豊穣を願う神事である。 神事が始まる準備が尾崎神社の社務所でおこなわれる。

いよいよが神職を先頭に「おこない」始まる。

男たちが担ぐ菰には前日搗かれた大きな餅がまかれている

おこないの神事

尾崎神社

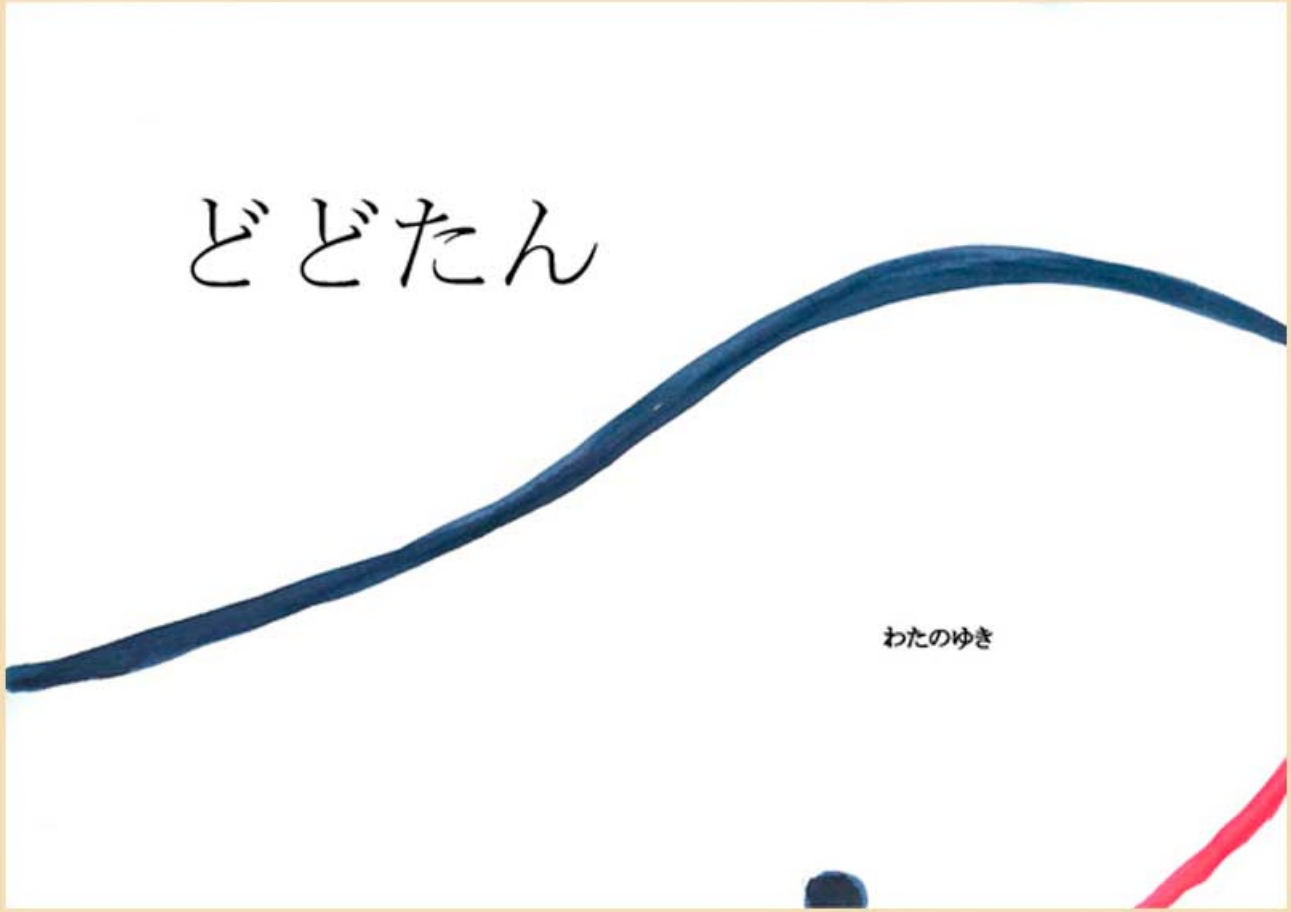
今後一年神様を預かる当家（とうや）の祭壇

神宿る。

日本三文殊のひとつで通称切戸（又は九世戸）の文殊堂として知られている文殊菩薩の霊場。
また境内の霊木・文樹（もんじゅ）は文殊に通じるといわれている。

神宿る。　文樹　片山通夫

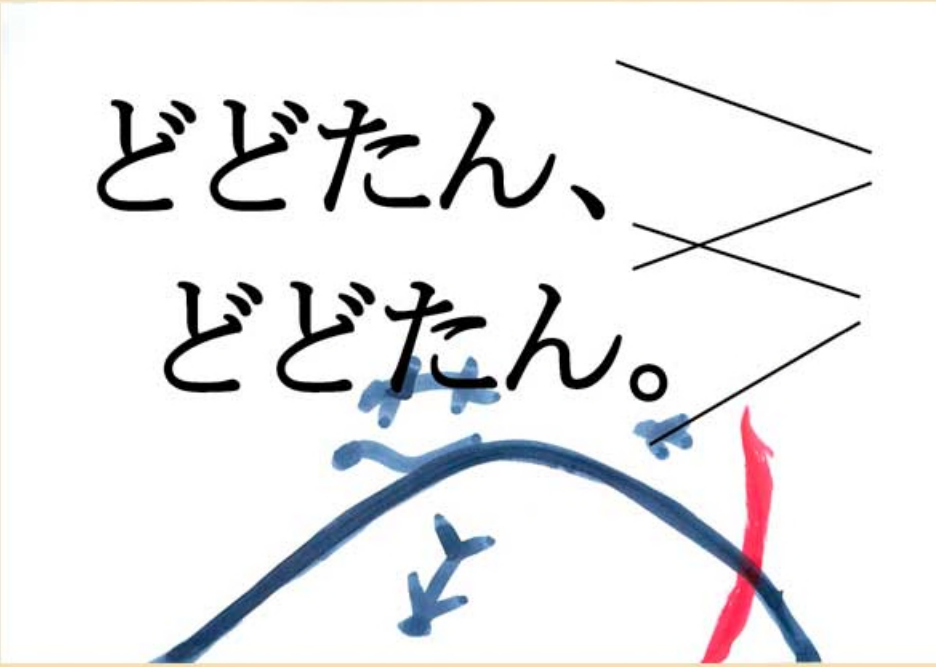
神宿る。　文樹　片山通夫

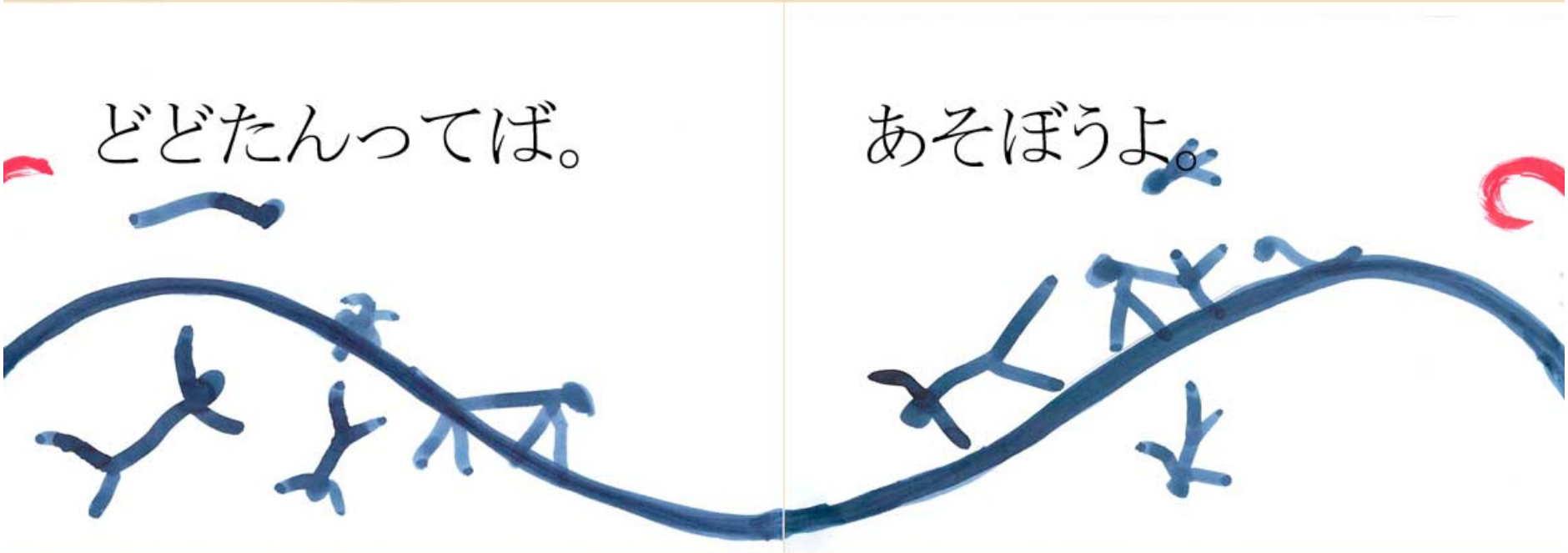

どどたん
わたのゆき

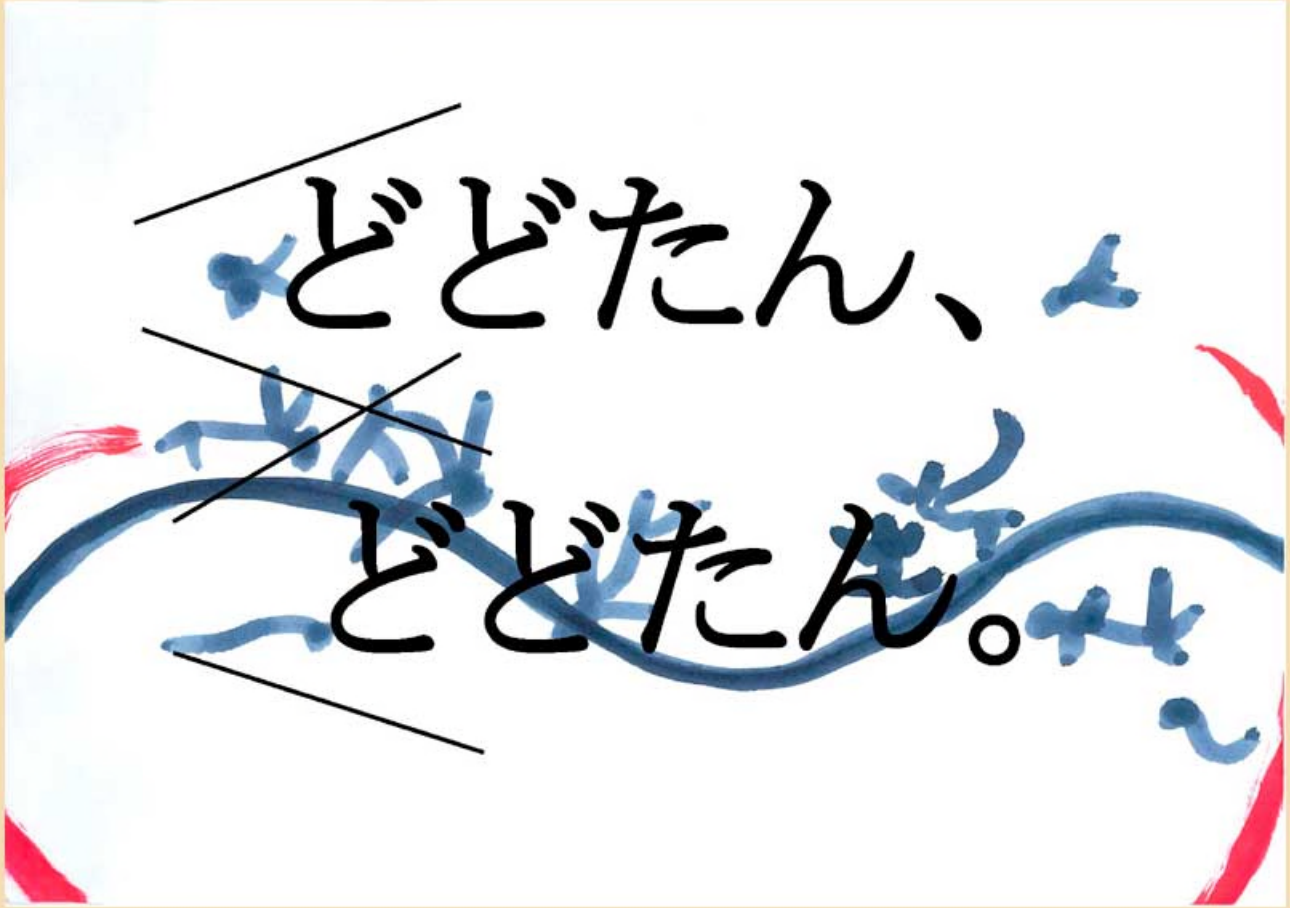
どどたん、どどたん。

どどたん、どどたん。

どどたん、
どどたん。


どどたん、
どどたん。

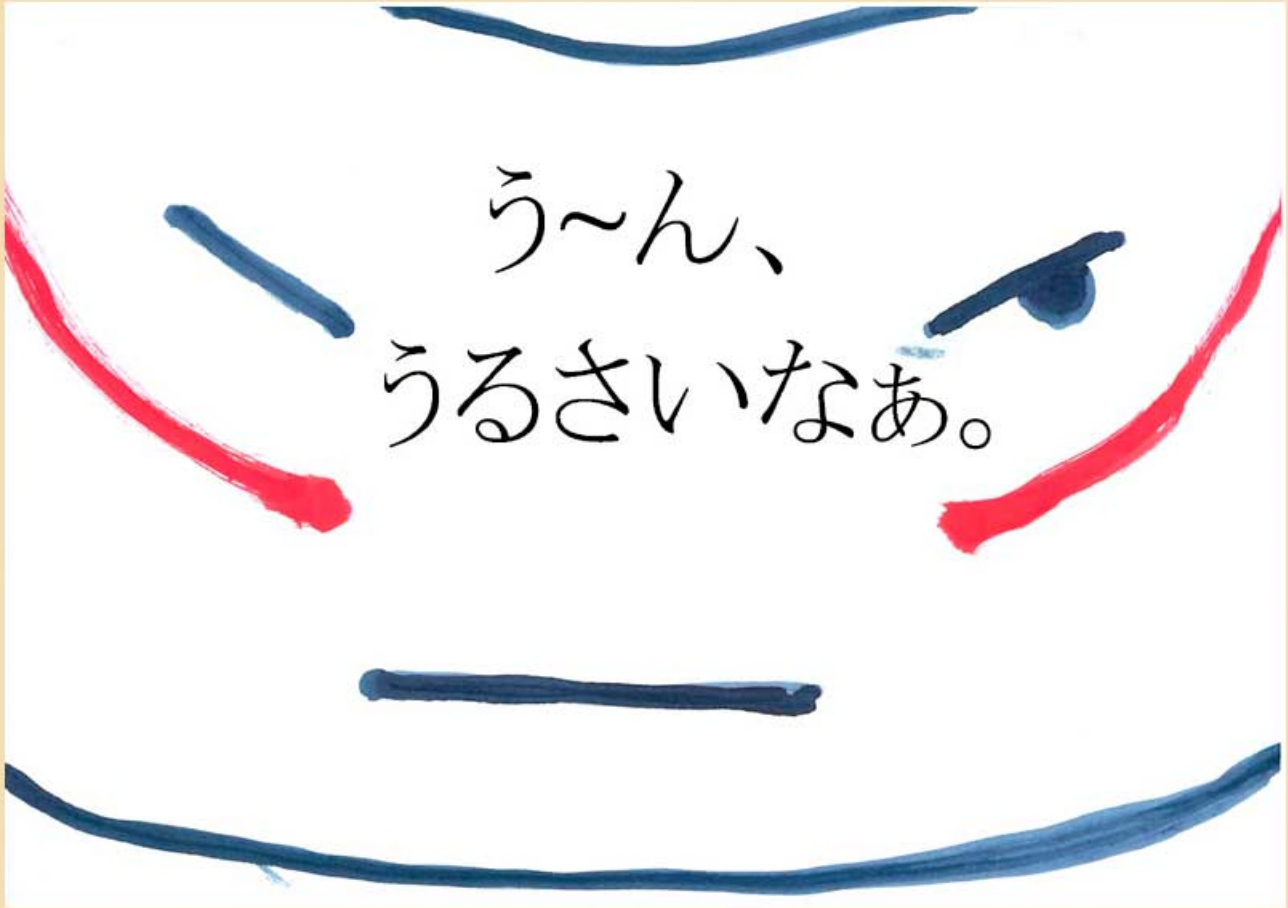

どどたんってば。
あそぼうよ。


どどたん、
どどたん。

どどたん、
どどたん。

どどたん。

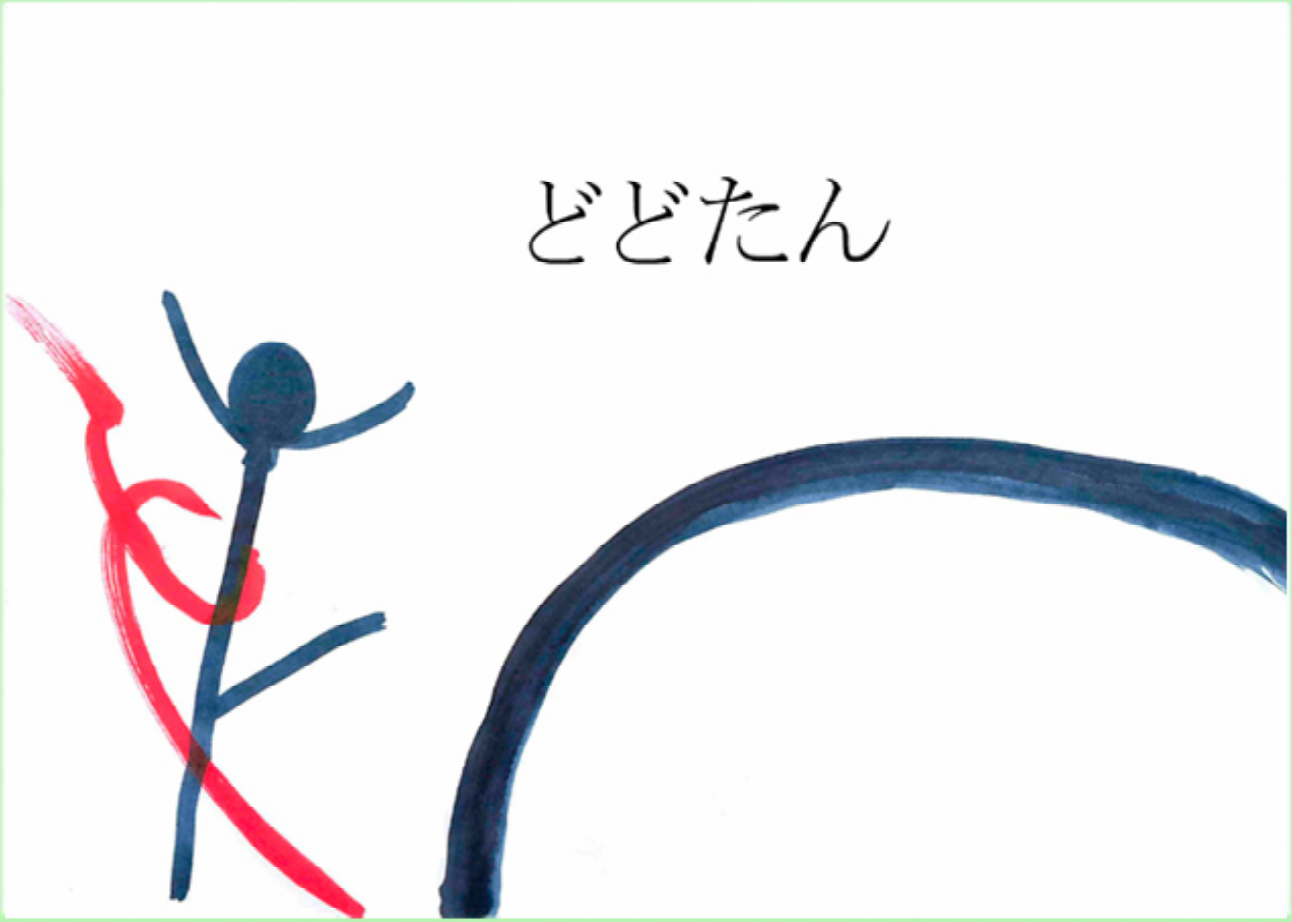
あそぼ。


う~ん、
うるさいなあ。

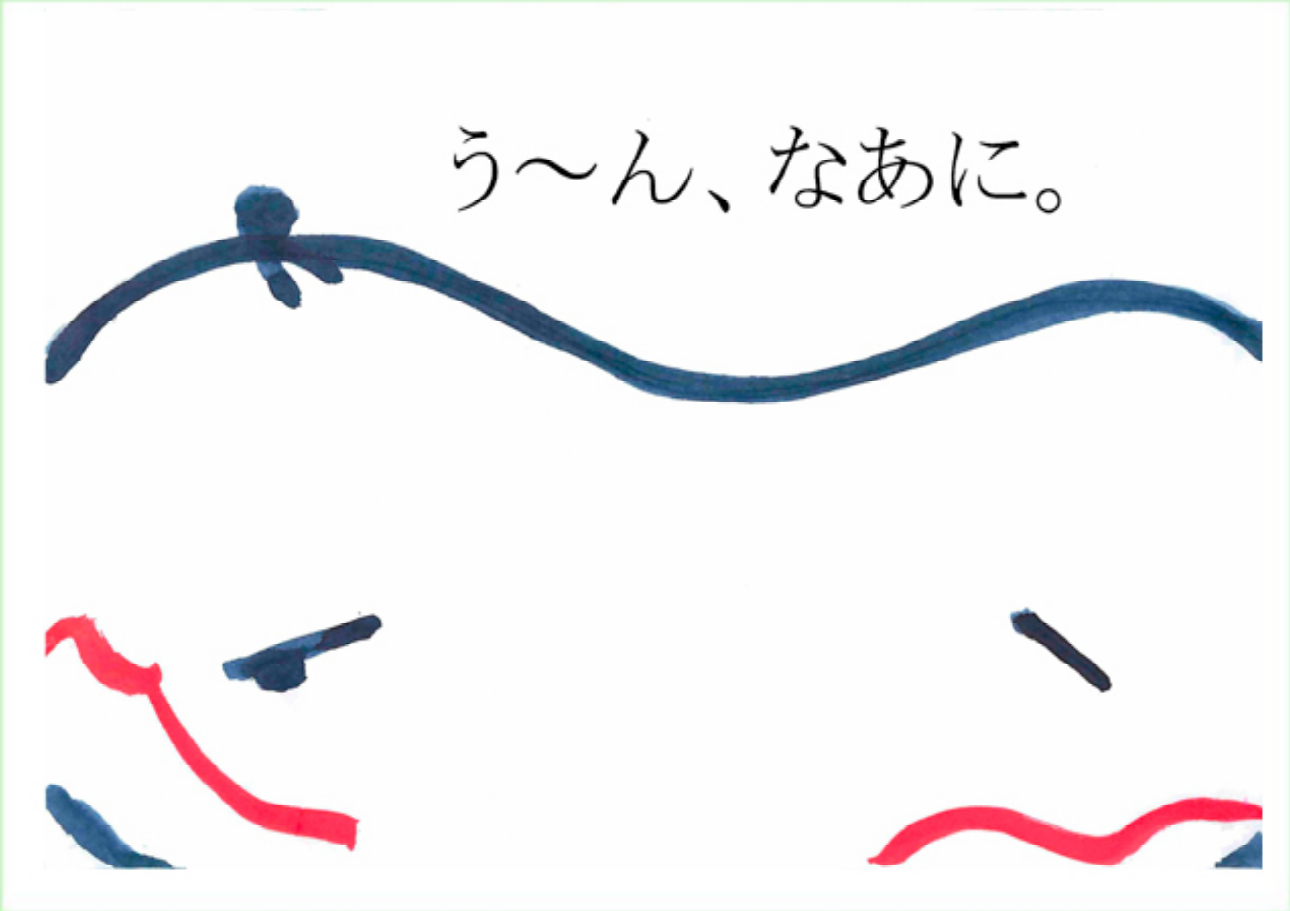
ちょっと、
まって。

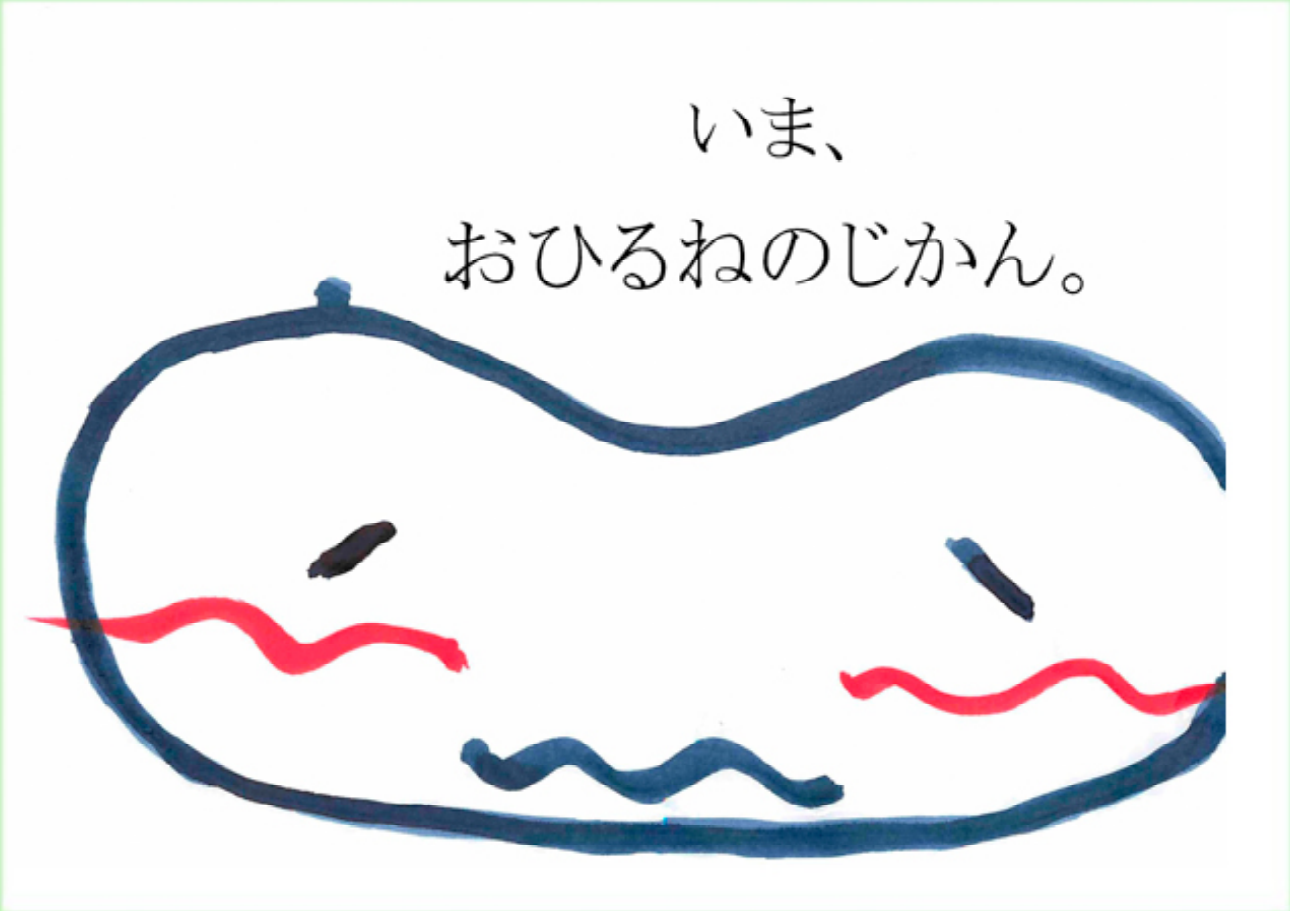
わ～い、
わ～い。

どどたん
と
おひるね
わたのゆき


どどたん

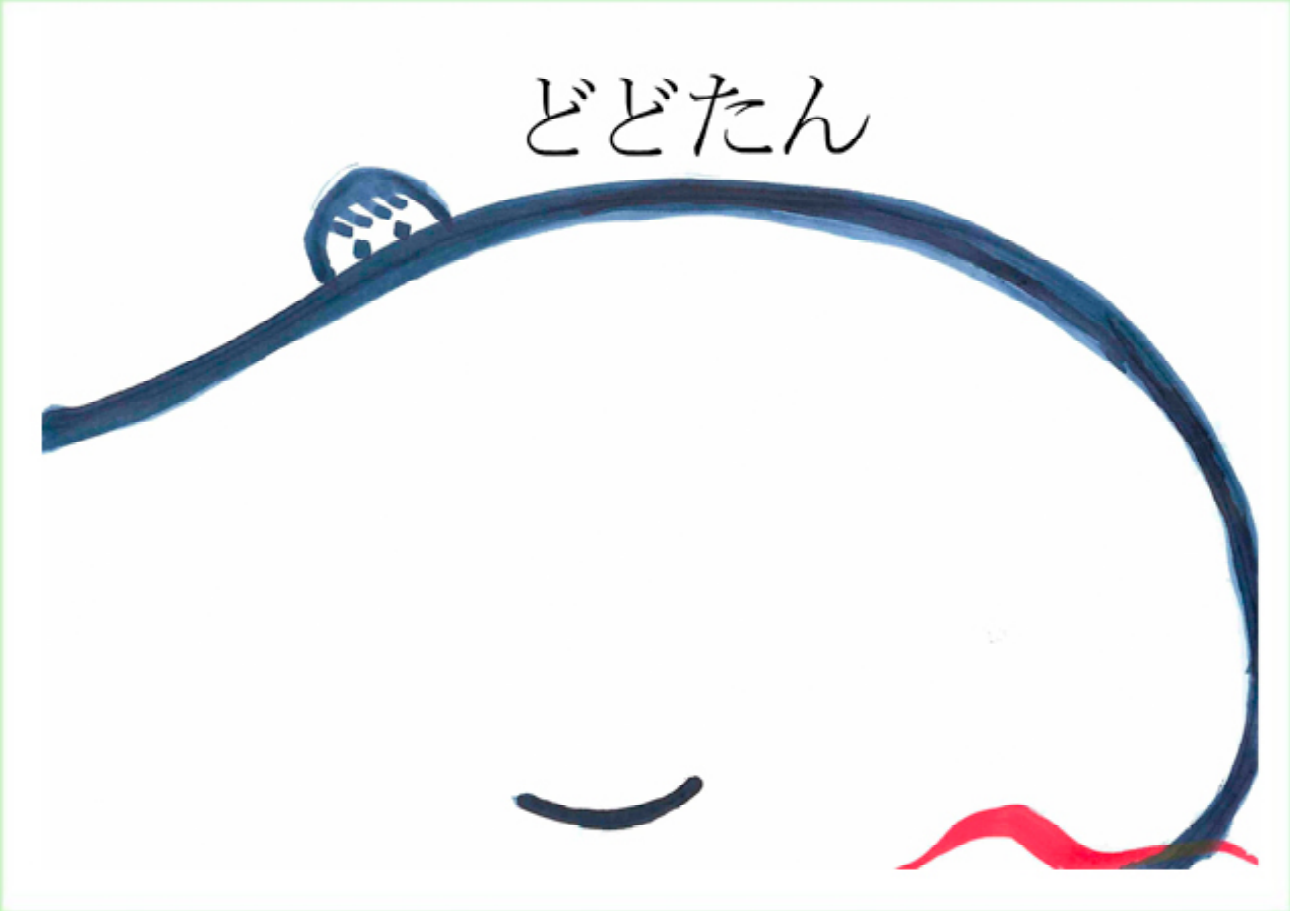
ねえ、
あそぼ。

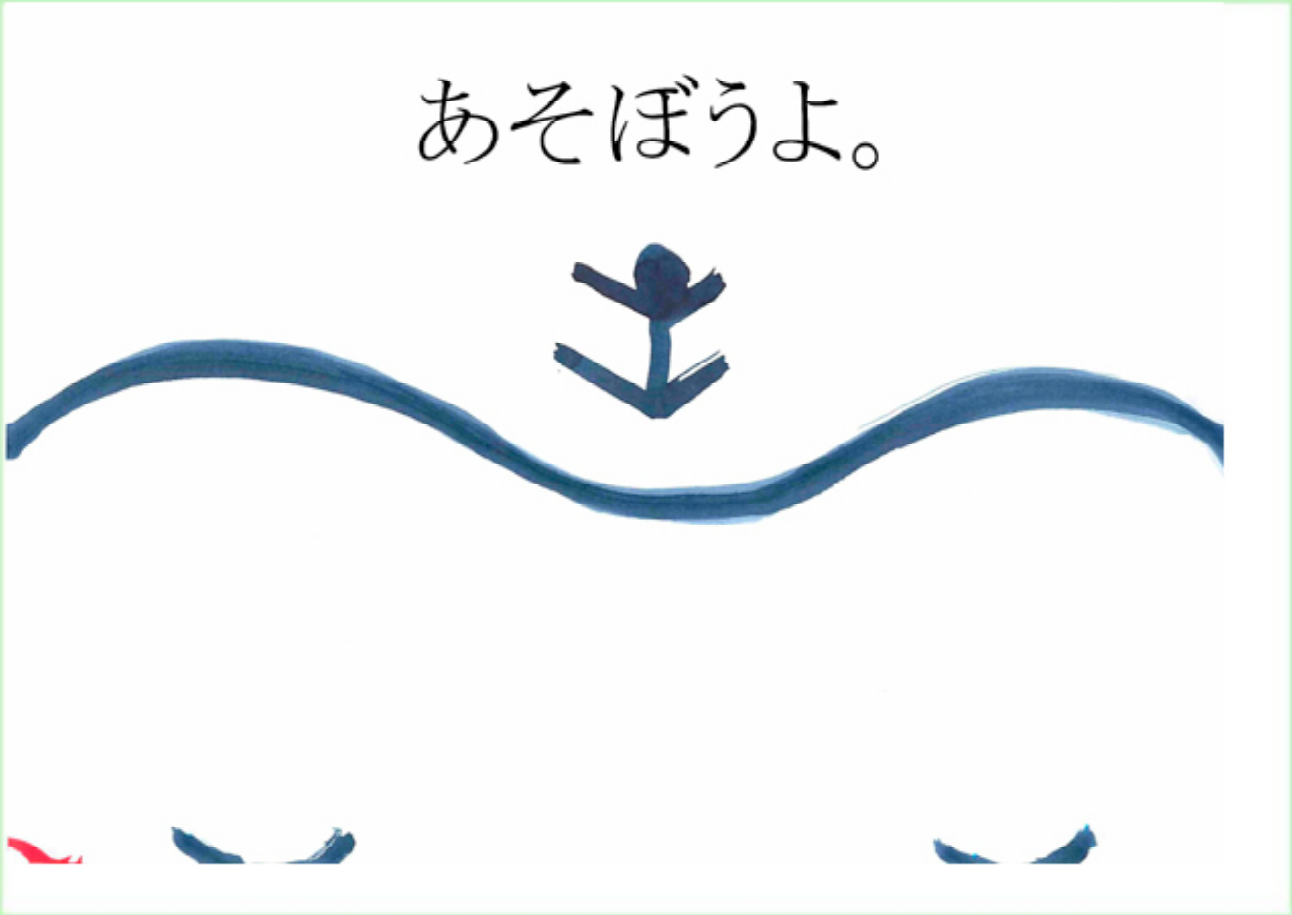

う～ん、なあに。

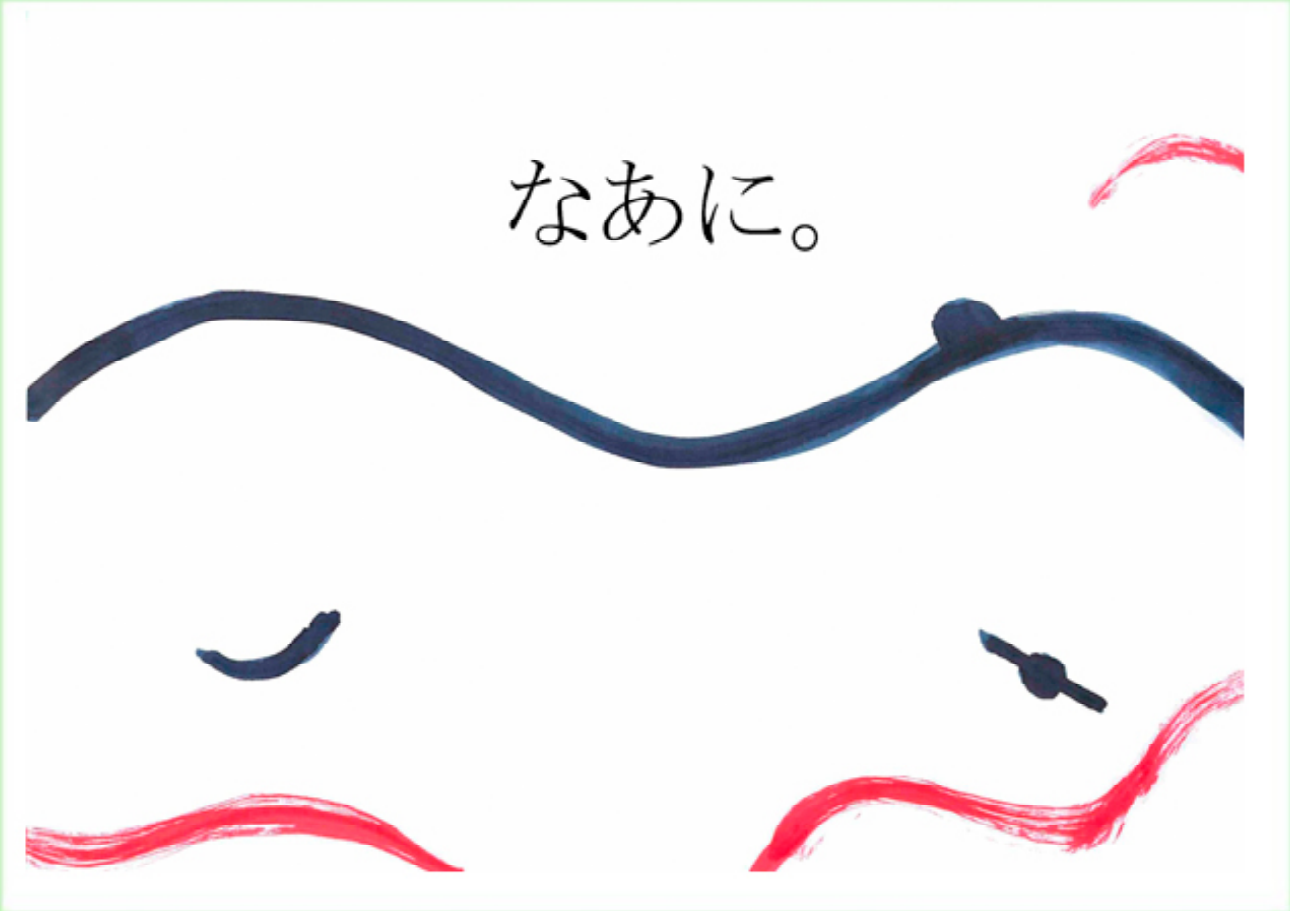

いま、
おひるねのじかん。

はい、
マクラ

さあ、ねるよ。

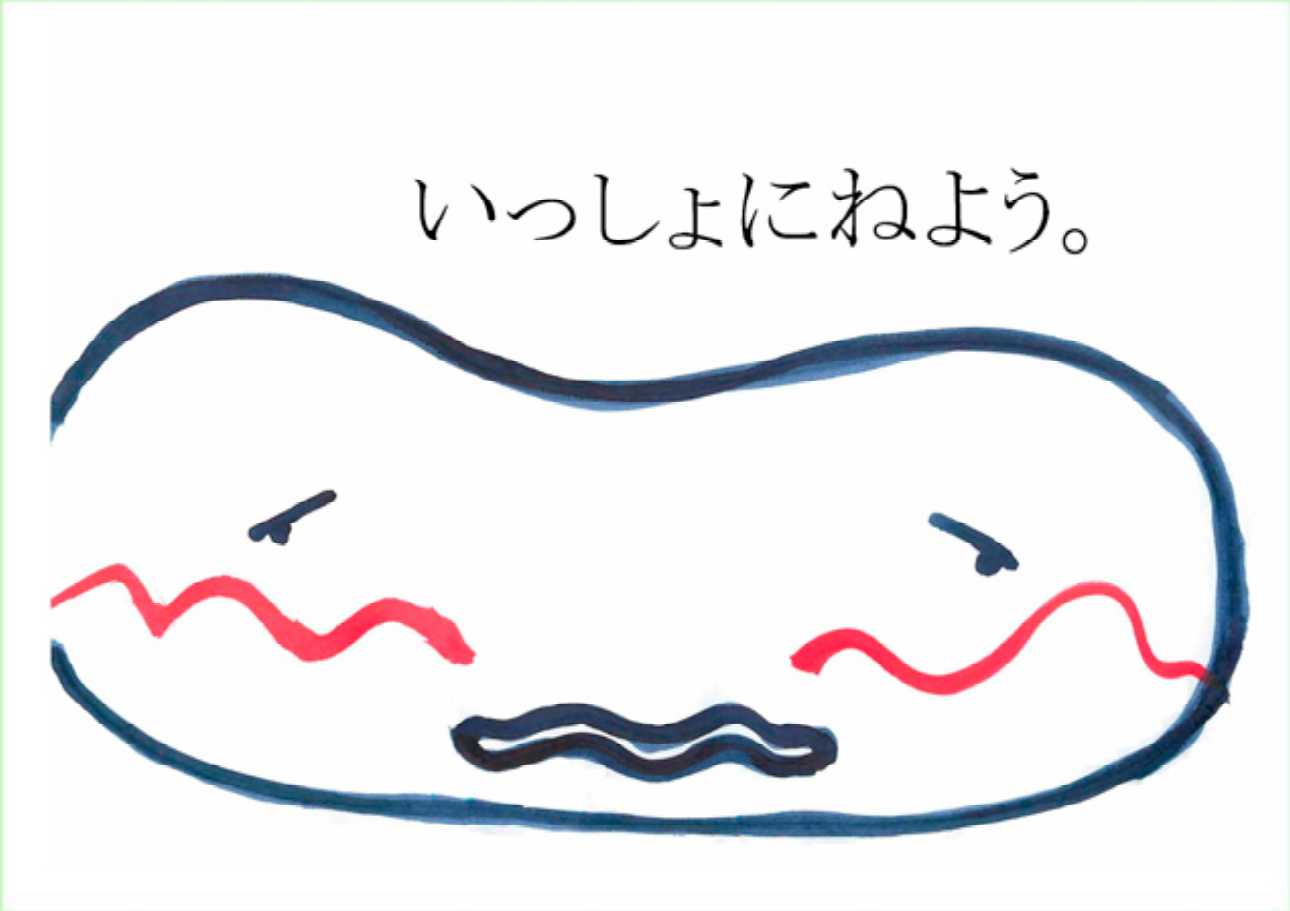

どどたん

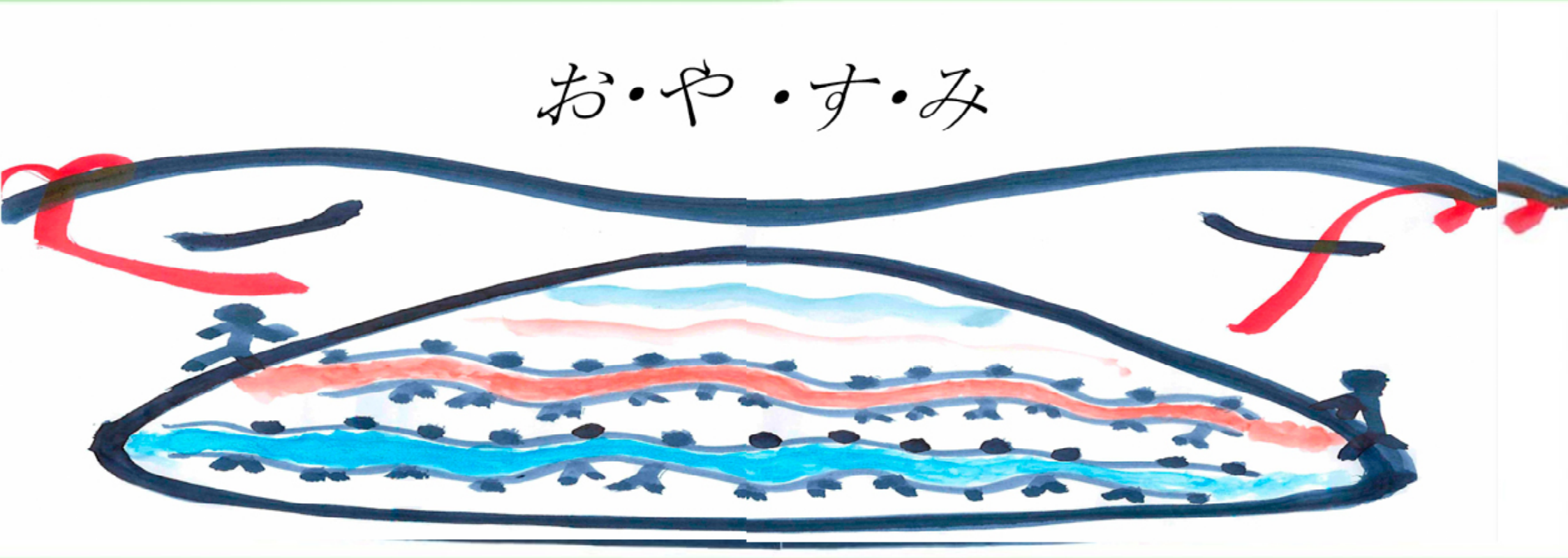

あそぼうよ。


なあに。

いま
おひるね。

はい、マクラ


いっしょにねよう。


お・や・す・み

し～ん

執筆者紹介

井上脩身 1944 年、大阪府生まれ。70 年、毎日新聞社入社、鳥取支局、奈良支局、大阪本社社会部。徳島支局長、文化事業部長を経て、財団法人毎日書道会関西支部長。２０１０年、同会退職。Lapiz 編集長

小田真 1952 年生堺市育ち。ドローン歴 6 か月。写真歴 15 年

中務敦行 65 年読売新聞大阪本社入社、写真部勤務、新聞カメラマンとして、あらゆるジャンルの写真を取材、98 年　読売新聞大阪本社写真部長　03 年退職

中川眞須良　1945 年兵庫県淡路島生まれ。モノクロ写真を続けて 45 年。ますますその深みにはまりもがく日々を過ごす。

北博文　神戸生まれ、兵庫県在住。神戸市外国語大学卒業。建築士、フォトグラファー。

イ・イエシク（E-SIK　LEE）1949 年サハリン州生まれ。1989 年から、韓国語新聞セコリョの写真記者.1991 年からは「サハリン韓人」をテーマに活動

ジュ・ミョンス（Dyu・Men Su）１９４８年、サハリン州生まれ。ユジノサハリンスク在住。ロシア画家同盟会員、２０１３年、ロシア画家同盟より「創作活動の成功及びロシア芸術発展へ貢献したものに送る賞」を受賞。２０１４年、ロシア連邦功労画家称号を受ける。

渡辺　幸重　（わたなべ　ゆきしげ）
1951 年、鹿児島県屋久島生まれ。新聞記者、編集プロダクション経営、大学教員などを経て、フリージャーナリスト。「島と海」をライフワークとし、環境、地域、人権の問題などに取り組む

片山通夫　44 年大阪生まれ　フリー　サハリン残留朝鮮人のルポルタージュなどいたってマイナーなテーマを追う。

本誌に掲載する著作物の複製権・翻訳権・翻案権・上映権・譲渡権・公衆送信権（送信可能化権を含む）は著作者およびラピス・インターナショナル株式会社が保有します。本書の無断複写は著作権法上での例外を除き禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に許諾をえてください。

Lapiz 2019春号 Vol.30

編集後記

次号予告（2019・3・1 発行予定）
連載記事
ジョセフ・ヒコの幕末維新、びえんと、宿場町、原発を考える、編集長は行く
フォト＆ストーリー
LapizStyle、breath of CITY、人物時計、ミナミ気圧、

Lapiz2019 春号は 3 月 1 日発行予定です！

編集長　井上脩身
編集・発行人　片山通夫

2019 年 3 月 1 日発行
Free

ラピス・インターナショナル
大阪市北区中崎西４－２－２１－６０９